
まどろみの月 めざめの陽

とおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まどろみの月 めざめの陽

【Nコード】

N3848T

【作者名】

とおん

【あらすじ】

あやかしをはじめとする、古種族と人間とが共存する世界。
千早は古種族狩りを生業とする影狩師だが、親友の恋人はあやかしだし、死にかけていたところを助けてくれたのもあやかしだ。
このまま影狩師でいていいのかと不安に思う千早だったが……

用語解説&人物紹介（前書き）

人数が結構増えたので作ってみました。
ネタバレもありますので、ご注意ください。

用語解説&人物紹介

《用語解説》

・古種族…いにしえよりある、人間とは異なる種族。

・あやかし…古種族最強の種族。

天地のことわりを知り、呪を良くするもの。

主として、長命。

残酷で気まぐれ。面倒くさがりとも言われている。

大地の気が乱れることにより、狂うことがある。

鎮守のために「主」として、その地に永くいるものもある。

・影狩師…あやかしを始めとする古種族を狩るための訓練を受けた者たちの総称。

そのすべてが白連塾に所属する。

かつては古種族と人間との間の問題解決請負人として作られた職らしい。

・白連塾…白連という名の男が作った祈塾を前身とする組織。

影狩師育成&派遣機関。

最高権力者は、通称「塾長」と呼ばれる。

・祈樹…白連塾の中庭にある樹。

白連塾の象徴とも言える樹だが、実際はあやかしの屍骸を苗床に生える樹。

夜になると燐光をまとう。

あやかしたちの間では「墓」とも言われる。

・封呪の民…呪術をよくする人間の一族。

そのために帝に恐れられ、都を追われた。現在は都隠の山に住む。

・時廻の民…またの名をときめぐりの民。語源は死穢。

骸を操る術に長ける一族。

帝に恐れられ、白連塾に追われて、今は都隠の山に住む。

・桜珠…桜ヶ淵のあやかしが創りだした宝珠。

薬にもなり、高級品。

桜ヶ淵の特産品。

・芽津…地名。白連塾の本拠地がある都。

・桜ヶ淵…地名。夜斗が護る地。

芽津からみて北にある、桜の名所。

・都隠山脈…地名。氷流が護る地。

鬼哭岳を主峰とする。

芽津から見て南にある。古種族が多く住む地。

・闇無神…創世の二柱の神のうちのひと柱。

光を司る男神。人間の守護神。

・輝無神…闇無の神の対となる、闇の女神。

古種族を護る神。

・御使い…神々の眷属の総称。

・聖言…闇無神をたたえる祈りの言葉。

・邪言…輝無神をたたえる祈りの言葉。

・牙獸…風視の乗り物にしている大型の猫科の獣。物騒な害獣。大きな牙が特徴。

《人物紹介》

・千早…本編主人公？ 女。

桜ヶ淵で死にかけていたところを氷流に助けられ、あやかし予備軍？になる。

一応影狩師。

・氷流…通称鬼哭。男。

都隠の山の主。気まぐれ？で千早を助ける。
ムダに整った顔をしているらしい。

・桜巳…桜ヶ淵の巫女。千早の友達。夜斗の恋人。

・夜斗…桜ヶ淵を守護する「主」。男。

銀鱗の肌を持つ。

あやかしには珍しく、人間に好意的。趣味？は桜珠作り。
狂って千早を殺しかける。

現在は氷流に封じられ、桜ヶ淵のそばで氷の中。

・多岐^{たき}…千早の友人の、一応影狩師。男。
ムダに前向き。

・風視^{かざみ}…通称？白連^{はくれん}。人好きのする好青年。ただし年齢不詳。
亡くなった奥さんの望みを叶えるべく頑張り中。
人間のふりをしているが、本当はあやかし。
白連塾を支える高名な影狩師で、「邪言使い」とも呼ばれ

る。

・美羽^{みわ}…風視岬の主だったあやかし。風視の奥さん。
どうやら人間に殺されたらしい。
人間とあやかしが共存できる世界を目指していた。
氷流とも仲良しだったらしい。

・那智^{なち}…白連塾を支える高名な影狩師。通称「聖言使い」。壮年の男。
闇無の神に仕える神官でもある。
あやかしを非常に憎んでいる。

・陵王^{りょうおう}…白連塾塾長。美青年。あんまり出番はない。
もとの白連塾の姿へ戻すべく、頑張り中？

・六花^{りっか}…氷流の眷属。美女。

・天花^{てんか}…氷流の眷属。少年。

・有明^{ありあけ}…金髪碧眼の、輝の御使い。男。

静けさが匂いたつような夜だった。

淵はぽつかりと底知れぬ無をたたえ、煙るように咲き誇る桜は闇の中、ほのかに淡く浮かび上がってなまめかしい。静寂は澄みわたって、月光ひかりが降る音さえ聴こえそうなほどだった。

「夜斗さん……」

こんなにも美しい夜なのに、大気は濃厚な負の気配に満ちている。血と、狂気と。にくしみと。

「夜斗さん……っ!!」

どこか空ろなその眼差しに、先ほどまでの優しさはどこにもない。いくらその名をくちびるにのせても、その表情はうごかない。

胸の奥がずきりと痛んで、ほんのわずかに動きが鈍った。

胸から背へと、衝撃が貫いたのはその一瞬だ。

「……や、とさん……」

祈りをこめて、もう一度その名を口にすれば、吐息と一緒に朱がこぼれた。

男の銀鱗に覆われた腕が、己の体を突き抜けている。

けれど、その事実はまだにも希薄で。まるで夢の中を漂っているような心地さえ、した。

男が無造作に腕を引き抜くのを、まるで他人事のようにみつめる。朱が面白いように噴き出しても。足元にまたたくまにできた血溜まりの中にくずおれるのも。

どこか遠くから、芝居でも見ているように感じられた。

どうして、こんなことになってしまったんだろう。

銀色の月光が、ふりそそぐ。

あたりはいやに静かだった。

腕を赤く染めて、立つ男は美しかった。

痛みはなく、ただ胸からこぼれる朱ばかりが熱かった。思考はいよいよぼやけ、すべてが儚く、なにかしらの考えが脳裏をよぎる端から解けて。溶けて。自分さえも知らない、心の底の闇の中へと墜ちていく。命がこぼれおちていくぶんだけ、身体のなかに、虚ろななにかがふくれていく。

桜巳……

沈んでいく意識の端で、ようやく形をとれたのは、優しげな面差しをした親友の姿だった。

銀鱗の肌を持つ男の——桜ヶ淵さくらがふちの主たるあやかしの傍らで、少し頬を染めて、桜巳ははにかむように笑っていたのだ。そして、男も——夜斗も、そんな桜巳を愛しげに見下ろしていた。

ふたりはとてもとても幸せそうで。

自分は、あやかしを狩ることを生業とする影狩師かげがりしだけれども。そんな二人を見ていれば、夜斗と戦う気などは起こらなかった。

夜斗はもともとあやかしにしては珍しく、人間に対して親切で、近くの里人たちからも主様と慕われているという話だったし、なにより親友の恋人なのだ。たとえ種族が違って、ふたりが惹かれあっているのなら、祝福したかった。自分が所属する白連塾はくれんじゅくにも、報告などしないでおこう。

夜斗が狂ったのは、そう心に決めた、ほんの数刻あとのことだった。

『殺して、くれ……！』

完全に狂気に吞まれる直前の、夜斗の悲痛な叫びを覚えている。

『頼む、早く殺してくれ！ このままでは、わたしは桜巳を、里の者たちを殺めてしまう……！』

あやかしは、古種族の中の最強種。永の時間を生き、天地の理を知り、呪を良くする存在。ときに人間さえ喰らう彼らは、いにしえの時代には荒ぶる神の眷属とさえ畏れられた種族だ。その身体能力ひとつをとっていても、一対一で人間に太刀打ちできる相手ではないのである。それはたとえ、あやかし狩りの組織である白連塾で厳しい訓練を積んだ影狩師でさえも同じこと。本来ならば、あやかしである夜斗をひとりで斃すことなど、自分にできるはずもないことだった。

けれど、夜斗の動きは明らかに鈍かった。

自分ひとりでも楽に斃せそうなほど。

幾度も幾度も、さあ殺せと言わんばかりの隙があった。

ただ、自分が殺せなかっただけ。

おそらく夜斗は必死に狂気と闘っていたのだろう。それを思えば思うほど、もしかしたら戻るのではという思いが頭をもたげて、止めを刺す手に迷いが生じた。そしてあげく、このざまだ。

桜巳の泣く顔が見たくなって、わずかな望みを捨て切れなくて。

結果、自分が死に掛かっては、世話はない。

自分が死ねば、桜巳の命も里の人たちの命も危ういというのに――誰も夜斗を止められなくなるのに。

おめでとくと、言いたかった。どうしても、言ってあげたかった。

ただその願いを捨て切れなくて、本当なら救えたかも知れない命を、無駄にする。里人たちからみればとんだ災難だ。

ごめんなさい

誰に向かつて謝りたいのか、今となつてはよくわからない。

どの道自分の命は残りわずかで、できることといえば、おっつけやってくるであろう白連塾からの応援が到着するまで、里人たちが生き延びられるように祈ることくらいだが、そうなれば動きの鈍い夜斗は事情を知らない応援の影狩師たちに情け容赦なく狩られることになり、桜巳はやっぱり泣くのだろう。

いったい自分はどうすればよかったのか。

桜巳にわらっていてほしただけなのに、どうしてこうも上手くいかないのだろうか。

「なぜ、殺さなかった？」

死ぬ前の走馬灯、ではないが。

とりとめもなく流れていく、あやふやな思考を中断したのはひんやりとした男の声音だった。

一瞬、夜斗が正気に戻ってくれたのかと思ったが、そんな都合のいいことがおこるはずもない。なによりぼやける視界に映る色彩が違ふ。夜斗が淡い海の色なら、今視界に映っているのは新雪の白。

「桜ヶ淵の裡には、せめぎあう二つの心があつた。狂気と理性……」
かすむ視界を懸命にこらせば、月明かりにたたずむ男の姿があつた。

ましろい髪を無造作に束ねた、濃い黄金の双眸をしたあやかしだ。
「殺せたはずだ、影狩師。なぜためらった？」

あやかしは影狩師にとっても恐怖の対象だが、ここまで死に近づいていてはそんな心持にもなりはしない。男の声音がひっそりと闇

に溶けていくのを、ただ、聞いた。

なぜ。

問われたその言葉が脳裏で意味をなすまでに数瞬を要する。思考はどこまでもぼやけて、言葉になる前にほろほろと壊れていくようだ。

「とも、だち……」

それでも、ようやくとその切れ端を捕まえて言葉にすれば、あやかしは非常に不思議な顔をした。

「ともだち？ お前は桜ヶ淵の友人なのか？」

「ちが……ともだ、ちの……こい、びと」

言葉を紡ぎだすことがひどく億劫で、うまく声になったかどうかもわからなかったが、とりあえず伝わることは伝わったようだった。不思議そうだったその表情が、ほんのわずかに笑みを浮かべる。

「……夜斗、さんは……？」

あやかしと会話をすることで、ほんの少し意識が明瞭になった気がした。

そうすれば、今度は夜斗のことが気にかかる。

狂気に吞まれた夜斗は憎しみと破壊衝動に支配されていて、いくなれば見境がない。裡でせめぎあう心のせいでいくぶん動きは鈍いものの、それでもこのあやかしと瀕死の自分との会話を呑気に待つてくれるわけがなかった。それなのに、もう随分と、夜斗からの攻撃を受けていない気がする。

そのことを不思議に思っ問うて見れば、あやかしはいささか呆れたような顔を作った。

「桜ヶ淵ならおれが封じた。だが、影狩師。お前はまず己の心配をすべきではないのか？」

封じた……？

あやかしは確かにそう言った。

いつの間には思うものの、もとより人間よりもはるかに良く呪をするあやかしのこと。理性と狂気の狭間で苦しみ、動きの鈍かった夜斗を封じることなどは造作もなかったのかもしれない。

なにより、あやかしは偽りを口にしない。

だから、あやかしが封じたといえば、間違いなく封じたのだろう。それではもう、夜斗が桜巳を殺すこともなければ、里が滅ばされることもない。だれかに夜斗が殺されることもないのだ。

ほっとすれば、気持ちが緩んだ。

途端に疲労感が増し、せつかく明瞭になりかけた意識は、ふたたび空虚な闇に落ちて行こうとする。

「……死ぬのか？ 影狩師」

ひんやりしたあやかしの声が耳を打ったが、意味を解することもないほどに現実はずいぶん希薄だった。

あやかしはさらに何かをいったが、それが届くこともない。

ただ朱があふれる胸ばかりが熱く、命をこぼしていく。

耐え難い眠気にとらわれて、まぶたをそつと下ろそうと思った。そうすれば、楽になる。

もう、なんの心配もないのだ。

疲れたから、少しねむろう。次に起きることができなくても、もう目を開けていられない。

「影狩師……」

せつかくねむろうと思ったのに、ひんやりと頬に触れたなにかが眠りを妨げた。

その感覚は遠く隔たっていたけれど、冷たさははらむ声音が、なぜだか半分とけかかっていた意識を揺り起こす。

もう一度目を開くのはとてつもない労力だったけれど、その声に

惹かれて、わずかにまぶたを持ち上げた。己というものを、今一度認識したような――いや、私は私だったのだとはじめて知ったような妙な気分になった。

「まだ、死ぬな。もう少し生きている」

あやかしの自分勝手な言い草が聞こえて、思わず口元が苦笑に緩む。

死ぬなといわれて、生きていられるのなら。

この世に死ぬ人は誰もいなくなってしまう。

無理だとかぶりをふろうとすれば、あやかしの手がまた頬に触れた。

「影狩師、名はなんという？」

名。名前。

なまえ、その存在の本質をあらわすもの……

ただのひとならいざ知らず。呪を良くするあやかに、自ら名を明かすなど正気の沙汰ではない。

名を告げる。

それは、己の支配を相手に許すことに他ならない。

「ち、はや」

けれども、名はくちびるを勝手に滑り出て、あやかにその存在を告げる。

もはや数刻ももたずに死にいくこの身。

その名を惜しんでも仕方ないという思いのせいか、あるいは。

あやかしのひんやりとしたその声に 力があつたのか。

「千早」

吐息の連なりのような名乗りを、あやかしは確かに聞いたらしく。一音一音を確かめるかのように、その名を繰り返す。

「生きていろ、千早。おれの 力 を分けてやる」

いったい何の気まぐれか、あやかしは確かにそう言った。
その直後、触れてくるくちびる。
かすめるように。 ついで深く。

情ではなく、まして愛でもなく。

けれども、確かに流れ込んでくる何かが、沈んでいく意識を死の眠りから引き離し。まるで冗談のように、胸に開けられた穴をふさいだ。

ほんの一瞬。しかしそれはひどく永く。
ほんのせつな。しかしそれは確かな変質。

なにかが変わるのを、確かに感じた。

力の戻った手で、くちづけるあやかしを押しつけようとしたその時。

それよりも一瞬早くはなれたあやかしは薄く笑って、ひんやりとした指先で額に触れてきた。

「少し、ねむれ」

力 ある、言葉だったのかもしれない。

死への誘惑とは確かに違う、抗いがたい眠気にたちまち意識をとられる。

墜ちていく直前、舞い散る桜の花びらを見た。

桜吹雪に抱かれるように、たたずむ氷塊も。

その中で瞳を閉ざした夜斗も。

すべてを照らす静かな月も……

青く澄んだ空、白い雲。

陽射しは暖かく、頬をなでる風は少しばかりひんやりとして気持ちがいい。

人は絶え間なく行き交い、客引きの声もにぎやかだ。

「ヒマだわ……」

そんな人波をみつめ、千早はぼつりとつぶやいた。

「ヒマとか言うな！ やる気なくなるだろうが！！」

そのつぶやきに間髪いれずに噛み付いたのは、千早よりもはるかにやる気のなさそうな、短髪の少年だ。先ほどから足元の小石を蹴飛ばしてみたり、地面に足で穴を掘ってみたりと、退屈さを全身で表現している。

「なくなるほどのやる気があるわけ……？」

「なんだと！」

「うつん、なんでもない……」

はあ、と千早も少年に負けず劣らずやる気のないため息をついて、また流れる人波に目をやった。

何の変哲もない、平和な市場だと思う。特になにかしらの異常があるわけでもなく、時折起こるいざこざも日常の範囲で。いったい自分が何のためにここに夜明け前から突っ立っているのか、実のところよくわかっていなかった。

「それにしても、那智様^{なち}はなんだって、ここに立っているなんておっしゃったのかしらねえ」

ことのはじまりは、昨日の夕方までさかのぼる。

昨日は、特に千早に当てられた古種族狩りの仕事もなく。苦手な分野を勉強をすべく、資料室にて分厚い辞書と格闘していた時のことだった。

「ほほお。感心だね」

少し嫌味を含んだ声音で、というのは千早の癖みも多少は混じっているのかもしれない。

声をかけてきたのは、壮年の神官姿の男で、白連塾でも一、二を争う実力の影狩師だった。

「そなた、明朝より市に立っておれ。わしが使いをよこすまで、励めよ」

なぜ、も。なんのため、も。

那智はまるで説明をしなかった。

けれど、それに異を唱えられるほど、千早は無知でも無謀でもない。権力に逆らうのは面倒だし後々厄介だ。とりあえず巻かれておけと、今現在にいたるのだが。

「あやかしがでる、とか。……あるわけねえよなあ。だって芽津^{うめ}だぜ、ここ」

古杜半島の西側の付け根に位置するここ、芽津の都は、別名を『あやかし狩りの都』という。なんのことはない、ただ単に、唯一の古種族狩りの組織たる白連塾がその本部をおいているから、というだけなのだが。

いかに相手があやかしといえど。影狩師が数人でかかれば倒せない相手ではないし。

そもそも古種族の中でもあやかしという種族は面倒くさがりが多いらしく、強いて影狩師とことを構えようとはしないものが多かった。そんな彼らがわざわざ芽津にやってくる。という可能性は極めて低い。

「なあ、千早。お前なんで命令された時に聞いとかねえんだよ」

「多岐^{たぎ}……」

自分で答えを求めることをあきらめたらしい少年が八つ当たり気味言ってくるのに、千早は思わず口をへの字に曲げた。

「んだよ」

「じゃあ聞くけどさ、あんただったら、那智様に命令されて、なんですか？とか聞けんの？」

問えば、一瞬の沈黙。流れる微妙な空気。

「……ムリに決まってるんだろ」

ぼそりと少年・多岐がつぶやいたのを最後に、二人の間に会話は途切れた。

無言のまま、行き交う人々を眺め、見つめ、あくびをし。ため息をつき。

「……おなか減った」

「言うな!!!」

ふと団子屋ののぼりが目に入ったとたん、千早の口からこぼれた言葉に。多岐はまたすごい勢いで噛み付いてきた。

「俺だつて腹が減ってるんだ!!!」

そりゃそうだろう、と思う。

まだ夜も明けきらぬうちからここに立っているのに、もう太陽は中天に差し掛かっている。ちょうどお昼時で、おなかも減る頃合だ。

「疲れた……」

「だから言うな!!!」

仕事で走り回ってるときはたいして思わないのに。かえってじつとしていたときのほうがだるいのは何故だろうというも思う。

それにしても、多岐は元気だ。

千早にはいちいち噛み付く気力はもはや残っていない。

団子ののぼりが、風にひらひらと揺れているのまでおいしそうに見える。

とりあえず休憩がしたい。なにもしていないけれど。

とりあえずご飯が食べたい。団子ご飯じゃないけれど。

那智の使いは一体いつ来てくれるのだろうか。というか、そもそも本当にきてくれるのだろうか。

「随分と長い人待ちですこと」

くすつと笑う女の声が、間近で聞こえたのはその時だった。
気配を感じなかったのは、ただ単に疲れて気が緩んでいたせいなのか。

反射的に構えた千早が見たのは。長い髪を古風な形に結い上げた美女で、手には何故だか、先ほどから食い入るようにしてみているのぼりの団子屋の団子がある。

「そう警戒なさらないで下さいませね。わたくし六花りっかと申しますのよ、千早様」

嫣然と笑う女は美しかったし、特に敵意も感じない。
けれど。

なにかしらの違和感がある。

空気は張り詰めているし、流れる時間が歩みを遅くした気さえする。

「闇無様の光は、われらには毒でございましてよ。あまり長くあたっていることはお勧めできませんわ」

「何のこと……？」

闇無は、光の男神の別名で、いうなれば太陽のことだ。光に当たると女がいつていることは理解できる。けれど、理由がわからない。

「われらは輝無様の眷属かくななれば」

闇の女神の名をあげて、女はさらにうつすらと笑う。

「もう少し日陰にお入り下さいませ？　那智如きの思惑にはまるのは、わたくしといたしましても業腹ですわ」

「どういう……」

女が何を言おうとしているのかがよくわからない。

けれど、問いただす前に。女は手にしていた団子の皿を押し付けてくるりと踵きびすを返す。

「あああ！」

ぐにやりと景色がゆがんだ気がしたのは、もしかしたら気のせい

ではないのかもしれない。

「千早、お前いつの間に団子を……！」

ただ、夢ではなかった証拠に、千早の手にはしっかり団子の皿があつて。

「抜け駆けするなんてずるいぞ！ いつのまに買いにいったんだ！ ずっと俺の横に立ってたと思つたのに……！ よこせ……！」

わめく多岐が非常にうるさい。

先ほど感じた違和感はきれいさっぱり消えているし、時間の流れも特に遅いという気はしない。

さっきの女はなんだつたのだろう。

多岐は先ほどの女にまるで気づいていないようだし、なんらかの呪が使われたことは間違いがなさそうだが、何をしにきたのかがいまいちわからない。

「……あやかし？」

「よこせええええ……！！！」

闇の女神の眷属だといつていたから、もしかしたらそうなのかもしれない。

芽津に入り込んでくる物好きがいるとは驚きだが、元来あやかしとは気まぐれな存在だ。

ただ気になるのは、千早の名前を呼んだこと。

よくわからないが、なにやら面倒ごとの予感がする。

ぎゃあぎゃあとわめいている多岐はとりあえず無視をすることに
して。

皿の団子をぱくりと食べて、千早は深々とため息をついた。

陽が傾き、市場を行き交う人々の姿がまばらになってきても、那智からの使いはまだ来ない。

団子はとうに食べ尽くしたし、多岐もさすがに疲れたのか、だいぶ静かになっていた。

もはやきちんと立っという気も失せ果てて、木陰で座り込んでいたが、半日以上も待たされているのだから、これくらいは許されてもいいだろう。

「那智様こねえな」

呟く多岐の声に元気はない。

「これさ、もう誰もこねえクチじゃねえ？」

千早は驚いて、まじまじと多岐を見つめる。

んだよ、という不機嫌な眼差しが返ってきた。

「いやあ、あんたが後ろ向き思考とか珍しいなと思ってさ」

「千早、お前俺のことなんだと思っただよ」

「無駄にうるさい前向き思考少年？？もしくは無謀な猪突猛進少年」

ろくでもねえな、と多岐は呟いたが、やはりそれ以上は突っ込んでこない。疲労が限界にきているのだろう。

遠くにかすむ山脈の向こうに、太陽がにじんで消えていく。

紫がくすんだ空。ひとつふたつ、瞬きはじめる星。暗くなる空とは対照的に、今まで白くまどろんでいた細い月が銀の光を帯びはじめる。

さつきよりも、少し体力が戻ってきたような気がした。

我らは輝無様の着族なれば、と言った女の声が耳の奥によみがえる。

やはり、自分はその日、人とは『違っ』てしまったのだろうか。

おれの 力 を分けてやる。

そう言ったあのあやかしとは、あのときから会ってはいない。というよりも、会えないのだ。

目覚めた時には既にその姿はなかったし、探しているいろいろ問いただそうにも、手がかりも何もない。おまけに状況から、夜斗を氷塊に封じたのは千早だということにされてしまっていたし。誤解だといくら言っても聞き入れてはもらえず。桜巳は千早を見るたびに恨めしげな眼差しをするし、夜斗を封じるほどの呪の使い手ということで里人からは遠巻きにされる。

第二の故郷とまで思っていた桜ヶ淵だったが、だんだんと億劫になって。気がつけば顔を出さなくなって、もう季節が二巡りするだけの時間すぎている。何とかしなくてはとは思っても、どうすればいいのか、皆目見当もつかない。

何度目かわからないため息をついて、千早は空を仰ぐ。

先ほどの女がなにかを知っていたのかもしれないと思うけれど、すべては後の祭りだ。もう一度出てきてくれれば、問うことも出来るだろうが、人生なかなかそううまくは転ばないのだ。

「わあ、キレイね！」

あとから思えば、なぜその言葉だけを雑踏の中から拾えたのかわからない。

つらつらと自分の思考に沈む千早の耳に、その言葉はいやに明瞭に飛び込んできた。

「いいでしょ、これ桜珠おつじゆっていうの！ 桜ヶ淵の特産品だよ！」

年頃の娘がふたり、楽しげに話しながら、横を通り過ぎていくのが。白黒の世界でそこだけ色づいているかのように、はつきりとわ

かった。右側を歩く娘の手首に、桜色に色づく珠を連ねた腕輪がはめられている。

遠目だったけれど、それは確かに桜珠だと思った。

桜珠——桜ヶ淵に映った桜の色を呪で絡めとって『夜斗が創り出した』もの。

どくん、といやな風に胸の奥が脈打つ。

あれから二年。

夜斗が氷塊に閉じ込められてから、新しい桜珠は市場に出回ってはいないはずだ。

病を癒す薬としても用いられる桜珠の値はつりあがり。庶民が一年分の給料を吐き出したとて、ひと粒買えるかどうかというほど高価な代物となっていた。

そんな高価な代物を、町娘が、腕輪にしている？

とてつもない異常事態だ。

聞かなくては、と思った。

なにを？そんなことはわからない。

わからないけれど、このまま見過ごしては、いけない。

そんな気が、する。

頭の中をいろいろな情報が思考が一瞬にしてすぎていく。

けれど、実際にはそれほど時間は過ぎていなかったようだ。

首をめぐらして、通り過ぎた娘たちの姿を探せば、まだそう遠くないところにその後姿があった。

「あの……！」

数歩まろぶように踏み出し、声を上げる。

多岐が不思議そうに見ていたが、説明している余裕は今はない。

「すみま……」

「すみません、ちょっとお聞きしたいのですが」

千早よりもほんの一瞬早く。娘たちの行く手をさえぎった人影があった。

年のころなら20代後半。人好きのする顔立ちの青年が人のよさそうな笑みを浮かべて娘たちに話しかける。

「その腕輪、素敵ですね」

偶然、といえるのだろうか？

「どこで買われたのですか？ 彼女に贈りたくて……教えていただけませんか」

にこにこと問う青年には何の思惑もないようには、見える。見えるけれども、偶然というには出来すぎている。

娘たちにいろいろと問うていた青年が、ふと気づいたようにこちらに視線を向けてきた。

ほんの一瞬、ひそめられる眉。

けれど次の瞬間にはにこりと笑い、かすかに。本当にかすかにかぶりを振ったのだ。

何もするなとでも、いつかのように。

娘たちは顔を見合わせて、それからちよつとはにかむように笑った。

「さつきあつちのとおりに出てた、出店で」

答えたのは、腕に腕輪をはめた娘だ。

「でも、もういないかも。私が買ったのが最後の一個だったし」

青年は、そうですか、ととても残念そうに肩を落とした。

見ているこちらが気の毒になるほどの落胆ぶりだ。

「どんな方が売っていたんでしょう？ 僕、ちよつと探してみても、次に入荷したら売ってもらえるように交渉してみたいんです」

すぎるように乞われて、娘はちよつと困ったような表情になる。

「被り物を深くかぶっていた方だったので顔まではちよつと……」

「おい、千早、どうしたんだよ？」

青年と娘たちとの会話をみつめていると、じれたように多岐が声をかけてきた。

「あ、うん。ちよつと……」

「なんでもいいけどさあ、もう誰もこないっぽい気がするから、帰らねえ？ 俺疲れちゃったよ」

木の根元に座り込んで、がっくりとうなだれる多岐の姿は、少なからず哀れみを誘う。

「んじゃあ、帰ろつか……」

桜珠の腕輪のことは気になったが、青年も娘たちからそれ以上情報を聞き出せないようだったし、千早にしても、それ以上のことはどうしようもない。

大儀そうに立ち上った多岐とともに、白連塾にむかって歩きながら、千早は深いため息をつく。

今日は本当のため息率の高い日だ。

那智にはすっぱかされるし（おそらく）、変な女は現れるし、あげくは市場に出回っていないはずの桜珠の腕輪だ。おまけになにやら変な青年まで登場した。

疲れ果てた多岐との間に特に会話はなく。

白連塾の寮にたどり着いたところには、もはや日はとっぷりと暮れていた。

「私、本部で担当に報告だけしてくるわ」

空に浮かぶ月は、いまやそこだけくつきりと闇を切り取ったかのように、輝いている。

芽津の都の中央部に位置する白連塾は、皇城よりも巨大な敷地を有する治外法権的地域だ。その頂点に君臨するのは『塾長』じやうちやう「陵王」。当人を見たことはないが、ひどく見目麗しい中性的な外見の青年だという。まあ、会うこともないだろうから、どうでもいい雑学的知識ではあるけれど。

敷地内には、影狩師を育成するための学舎をはじめ、白連塾関係者が寝泊りする寮、日常品を買いそろえられる総合的な商店がある。通常影狩師は、二人一組で任務に従事する。

今日の千早のような、上司（今回は那智だ）に直接仕事？を言い付かることは稀で、基本は各地の支部から舞い込んだ依頼を、担当者から回されてこなすことがほとんどだ。かかる日数はまちまちだが、完了時以外にも、中途経過や起こった問題などを報告する義務があった。

「悪いな、頼むわ」

珍しく殊勝な返事をした多岐と別れ、千早は学舎のほうへと向かった。

着いた先ではあいにくと担当者は不在で、連絡表に、那智からの

使いを一日待っていたが結局会えなかったことをまとめて提出する。迷った拳句に、あやしげな女のことと桜珠のことは書かずに済ませた。

自分でもよくわかっていないことをいろいろ聞かれるのはめんどくさかったからだ。

「あゝ疲れた」

首を回せば、ちょっと笑えるくらいにばきばきと音が鳴った。

「おつかれさま」

首が鳴る音が聞こえたのかもしれない。

くすくすと笑う声とともに、ねぎらいの言葉が降ってきた。おつかれさまです、と反射的に返しながら、首をめぐらし。思わず、目を疑った。

「あなたは……」

『本部』の入り口にもたれるようにしてこっちを見ていたのは、先ほど桜珠の腕輪の件で娘たちに声をかけていた、人好きのする顔の好青年だったからだ。

「やあ、さつきぶり」

ゆらゆらと蠟燭の灯が揺れる。

薄暗い廊下で、彼はくちびるを笑みの形にひいた。

「君が『千早』ちゃんなんだろ？」

穏やかな声音に口調。

けれど、妙に薄ら寒い気になるのは何故だろう。

「……あなたは？」

見知らぬ相手に名を呼ばれるのは、今日既に二回目だ。

ここは白連塾の内部、おそらく彼は影狩師で。よもや古種族ではなからうが、それはさておき、あまり気分のいいことではない。

「風視^{かざみ}って呼んでくれていいよ」

どこかで聞いた名前だと思ったが、どこで聞いたのだろう。

「といういかさ、那智に目をつけられてるってのは君なんだろう？」

「は？」

何の話だと、思った。

目をつけられている？

そんな話は聞いたこともない。

だから本当に、素っ頓狂な声が出た。

「なんだ、知らないのか。那智はさ、ここ2年ほど白連塾を空けていたんだよね。この話は知ってる？」

知らなかった、と言えば怒られるのだろうか。

那智と呼び捨てにするくらいなのだから、自分が知らないだけで、ちよつとくらいは偉いひとなのかも知れない。少なくとも講師級？　と思いつつも、口をつぐむことで回答とした。余計なことは言わないほうがいいに決まっている。

「桜ヶ淵の事件のあとさ。那智はちよつと厄介ごとに巻き込まれた……　というか、自分から巻き込まれにいったというかさ。勝てない喧嘩を売るとか、はつきりいつて馬鹿以外の何者でもないと思うんだけどさ？」

「あの……　どういう……」

あまりの毒の吐きように、千早が頬の辺りをひきつらせると、風視はにんまりと笑った。

「まあ、とりあえずさ。勝てない相手に喧嘩うって重症、完治までにほぼ2年かかったってわけさ」

ざまあみろ、とても言いかねない様子で、風視は少し首を傾けた。「ちようど、白連塾に戻ってきたのが昨日。さっそく君にちよつかいかけたってわけだ。とりあえず大事にならなくてよかったよ」

はあ、と間が抜けたような相槌が千早の口からもれた。
まったくもって、さっぱり意味がわからない。

「わからないんだ？」

くすくす笑う風視は本当に楽しそうで、人のよさそうな顔をして
いるけれど、もしかしたら根性が悪いのじゃないかとか、そんなこ
とを思ってしまう。

「君さ、有名人なんだよね」

「……ゆづめいじん??？」

頭の中で、その単語がきちんと意味をなさなかったのはムリもな
い話だ。

ここ、白連塾にやってきたのが7つのころ。その後10年ほど、
影狩師になるべく知識を蓄え、実戦訓練を受けて経験を積み。よう
やっと影狩師になれたのが2年ほど前だが。まだ新米もいいところ
だし、学科・実戦何をとっても、平均以上に出来たことなどない。

仮に何らかの任務で死亡したとて、あの程度の力じゃちよつと荷
が勝ちすぎたかなーと簡単に忘れ去られてしまうくらいの水準なの
だ。『掃いて捨てるほどいる』程度の実力。これで有名人になれる
なら、むしろ有名でない人がいなくなってしまうだろう。

「そうそ、すごく有名だよ？ まあ、一般程度の影狩師じゃ、知ら
ないかもしれないけどさ」

「……はあ」

「だって、すごいことだよ？ 暴走したあやかしと対峙して生き残
ってるとかさ」

返事をするまでに、たつぷり数秒は要したように思う。

いやな汗がつーつと背中を伝っていくのは、おそらく気のせいだ
はない。

「あの、今なんて？」

そういえば、この青年。先ほども「桜ヶ淵」とかいつていたような気がする。

ということは、なにか？

二年前の、あの悪夢の日。

もしかしたら、那智様もあの場にいたというのだろうか???

いやでも、まさか。

影狩師は、あやかしをはじめとする古種族を狩るために日々訓練に明け暮れているもので、間違つても「あやかしと普通にしゃべったり」「あやかしと仲良しになったり」「あまつさえ「あやかしに助けてもらったり」していいものではない。

規定にこそないが、そんなことは言うまでもなく常識で……というよりも。

ふつつあやかしのほうから、近寄っては来ないものなのだ。めんどくさがりなのだから。

いやいや、今はあやかしの一般的な性格とかどうでもいいから。

千早の思考ははつきりいつて混乱を極めた。

あの、二年前の桜ヶ淵。夜斗が狂ったあの日。すべてが千早のせいになったあの夜。

もともと桜ヶ淵の里人たちは、あやかしである夜斗と仲がよく、夜斗の存在を白連塾には隠していたし、千早もあれ以上桜巳や里人たちを刺激しないように何も報告していなかった。

だから、あの一件は白連塾のだれも知らないはずなのに。

「まあ、あれだよ。桜ヶ淵の理性の強さもすごいけど、鬼哭きこくに殺されなかったって君のその悪運がすごいよねえ」

けれど、風視は千早の一縷の望みをあっけなく断ち切った。

「あ、鬼哭つてのは、君を助けた冷たい面差しのあやかしね」

「ご丁寧にそんな説明までつけてくれる。

どきどきと心臓がいやなふうに脈打って、手足の先が冷たくなってきた。

なにかを言おうと思うのだが、とにかく何も言葉にならない。

呼吸が否が応にも浅くなる。

「そんなに怖がらないでよ。僕、別に君をどうこうしようってわけじゃないんだからさ」

軽く千早の肩をたたき、風視はにつこりと笑ってみせる。

場所を移そうといわれて、そのまま蠟燭の灯りが揺らめく廊下があるき、中庭のほうへとやってきた。中庭にあるのは夜になれば燐光をまとう祈樹きじゆという不思議な樹だ。

風視はすべらかなその幹に手を滑らせて、飴色に輝くまなざしで千早を見つめた。

「ざつくばらんに言うとき、君が警戒すべきは、僕じゃなくて那智なんだよね」

迷走した思考のまま、千早はただまたいた。

「那智はあやかしに関わるものすべてを憎んで。だから、二年前、桜ヶ淵であやかしと関わったであろう君に目をつけて、尻尾をつかみ、できるなら排除しようとしている」

「はい、じよ……？」

ずいぶんと、穏やかならざる単語だ。

「ふつう、狂ったあやかしを前に、生き残るなんて不可能だ。いつちやなんだけど、人間はあやかしに敵わない。まして理性ぶっ飛ん

でるあやかしなんて、歩く狂気だよ。見境もないしね。そんな狂ったあやかしを止めようと頑張ったのはえらいと思うけどさ、はつきり言って無謀以外の何者でもないね」

深まる夜。

ばら撒いたような星はきらめいて、祈樹の輝きが増してくる。

「ふつうは死んで当然の状況だった。けれど、君は生きている。おまけに狂ったあやかしは封じられている」

風視はまた樹の肌をなでた。

「ここで奇跡が起こったと思えるほど、僕らは平和な日常を生きたくないよ。狂ったあやかしを封じることができるのは、同等あるいはそれ以上の力を有するあやかしのみ。となると、君が助かったのは、あやかしを封じたあやかしに、助けられたと考えるのが順当だ。そうだろうか？」

「……あやかしが、ひとをたすけるとか……ふつうはないんじゃない」

「普通はね」

千早の反駁はんぱくに、風視はあっさりとうなずいた。

「でもない話でもない。あやかしは、影狩師が思っているほど凶暴でも無慈悲でもないよ。ただめんどくさがりなだけ」

みもふたもないことをさらりといって、風視はその場に座り込む。祈樹に頭をもたせかけて、かすかに笑った。

まるで恋人にもたれるように、風視は祈樹に身を預ける。

はらはらと舞い落ちる祈樹のはなびらが、まるでそれに応えているようだ。

「あやかしが人間を、助ける。まあ珍しいけれど、今までそういう例がなかったわけじゃない。そのことはもちろん那智も知っている。だから、那智は考えたはずだ」

風視はうつすらと笑みを深くする。

「君はあやかに助けられたのではないか、とき。それから多分、狂ったあやかに殺されかけたところを救われて、もう人間じゃないなくなったのじゃないか、とかさ」

淡々とつむがれる、風視の推測。

返すべき、言葉はない。

「僕は今日、珍しく2年ぶりくらいで芽津に戻ってきたんだ。めんどくさいやつだけど、那智は一応同僚だしね。怪我が完治して復帰したのなら、おめでとくらいは言っておあげるべきかと思ってさ」

イヤミを言うの、間違いじゃ…

千早はちよつと思つたが、懸命にもそれは口に出さずに飲み込んだ。

風視と会ってから、まだほんの少ししか立っていないけれど。

激しく面倒ごとが起こりそうな予感がしまくっているけれど。

とりあえず風視は嘘をついているようではなかったし、害意を持っている風でもない。

それなら。

隠せてると思つてた2年前のことが実は結構公然の秘密だったのなら。

誰が何をどこまで知つてて、どこがまずいのか。

それくらいは知っていたほうがよさそうだ。

風視はなかなか素敵な性格の持ち主のようだけれど、ひとまず千早が知りたいことの情報は持つていそうだったから、特に口を挟むではなく。風視の次の言葉を待った。

「そうしたらさ。陵王^{じやうおう}がさ。那智^{なち}がなんか君にたいしてたくらんでいるかもーっていうだろ？ もう焦ったよ。君に何かあったら、僕も無事じゃられないしねえ」
「え？」

千早自身の無事と、風視の身の安全の間にいったいどういう関係性が有るといふのか。

「まあとりあえず、太陽の光を一日中浴びさせて、尻尾を出させようとか。比較的温厚な引つ掛け方でよかったよ……。弱いあやかしには、太陽の光は毒も同然だからね。弱って化けの皮がはがれる」
「いえ、そうじゃなくて」

見当はずれの説明をしてくれる風視に、千早はかぶりを振った。

「なんで、あなたにも危害が及ぶのですか？」

「え」

千早の問いに。今度は風視がまたたいた。

「なんでって……だってさ。そんなの鬼哭に殺されるに決まってるじゃないか」

「なぜです？」

「なぜですって……えーー本当に素で聞いているの？」

祈樹にもたれていた身を起こし、風視は愕然とした様子で千早の顔を見上げてくる。

「あのさ。君は鬼哭に助けられたんでしょ？ あの桜ヶ淵で」

「助けてくれたのは真っ白な髪のあやかしでしたけど、名前までは

知りません」

「いや、鬼哭っていうのは通り名というか何というか…」

困惑しきったように、風視はゆっくりともう一度まばたいた。
きこだけ

「鬼哭岳の主なんだよね、あのひとは。桜ヶ淵の友達で、あの日は桜ヶ淵を助けにきたんだ」

古杜半島こもりを東西に分断する都隠山脈とがくし。鬼哭岳はその主峰で、人間の侵入を固く拒む剣山だといわれている。芽津からも天気がよければ頂を白く染めた鬼哭岳を南側に望むことが出来る。

あのあやかしは、あの山の主なのか。

感慨深く、そんなことを思う。

「なぜ君を助けたのかは、僕にはわからないけどさ。こないだ会った時…半年くらい前かな。その時に、影狩師を助けた話をきいた。君の名前も」

と、すると。

あのあやかしは、自分のことを覚えていたということになる。
気まぐれで助けた人間など、もはや忘却の彼方かと思っていたが。

いや、その前に。

「……きいた？」

語られなかった、その主語は？

「……………だれに？」

「鬼哭に??」

なぜだか風視も疑問系で答えてくれる。

「鬼哭って、あやかしですよネ？」

「うん、そうだね」

「あなたは、影狩師ですよネ？」

「うん、一応ね」

「影狩師なのに、あやかしとしゃべったのですか？」

「しゃべっちゃいけないという決まりはないよ」

いま、とんでもないことを聞いたような気がする。

「いや、そういうことではなくて……あやかしって、影狩師にとっては。狩る対象なのでは？」

確認するように千早が言えば、風視はうーんとうなった。

「まあ、いろいろな状況があるから、十把ひとからげにはできないな」

ごまかすようにそんなことを風視はいつて。

「でもまあ、鬼哭との付き合いは長いよ。だから、あの人が力を割いてまで助けた君を、不幸な事故でなくすことだけは、絶対に避けたいと思ってる。そんなことになったら、白連塾は壊滅させられる……」

考えただけでもぞつとすると呟いて、風視は自らの腕を強くさすり。

さらに信じられないことを口にしたのだった。

5（後書き）

千早と風視のお話が終わりません…
はやく次にすすみたいのですが…もう少しです><

「まあ、そんなわけだからさ。君、僕と一緒に桜ヶ淵に行こうよ」
「……は？」

「またもや素でそんな声が出た。」

「あやかしくて生き物は執着心が強いんだよ。君のことだってほてるわけじゃなくてさ、ただ単に人間にとって2年ってのが結構な時間だって事を理解してないだけなんだ。数千年を軽く生きる種族だからね」

「はあと頷くと、風視は困ったようにちよつと笑った。」

「その気持ちもちよつとはわかるんだけどね……。僕だって陵王に怒られるから、月がひとめぐりする間には一回くらい帰ってこようと思うんだけどさあ。気がついたら、季節が4回5回くらい繰り返されちゃってるんだよね」

「ひとつきと4、5年てものすごい差だと思う……」

「そう思ったものの、それを口に出すことは出来なかった。」

「ふと、気がついたことがあったからだ。」

「4、5年というか、10年単位なんじゃありませんか」

「ずっとどこかで聞いた名前だと思っていた。」

「講師級の影狩師だからかと思っていたのだが、もっと有名だった。」

「あれ、知ってるんだ？」

「そもそも知らない人のほうが珍しいと思いますけど」

「そう？」

「ただ、同一人物だと思わなかったただけだ。」

「放浪癖で有名な影狩師。一回任務に出ると10年はいつも帰ってこない。白連塾の影の支配者。那智さえ軽くないほどの凄腕の影狩師。」

「邪言使いの風視さん、ですよね」

その存在はもはや伝説級だ。

「でも私、風視さんは100歳近いおじいちゃんだと思ってました」
風視に関する噂は山ほどある。

ただ、その伝説とも言える逸話は、どう考えても風視は100歳近いと思っていなければつじつまがあわないものばかりだ。

少なくとも、那智とは同程度の年齢でなくてはおかしいはずだ。
けれど、目の前にいる風視は、いくら多めに見積もってみても、

30歳そこそこという外見に見えた。

「まあ、100歳ではないけどさ。いろいろあるんだよ」

ごまかすように笑んで、風視はそれよりも、と話を続けた。

「とりあえず、僕と那智が仲が悪いつて言う話は有名だろ？ なぜかっというと、僕があやかしと仲良しだからなんだ。まあ長く生きてるとイロイロあるってことなんだけどね。そんなわけで、君には僕と一緒に行動してほしいんだよ。そのほうが君を守るし、何かの弾みで事故って鬼哭にうちを壊滅させられる、なんて確率も減らせると思うんだ」

風視はよほど、鬼哭と名乗るあやかしが怖いらしい。

先ほどと同じことを繰り返して、深々と息をついた。

「君だって、桜ヶ淵のこと、気になるだろう？　なんで今、桜珠がでまわるのか、とか。桜ヶ淵のその後とか」

だから、いこう？

そう誘う風視のまなざしは深い。

どうせ、2年前の一件が公然の秘密なら。

あやかしを憎んで有名な那智の影響が強い白連塾にいるよりも。

どうもあやかしと交流がありそうな風視と行くほうが、いろいろ好都合かもしれない。

そんなことも思った。

「桜ヶ淵には、友達がいるんです」

行くという代わりにそう言えば、風視はにこりと笑った。

「僕と一緒に行くというのは陵王には言っておくよ。2、3日のうちには出発するからそのつもりで頼むよ」

「わかりました」

うなづく千早の上に祈樹の花びらが散る。

ほんの少し、平穏という日々が遠ざかったような気が、した。

「千早ちゃん、かあ」

祈樹の幹に手のひらを滑らせながら、風視は寮の方へと消えていく千早の背中を見送った。

「いったい何があつて、鬼哭はあの子を助けたんだろうねえ。まあ頭の柔軟性はあるそうだけどさ」

桜ヶ淵が狂った現場に立ち会ったという。

死にかけていたところを、鬼哭が助けたという。

風視がしってることはそれくらいだが、鬼哭は人間嫌いで有名だから驚いた。

単なる気まぐれかと思つたら、わざわざ「殺されるなよ」という警告までしてきたのだからわからない。けれど、そこまで執着するのなら。風視にだって考えなくてはならないことがある。

「ちゃんと守るから心配しないでって伝えてよ、六花」

「……承知しましてございます」

樹の影にたたずむ女のほうには目もくれないで。
意識は遠く過去へと沈む。

「美羽^{みわ}……きっと、君の望む世界を手に入れてみせるから」

だから、もう少し待っていて

願う言葉は声にはならない。

細く輝く月を見あげて、手を硬く握り締める。

その手は今でも紅い気がして、切なさがこみ上げる。

「だいじょうぶ、きつとうまくいくから」

ふわりと花びらが前髪をかすめる。

大丈夫だよ、とそんな声を、きいた気がした。

千早が多岐を訪ねたのは、あくる日。

まだ明けきらない夜が空を紫に染めて、名残を惜しむころだった。とは言っても、農民出身者が多い白連塾の朝は早く、もう起きだしているものたちが大半だったが。

「多岐、おはよ」

寮は一応男子寮女子寮に分かれてはいるものの、行き来が出来ないのは夜の間くらいなもので。

声をかけることもせずに多岐の部屋の扉を開け放った千早に、周りのほうが焦った。

「ちよ、千早！ 着替え中だったらどうすんだよ！」

「大丈夫でしょ、別に減るもんじゃなし」

とがめるように声を上げる通りすがりの少年に、千早はあっさりと言葉を返す。

「大体男どもなんて夏になったら上裸じゃないの。かわんないでしょ？」

みもふたもねえな、とぼやく周りを追い払うように手を振って、千早は多岐の部屋に侵入を果たした。

大半の者たちはもう朝食もすんでいる時間だというのに、多岐はまだ寝ていた。

耳元でおはよう、ともう一度声をかけてみるものの、さらに布団にもぐりこもうとする。

「多岐、起きろ……！」

無理やりに布団を引っぺがし、耳元でもう一度叫べば。

多岐はひどく億劫そうに眉を寄せて、くっついて今にも閉じそうなまぶたの隙間からこちらを見やる。

「おはよう、多岐」

「……はよ」

「起きてよ」

「やだよ……俺は眠いんだ」

「なんでそんなに眠いのよ。私のほうが昨日は絶対的に遅かったはずよ……！」

布団の引つ張り合いに勝ったのは千早で、無理やりに引きはがすと、多岐はそれでも往生際悪く敷布団の上で丸くなった。

「や、たぶん俺のほうが遅い……昨日の晩、那智様に呼ばれてさ。帰って来たの明け方なんだよ」

だから寝かせてくれ……

消え入るような声でつぶやいて、多岐は再び眠りに落ちる。

那智様に呼ばれた、というその言葉が。

千早に多岐を再び起こすことをためらわせる。

昨日の晩、風視が千早に語ったことが本当だとすれば。

那智は2年前の一件についてある程度のことを知っていて、自分のことを疑っている。

多岐に、何を聞いたんだろう。

気になるけれど、下手に聞くのもやぶ蛇な気がして、軽く唇をかむ。

多岐の寝顔を恨めしそうに見やったあと、きびすを返して、男子寮を後にした。

本当は桜ヶ淵に行くことになった、ということが多岐に伝えに来たのだが、結局用件は終わらずじまいだ。とりあえず今日はなんの仕事もない日だから、また後できてもいいだろう。と、そんなことを考えながら、市街へと出る門のほうへと歩を進める。

昼間、天にあるうちはほとんど動かないようにもみえるのに、実

は意外と太陽は俊足らしい。多岐との一件でそこまで時間をとったとも思わないのに、夜の名残は消え去り、青く澄んだ空までさつさと駆け上ってしまったている。

「……太陽かぁ」

見上げて思い出すのは昨日のことだ。

ずっと一日太陽にあたっていたら、身体を重くだるく感じることはまああったが、そんなことはあの桜ヶ淵の事件よりも前からで。

というよりも、外で一日太陽の光を浴びて駆け回っていたら、疲れるのは当たり前。

そんなことは今まで気にしたこともなかったのに、あやかしらしき女は出てきて忠告するし、風視にしても、千早の身体に何か異常が起きるようなことをいつていた。那智だってそれを期待しての、昨日の処置だろう。

「わけわからん」

あ の とき。

注ぎ込まれる何かに、自分の身体が今までと違ったふうに創りかえられたような気は、確かにした。

けれど、それ以後。千早は普通に人間として生きてきたのだ。あやかし封じの札さえ貼ったことがある。あの一件はいつそ夢なのだと思えるほど……死にかけていたあの日の出来事は、遠く曖昧だ。

「あゝ……めんどくさ」

「そんなに面倒だと思いですの？」

「すごく。考えるのキライなんだよね……」

特に答えが自分ではわからない問いを考える場合は。

そうさらに言葉をたそうとして、千早は急激に立ち止まった。

「あなた……昨日の」

ぐるり、と音がしそうな勢いで振り返れば、まだ白連塾の敷地内だというのに——白連塾の周りにはあやかし除けの札と呪がいたると

ころに張り巡らせてあるはずなのに。昨日のあやからしき女は平然とした様子で立っている。

「ご機嫌うるわしく、千早さま」

にこりと笑む女は今日も美しく妖艶だ。

「……六花^{りつか}、さん」

「まあ、覚えてくださっていたんですね。光栄でございますこと」
夜を生業にする女たちのようなつやつぱい所作で、六花は横の髪を耳へとかきあげる。

「あの、ここ……まだ白連塾の中なんだけど」
市街への門はもう少し先にある。

千早の言葉の意味がわからないのか、六花は優雅に首をかしげた。
「だってその、あなたあやかしてしょう？」

いきなり現れた六花への動揺を押し隠し、千早はようやっとそれだけを問う。

六花は六花でようやっと質問の意図を解したようで、得心がいった表情でうなずいた。

「たかだか人間がこしらえたあやかし封じの呪が、われらに害をなすことなどありませんわ。千早さまも出入りなさっておいでではございませんか」

くすくす笑う六花に、千早はそうだったとようやく自分の身の上を思い出す。

そういえば、自分にはあやかし疑惑があつたのだ。

「私、あやかしじゃないもの。六花さんとは違うと思うんです」

あら、と六花はきれいに化粧をほどこしたあおい縁取りの目をまん丸にみひらいてみせた。

「なんてこと。主^{あるじ}さまはまだ千早さまに何の説明もされていらつしやらないのですね」

困ったことですね、とつぶやいて。六花は軽いため息をつく。

「千早さまはまだ不完全ではありますけれど、れっきとしたあやかしでいらつしやいますわ。わたくしは単なる『影』にございますけ

れど」

『影』は、わかる。

あやかしの力を分けて造りだす、使い魔のようなものだ。それはわかる別にいい。

問題は、その先だ。

あやかし????

………わたしが?!

千早の思考はけっこうな間、まっしろになった。

あやかしの力で助けられて、『影』みたいな存在になったのかもしれないあとは思っていたけれど。

どこをどう間違えれば、あやかし、になるのか。

空高く雲にまぎれて飛んでいく、鳥の声を遠くに聞いた。

あやかし。

古種族の中の最強種。

永の時間を生き、天地の理を知り、呪を良くする存在。ときに人間さえ喰らうもの。

こまっ たような六花の存在は確かに認知はしていたが、とりあえず凍りついたまま千早はしばらく動けなかった。

7（後書き）

ようやく、本人さえ自覚できていなかった正体暴露です。
こぎつけるまでに随分かかってしまいました……

六花はかなり気長に待ってくれた。

千早が少しまでもに会話が出来るようになるくらいまでには。

「人間が、あやかしになるとか……あるんですね」

ため息まじりの千早に、六花はただ笑んだ。

「まねなことではございますけれどね」

お茶屋に場所を移した千早は、六花をみつめたまま、熱いお茶を一口含む。固く焼き上げた菓子をかじれば、ほろほろと溶け出す甘みが身体に染み入っていくような心地がした。

「あやかしに助けられた死にかけの人間は、みんなあやかしになるんですか」

「われらが人間を救うこと自体がまねなことではございますけれど、千早さま。助けた人間がすべてあやかしになるとすれば……あやかしと人間の関係はもっと友好的になると思いましてよ」

確かに、そうかもしれない。

千早自身、あやかしになったといわれても、ぴんと来なかったし。ちよつとした体調の変化以外、特に自覚できる症状というものはないようなのだ。

「9割がたは、『なりそこない』と呼ぶ存在になるのでございますわ」

「なりそこない？」

「もとはあやかしと人間の混血児あぐろいのことを指す蔑称ですけどね、身体は人間のままなれど、あやかしの力をわずかにもつもの——もしくは、あやかしの身体を持ちながらも、なんの力も持たぬもの、といったところでしょうか」

六花の繊細な指が、きれいな砂糖菓子をつまみあげる。

「われらのような力の弱いものに救われたものは『なりそこな

い』になりますわ。仮にわが主さまのように 力 のあるものでも、
わずかの 力 で救えば『なりそこない』になりますけれどね」

口に放り込んだ菓子を飲み込んで、六花はにこりと笑った。

「わたくしはそろそろおいとまいたしますわ。那智にはくれぐれも
お気をつけ下さいませね？ 風視どのが千早さまをお守りするとは
おっしゃっていらしたけれど。あの方は抜けていらつしやるから」

しばらく芽津をはなれる挨拶にきたのだと、六花はいった。

優雅な様子で去っていくその後姿は、すぐにひとなみにまぎれて
消える。

「……このまま、白連塾にいていいのかなあ」

意識は変わってないとはいえ、白連塾は古種族を狩るための組織
だ。

この二年間、人間ではなくなってしまうたかもという不安から幾
度も繰り返し問いは、あやかしになったという確証を得た今、決
断を迫るように眼前にぶら下がっている。

ただ。

「でも、風視さん……一緒に桜ヶ淵にいらつて言うただけで、首
とかなにもいってなかったんだよね」

風視は邪言使いの異名をとる、白連塾でも一二を争う影狩師だ。

塾長の信頼も深いと聞くし。

その風視がなにも言わないのならまだ決めなくてもいいかと、千
早は楽なほうに流れて、湯飲みに残っていたお茶を一息に飲み干し
た。

「桜ヶ淵の件ですが、どのように考えているのですか？」

床からのびる、白い塔……もとい。

積み上げられて人間の身長ほどの高さになっている書類の塔が乱立する隙間から、涼やかな声が響いた。

「どうつて。誰かが何かたくらんでいるんだろう」

気のなさそうに答える風視は、勝手に部屋を物色してどこからともなく上物の菓子を探し出してきた。さらにこそそと棚をあさり、湯飲みとお茶っぱをもとりだすと、手際よくお茶を淹れはじめた。

「陵王も飲むかい？」

「……いただきますけど」

涼やかな声の主は、呆れている様子を隠そうともしない。

そんな彼に、風視はわずかに目を細めた。

「有能なのはいいことだけどさ、何もかも抱え込むと、そのうち破綻するよ」

「その助言は那智にこそいつてみてはいかがですか」

「あの堅物の坊やが聞くはずないだろ？ 僕のこと大きらいなんだからさ」

「その坊やは、私のことなんて若造と侮って話すらまともに聞いてはくれませんよ」

ため息をついて、彼——白連塾塾長の陵王は筆をそのあたりに放り投げた。

「おやおや、やさぐれているね」

「あなたが来ると仕事にならないんですよ。休憩です」

風視のほうにやってくるときに肩が書類の塔にふれたらしく、うちのひとつが盛大になだれ落ちたが、陵王は一顧だにしなかった。完全に見なかったことにしている。

「あやかし疑惑の少女のほうはどうでしたか？」

「疑惑も何も、あやかしだったよ。本人はわかってるのかどうか怪しいけどさ」

風視がわたした茶を、陵王は無言ですすった。

わずかに眉がよったところを見ると、ちょっと熱すぎたのかも
れない。

「……少しは、白連塾も本来の意義に立ち直れるといいのですが」
「まあそんなに期待はしてないよ」

自分でいれたお茶は、やはり少し熱すぎたようだ。

それを無理やりに飲み下し、小さく息を吐く。

塾長室から見える中庭では、今日も祈樹が花びらを散らしている。

「でもまあ。少しは変わればいいと思いはするよ」

小さくつぶやけば、聞こえたのかどうなのか。

陵王の笑みがわずかに深くなったような気がした。

歩くのは、嫌いじゃない。

山道を歩くのもそこそこ好きだ。

気候も山歩きにはもってこいの爽やかさで、天気にも恵まれている。

「あの」

ただ腑に落ちないことは山ほどあって。

ついでに文句も山ほどあって。

休憩時に多岐が離れた隙を見て、千早はこっそり風視のそでをひっぱった。

「どうしたんだい？」

大型の猫科を思わせる獣の背をなでていた風視は不思議そうな表情で千早を見つめる。

「なにかあった？」

大有りです！と叫びかけたところを頑張って飲み込んで、千早は代わりに息を吐き出した。

「言いたいことはいろいろあるんですけど、まずはこの子！」

千早が指差せば、猫科の獣はふあああつとあくびをひとつした。

獣の白地に斑点のある毛並みはいかにもふさふさしていて手触りがよさそうで、ちよつと触ってみたい気にもなるが、とんでもないことだと思いなおして、千早は一步後ずさる。

「この子、牙獣きしゅうですよね？」

「そうだね」

あっさりうなづく風視にわずかながら目眩を感じる。

牙獣は、しなやかな体躯が美しい生き物だがその性質は獰猛で有名。もちろん肉食だし、気が立っていれば人間も襲うし喰らいもする。

そんな恐ろしい生き物をよく乗り物にする、と思う。

普通は避けたり獵師に頼んで狩ってもらったりして遠ざけるべきものだ。

「まあ、賢い子だから、むやみに人を襲ったりはしないよ」

「それだけじゃありません」

そのまま話を終わらせようとする風視に千早は食い下がった。

「だいたいなんで多岐がついてくるんですか?！」

そもそも、桜ヶ淵へは二人で行くものだとか千早は思っていた。

確認をしなかったのは千早が悪いかもしれないが、六花がいうには自分はややかしで、白連塾はやかしを狩るための組織なのだ。

千早自身は違うが、あやかしに恨みを持つものも多にいる。

事情を知る者はなるべく少ないほうがいいと思うのだが、風視は何を思っただ岐まで同行させたのだろうか。

しかも、多岐は一日待ちぼうけを食らわされたあの日の晩、那智に呼び出しを受けたという。

あれから数日たつ今も、なんととはなしにやぶへびになりそうな気がして、何を聞かれたのか千早は問えないままだった。

「うーん、まあそこはさ。いろいろあるんだよ、大人の事情ってやつが」

どうやら風視はあまり突っ込まれたくないようで、さりげなく牙獣の世話をしたりしている。

聞くだけ無駄な気配がぶんぶんにする。

少なからず千早は苛立ったが、怒ったところでどうにかなる問題でもない。

なにしろ相手は、外見が若いだけで中身はおじいちゃんなのだ。

海千山千とみて間違いはない。

「じゃあ、風視さん」

これだけは答えてもらうぞと、千早は腹に力を入れて風視を正面に回ってみやった。

「行き先は桜ヶ淵ではないんですか」

出発までの数日の間、千早は必要なものを買いに町に幾度が出たが、そのたびに桜珠を見た。

あるときは腕輪。

耳飾りに、首飾り。

髪飾りの時もあつたし、お守り風に細工を施してあるものもみた。その数はいつそ異常なほどで。

仮に夜斗が封印から目覚めていたとしても、到底ひとりでまかないきれる量ではないのだ。

かといって、あの色。

満開の桜のはなびらの。うつすらと色づいた……桜そのものの。あの色はまがい物なんかではない。

桜ヶ淵ではきつとろくでもない、何かが起こっている。

2年前のあの一件から、気まづくなっていかなくなってしまった身で何を今更と思われるかも知れない。

けれど。

何かが起こっているなら、早く、と気がはやる。

いつて何が出来るのかはわからないけれど、自分の知らないところで、大切な何かが。

決定的に壊れてしまうことだけは。どうしても避けたかった。

それなのに。

白連塾を、多岐まで伴って出発した風視が向かったのは。

芽津からみて北方向に位置する桜ヶ淵方面ではなく、なぜだか南方向に位置する都隠山脈。位置的にいつて、ちよつと遠回りするけどこっちのほうで安全だし時間短縮できるんだ、などという流れでは断じて、ない。

むしろ都隠の山々は、古種族たちが多く住まう場所として有名であり。

人間の立ち入りを好ましく思わない地域なのだ。

一応あやからしいという、千早だが。

間違つても影狩師が3人もいつて、歓迎される場所ではない、と思われる。確実に。

「ああ、最終的には桜ヶ淵に行くけどね。先にあっておくべきひとがいるのさ」

ようやつと聞いた風視のまともな答えに、千早はようやく息をつく。

そうなんですか、と相槌を打てば、風視はにこりと笑顔でそれに応える。

「桜ヶ淵は主が不在で不安定だから、先に連れてこいって言われたんだよ」

主語と目的語が抜けている気がするの、は、気のせいだろうか。

「あの……誰に会いに行くんですか？」

「もちろん、鬼哭さ。千早ちゃんだって、会いたいだろう？」

会いたいわけがない。

けれど、にこにこと返事を待つ風視にそんなことは言えるはずもない。

できれば空耳であってほしいと、千早は激しく思ったのだった。

1（後書き）

この章は、突撃鬼哭さん！が目標です。
早く会えるといいなあ……

会って、どうするんだとか。

会ったからといって何がどう変わるんだとか。

つつこみたいことは山ほどあったけれど、とりあえず、千早はすべてを飲み込んだ。

「……なにしてるのさ？」

「深呼吸して、落ち着いてるんです。邪魔しないで下さい」

風視から視線をそらし、遠く望める山々とその合間。はるか先にかすかに望める海を見つめて、千早はさらにゆっくりと息を吐き出した。

「なんで？ そんなに鬼哭に会いたかったの？」

頭に花が咲いているらしい風視はにこにこそんなことを聞いている。

どうやら鬼哭にあえる嬉しさのあまり、心臓がどきどきして落ちて着くために深呼吸をしている、ととってくれたらしい。

やっぱり空耳じゃなかったんだ。

ため息混じりにそのことを再確認して、千早は先ほど多岐が駆け下りていった坂の先に視線を転じた。

多岐は、まだ戻ってこない。

「多岐は、どうするんですか？ 鬼哭、さんに一緒に会ってますか？」

「まさか」

さすがにその問いは、笑って否定された。

「僕があやかしと交流があることをばらしたのは、あやかしになっちゃった千早ちゃんだからこそ、だよ。普通の影狩師にとっては、あやかしは敵なんだ。余計なことをかれらが知る必要も、こちらが教える必要もないよ」

それは、悲しいことだけだね。

吐息のようなそのつぶやきは、空耳のようにすぐに大気に溶けて消えてしまう。

びっくりして風視を見れば、そんなつぶやきなんて最初からなかったような表情をしていた。

「下手な情報は、彼らの判断力を鈍らせる。あやかし相手にそれは致命的だよ」

「……風視さんにとって、あやかしとは、なんなのですか」

風視だって、影狩師のはずだ。

影狩師にとって、あやかしは敵ではないのだろうか。

……憎むべき、ものではないのだろうか。

「千早ちゃんにとって、あやかしってなんだろうね」

「え？」

逆に問われて、千早はまたたいた。

なに、ときかれても、困る。

それで答えられるほど、千早はあやかしを知らない、はずだ。

「ふだん、君が戦うあやかしがいるよね。人間を食うあやかしもいるし、なぶるものもいる。そんなやつらは憎いよね？」

まるで諭すように、風視は言った。

「だけど、桜ヶ淵はどうだろう。君を助けた、鬼哭は？」

「……わから、ないです」

答えは、すぐには出なかった。

千早だって、影狩師だ。

まだ経験が浅いとはいえ、あやかし狩りに参加したこともある。

里を滅ぼした、あやかしと対峙したこともある。

たやすく仲間を引き裂いた、あやかしを憎んだこともある。

つよく、報復を望んだことも。

「僕は、あやかしに仲間を殺されたことがあるよ」

ぼつり、と風視は言った。

「影狩師だから。まるで弟や息子、妹や娘のように思っていた仲間を、あやかしに殺されたことがあるよ。目の前で殺されて、救えな

かったこともたくさんある」

やわらかい風が、ふく。

淡々と語る風視の声音に。特にあやかしに対する憎しみが見えるわけではない。

ただそこにあるのは、哀しみだけで。

おそらくは、守れなかった自分に対する、強い後悔だけがそこにある。

「だけどね、千早ちゃん。僕は人間にだって、大切なひとを殺されたことがある」

ぼつり、と風視はさらに言葉を継いだ。

「誰よりも守りたかった妻は、あやかしからその身を挺して守った人間に殺されたんだ」

あたりには、妙な静けさが満ちている。

風視の独白に、風や木々のざわめきさえも、息を潜めるようだ。

「妻を殺した人間を、僕は憎んだ。引き裂いてやりたいとおもうほど」

静かに言い切った風視はゆっくりと息を吐き出したあと、こちらをみつめて、いつもの調子でにこりと笑った。

「だからといって、僕は人間全員を憎んでいるわけじゃない。陵王のことは好きだし、影狩師の仲間も大切に思っている。だって彼らは、僕の妻を殺した本人じゃないから」

当たり前のことを、風視は静かに言った。

「あやかしだって、一緒だよ。いろんなひとがいる。あやかしだからといって、ひとくくりにすることはできないよ。友達もいれば、どうしても好きになれない相手もいるさ」

風視の視線はやわらかい。

ただじつと、こちらの反応をみまもっているようだ。

「……当たり前のこと、なんですよね」

「そうだね」

聖人君子もいれば、悪人もいる。

優しい人もいれば、冷たい人もいる。

そんなことは当たり前のことなのに、自分とは異なるものと認識するだけで、十把ひとからげにできてしまうのはなぜだろう。

こういう種族だ、と決め付けてしまえるのだ、何を疑うこともなく。

「白連塾では、なぜ教えないのですか」

あやかしをはじめとする古種族は、すべて敵だと、白連塾はみんなに教える。

敵だから、倒さねばならないものだ。

今、風視が言ったことと、まるで正反対のことを、ひどく正しいことのように。

風視の言葉を自分の中でかみくだいてからゆっくりと問えば、風視の笑みがほんの少しだけ深くなった。

「あやかしと人間の間の溝は深い。そう簡単には分かり合えないさ」
風視には、風視の。言い分があるのだろう。

納得できるものではなかったが、じゃあ何が正しいのだと問われれば、千早には答えられない。

「それにさ、彼らが敵というのもあながち間違っではないんだ。
古種族は基本的に人間と関わろうとしない。それをあえて関わってくるのは、人間に害意を持っているものがほとんどだ。その害意を持っているものにたいして、本当はいい存在なのかもしれない、なんてことを考えていたらやられるのはこっちだからね」

残念なことだけど、と風視は言葉をくくった。

やがてどちらからともなく口を閉ざし。二人の間には沈黙が満ちる。

けれどそれは、そう長い間でもなかった。

「さて、そろそろ行こうかな」

そう切り出したのは、茶色い小鳥がピイと鋭く鳴いた直後のことだった。

「え？」

千早が戸惑ったのもむりはない。

休憩にはいつてすぐ、出かけた多岐がまだ戻っていないのだ。

古種族を敵と認識するごく普通の影狩師たる多岐を、古種族が多くすまうとされるここに見捨てていくのはさすがにどうかと思う。

もつとも、この都隠の山にはいつてから、特に古種族を見かけた覚えもなかったけれど。

「あの……多岐は？」

「ああ、うん。しばらく戻ってこないから大丈夫」

「え……あの。どういうことですか？」

牙獣の背に荷物をくくりつけながら、ちやくちやくと出発の準備を進める風視に千早はさらに問うた。

「多岐くんは、里のほうまで買出しに行ったんだ」

「……里？」

里なんて、この付近にあったらどうか？

少なくとも、獣道を分け入ってる時に見た覚えはない。

「うん、里。封呪ほうじゆの民が住まう里がその下のほうにあるんだ。だからそこまで」

「……ここから見ても、特に里らしきものは見えないんですけど……遠いんですか？」

「いや、近いよ」

あっさりと風視はいった。

ほんの少し目をすがめて、木立の合間をじっとみつめる。

「近いんだけど、呪がかかっているからちよつとやそつとこのことでは見えないんだよね」

「あの、多岐にはそのことを？」

「うん、言ってないよ」

なんてやつだ！

千早は危うく吐き出しかけたその言葉をすんでのところで飲み込んだ。

風視は千早のそんな様子に気づくふうでもなく、淡々と言葉を継ぐ。

「封呪の民は人間だけど、呪を良く使いすぎて、時の帝に疎まれてここに逃れてきた。隠れるために呪を用いるのも当然だよ」
「当然かもしれないが、多岐がそのことを知っていたとも思えないと、いうことは。」

多岐はきつと一生懸命命じられた里を探している。見えないことにも気づかないままです。

……多岐は一体どこまで走っていったのだろう……

「あの、多岐を探しには……」

「いく必要はないさ。一応見張りは飛ばしてあるし」と、いうことは。

確信犯だったというわけだ。

思わず非難がましいまなざしを向けると、風視はちよつと肩をすくめた。

「許してよ。まさかあやかしの主に会うのに、一介の影狩師を連れて行くわけにも行かないだろう？」

「わが主は気になさらないと思いますけれどね」

風視の弁解に答えたのは、まだ声変わりもすんでいない、少年の声だった。

「お初に御目にかかります、千早さま」

一見貴族の子供のようにも見える、まだ稚い少年だ。

「わたしは天花^{てんか}と申します。お見知りおき下さいませ」

ペこり、と丁寧にお辞儀をすると、今度は風視に向き直る。

「風視の君にもご機嫌麗しく。お久しゅうございます。お迎えに上がりました。おいで下さいませ」

天花はまるで恐れる風もなく、牙獣の手綱をとった。

首の辺りを優しくなでやった後、ゆっくりと先にたつて歩き始める。

ふとみれば、坂を上りきった先に、先ほどは見えなかった豪華な門が見えた。

坂を上りきったところにある門は、芽津の都の皇城の門よりもずっと綺麗だった。

白くつややかに磨き上げられ、細かい模様が彫りこんである。

天花が近づくと、すべるように門は開いた。

「いらせられませ」

まだ幼い声で天花がいざなう。

門の両脇にはそびえたつように、青々と葉を繁らせた境ノ木サカイノキが立っていた。

「千早ちゃん」

天花のあとを追って門をくぐろうとしたときに、風視がこそつと耳打ちをしてくる。

「もし……もしも、なんだけどさ」

あまり煮え切らない様子で、彼は小さく言葉を継いだ。

「君が完全なあやかしになりたくないって言うんなら、ここでは何も食べちゃいけない」

「え……？」

「もう人間には戻れないだろうけど、完全なあやかしになってしまえば、いろいろ巻き込まれることもあるだろう」

もし、それがいやなら、と風視はいった。

念を押すように、何も食べるな。と。

「どうして、そんなことを？」

千早は声をひそめて、ゆっくりと問うた。

「……君は、何かを望んであやかしになったわけじゃないからね」
風視はそれ以上何も言わなかったけれど、言わんとすることはなんとなくわかった。

つまり、風視が問いたいのは。

覚悟の有無だ。

これから先どんなことが待ち受けてるのかは知らないが、覚悟がなければこの先には進むなといっているのだろ。何もなかった2年よりも前に、引き返せるわけでもないというのに。

ふ、と笑みがこぼれた。

自嘲にも、近い笑みが。

門の内側は、不思議な空間だった。

まるで物語の中にある桃源郷のようだ。

春の花が咲き乱れ、夏の木々が青々と繁る。秋の実りがたわわになり、冬の花が控えめにひっそりと開いていた。

暑くもなく、寒くもなく。

痛みも苦しみもないのではないかと、そんな馬鹿なことさえ脳裏をよぎる。

「よう来たな」

季節を無視したその空間にひんやりとした声が響く。

「鬼哭」

忘れるはずもない声だった。

2年前の、あの桜ヶ淵から。

応える風視の声が、わずかに緊張をはらんだように思った。

「おまえもきたのか、白連^{はくれん}」

「ご挨拶だなあ。僕が来るのが気に入らないとか？」

風視の言葉に、声の主はふんと小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「お前はいつでも面倒ごとばかり押し付けにくるからな——天花、白連を風の間に通しておけ」

「こちらにどうぞ、風視の君」

天花が風視をいざなってはなれていく気配がする。

千早は軽く息をすった。

知らずのうちに、鼓動がはやくなっていく。

手のひらに、汗がにじむ。

ゆっくりと、心臓をなだめながらふりかえれば。

果たして、あの日のあやかしがそこに、いた。

「久しいな、千早」

舞い散る桜の花びらが、あの日を連想させる。

雪のようにましろい髪が、さらりと風に溶けた。

相変わらずの、ひんやりと冷たい声音。

「……ひさし、ぶり」

返す声音は、わずかにふるえた。

腹の奥底にたまるのが、恐怖ではないと信じたい。

今まで幾度かとはいえあやかしと対峙したことがあるからこそわかる、圧倒的なその力——いまさらながら、その力の強さに、夜斗を一瞬で封じた事実を思い出す。

「何を恐れる」

面白がるように、あやかしは喉の奥で低く笑った。

「あなたは、あやかしだから」

「お前もあやかしだろう？」

「……元人間だし」

真正面からみつめあうことに疲れて、千早はふいと視線をそらした。

心臓がときどきとうるさい。妙な緊迫感が心身を疲れさせる気がする。

「まあ、今日はゆるりとしていくといい。芽津から険しい道をきて
疲れたろう」

ぽふ、と頭の上に手が乗った。

そのままさらに数度、ぽふぽふとなでられる。

「あ、あの……??？」

あやかしに頭をなでられるとか、いったいどんな希少体験だ。

千早が反応に困っていると、あやかしはさらに笑みを深くする。

「屋敷の中はどこへ行ってもいいが、門からは出るな」

頬をかすめた手は、やはりあの日のようにひんやりとしている。

「あの……」

「夕餉を用意させる。気に入った部屋で休んでおけ」

「待って！」

そのままきびすを返そうとするあやかしを、千早は呼び止めた。

「どうした？」

「あの……」

切り出そうとした千早は、さっきからひたすらにあの、としかい
っていないことに気がついた。気おされているのだ。その強すぎる
力に。

どうしても深い部分にたまる恐怖を振り払うように、かぶりを振
って、浅く息をすった。

「鬼哭さん、あの、夜斗さんは……」

「桜ヶ淵はまだ眠ったままだ。あれが目覚めるためには、まず地が
鎮まらねばならん」

言葉の意味を掴みかねて、千早はまたたいた。

「あの地は穢されて、恨みに憤っている。われらは気脈を食らう存
在なれば、地の怒りの影響をともに受けるのだ」

あやかしは言葉を換えて説明をたしてくれたが、それさえもわか
らない。

「今、夜斗を目覚めさせたとしても、地の穢れが取り除かれぬ限り

はまた狂っただけだということだ」

千早をうつすあやかしのまなざしが、少し沈んだのはきつと気のせいではない。

けれど、どう言葉を返していいか惑ううちに、あやかしはきびすをかえしていつてしまう。

ただひとり、取り残されて。千早はただ立ち尽くすばかりだった。

4（後書き）

やっと再登場です、鬼哭！

目標は達成ですが、この章はもう少し続きます。

どうしよう、と一人取り残された千早は唇をかんだ。

そもそも、千早はここに何をしにきたのかさえしらないのだ。

風視はどこかいつてしまったし、あやかしさえもどこかへいつてしまった。一人取り残されて、いったい何をすればいいのだろう。

「うん……」

きよろきよろと辺りを見回すが、天花どころか、使用人らしき人影もない。

「……ん~~~~」

悩むこと、数瞬。

「……桜ヶ淵は不安定だから、行く前に私を連れてこいってこのあやかしは言っただけ」

おもいだす、風視の忠告。

そして、芽津で出会った六花のことば。

ということは、答はひとつではないのだろうか。

完全なあやかしではないがために、不安定な自分。

不安定だから、自分を連れてこいといったあやかし。

完全なあやかしになりたくないのなら、何も食べるなといった風視――

でも、きっと。

不安定なままでは、桜ヶ淵にはいけない。そんな気がする。

仮に風視が連れて行ってくれたとしても、きっと足手まといになる。

それなら、選ばなくてはいけない道はきっとひとつしかない。

「……桜巳」

ぼつり、と名前をつぶやく。

この名さえ、口にしなくなって、随分たつ。

その事実は今更ながら気づけば、胸の奥がずきんと痛んだ。

「鬼哭……あの子をどうするつもりなんだい」

ぐるぐると廊下が屋敷を取り巻いて、まるで迷路のようだ。

ようやっとあやかしを見つければ、あやかしは腕をくんでぼんやりと庭で咲き誇る白い樹をみつめていた。祈樹——だ。ましろく、淡い燐光をはなつ花びらがひらひらと舞い落ちる。

「白連か」

ちらりと一瞥のみをよこしたあやかしの機嫌は、きつといい……はずがない。

「千早ちゃんを、どうする気なんだ？」

不機嫌そうなその黄金色のまなざしにわずかにひるんだものの、風視がさらに言葉をたせば、あやかしはふん、と小ばかにしたように笑った。

「どうしようと、おれの勝手だろう。あれはおれがあがった命だ」
「……あなたほどのあやかしであれば、あの子をあやかしにせずとも救う方法のひとつやふたつは持っていたはずだ」

低く、風視は言葉を継ぐ。

千早はおそらく、さまざまなことに巻き込まれて苦しむことだろ

う。あやかしとしての生は決して楽なものではない。人間であればなくてよかった苦労に遭うのが、いやでも簡単に予測できる。

そう思えば、いまさはどうすることも出来ないとわかっていても、そう言わずにはいられなかった。

だが、対するあやかしはまるで取り合う様子もない。

肩先に落ちてきた純白の髪をうるさそうに後ろに払い、ただその視線を祈樹へとそそぐ。それだけだ。

「鬼哭……！」

「お前はいつまでたってもおめでたいのだな、白連」

じれたようにあやかしを呼べば、今度は哀れむようなまなざしが返ってくる。

「美羽を失ってなお、お前の頭には花が咲いているらしい」

「なんだと?!」

「美羽の命を代償としても、お前は学べなかったのか?」

あやかしの声は。いつそ淡々として風視に苦い過去を突きつける。言葉をなくす風視をさげすむようについ、と視線をそらし、あやかしはゆっくりと立ち上がった。

「自分と異なるものを、人間は疎む。桜ヶ淵を救おうとした時点で、あの娘は人間として暮らしていくために守らねばならぬ一線を越えている」

「だからといって、なにもあやかしにすることは……」

「排除するのは、常に人間だ。われらはただ、あるものをあるがままに容れるまで」

食い下がる風視にひやりとした言葉をくれて、あやかしはつと祈樹のほうへと歩み寄った。

風視の存在などまるで、最初からなかったようなその態度。

もはや話すことなど何もないという言葉なき声がいやでも聞こえるようだった。

とりあえず、さきほどのあやかしを求めて、千早は屋敷の中をうろついてみた。

季節を無視してでたらめに花が咲き誇る庭を抜け、迷路のような廊下を抜け。

「あれ……」

廊下を抜けたあたりで千早は思わず足を止めた。

庭の少し奥まった一角に、何本かの樹がひっそりとたたずんでいたのだ。

「祈樹……？」

半信半疑で、一步前に出る。

ほのかに燐光をはらむ白い幹。ひらひらと舞うはなびら。

どうみても、白連塾の中庭に生えている、祈樹にしか見えなかった。

祈樹とは、白連塾の前身となる祈塾きじゅくの創設者が人間の安心して住める世界を築けることを祈って植えた樹だと言われている。その願いを、光の男神たる闇無くまなが容れた証として燐光をまとうようになった、と。そんな伝説を持つ樹なのだ。

今まで千早は、白連塾以外で祈樹を見たことはなかったし、ないものだと思っていた。

伝説の樹がそこらじゅうにはえていたとしたら、ありがたみも何もないだろう。

「なんで、こんなところに……？」

「墓に何か珍しいものでもあったか？」

おもわず、といった調子でくちびるからこぼれたその言葉に応えたのは、ひんやりとした声だ。

「墓？」

ふりかえれば、そこにいたのは、やはりあのあやかしだった。

「祈樹をみていたのではないのか？」

「見ていたけど……」

「あの樹はあやかしの屍骸を苗床に生える樹だ」

抑揚も少なく、あやかしはいった。

「え……？」

「強い想いを残して死んだあやかしの成れの果てだ」

くつくつと喉の奥でわらったあやかしは、千早の横をすり抜けて、祈樹へと歩み寄る。

そのすべらかな幹に手を滑らせて。

ゆつくりと千早のほうへと視線をよこす。

「どうした」

「私……この樹をみたことがあるわ」

「そうか？」

「うん……白連塾の中庭にあるわ」

「白連は悪趣味だからな」

あやかしはさらりと、なんでもないことのようにそう言った。

そっか、と千早はうなずきかけて、どこか違和感を感じてだまりこむ。

そのまま数瞬。

「え？」

たっぷり間が空いたあとのそのつぶやきはひどく間抜けに響いた。どうした、とあやかしが問うてくる。

「いま、なんて？」

「白連は悪趣味だといったが？」

律儀にあやかしは言葉を繰り返す。

「おのれの妻のなきがらを、白連はあんな人目のあるところにつずめたのだ。これを悪趣味といわずになんといい」

白連塾の前身ともいふべき祈塾を作った創始者の名を、白連、という。

授業で確かにそう習った。

「……………白連の奥さんはあやかしだったの？」

「そうだな。聞いていないのか？」

「白連塾はあやかし狩りの組織だし……………そういうことはあまり言わないんじゃないかな」

最近妙にあやかしに縁があると思う。

おまけにあやかしを狩るためにつくられた組織の創始者の奥さんまでがあやかしだとか。それなのに、なぜ白連は祈塾を創設したのだとか。思うところは多々あるが、そこまで考えるのは許容量を超えてしまう気がする。

今は桜ヶ淵のこと考えるだけでいっぱいいだ。

あやかしは千早の言葉があまり腑に落ちないような顔をしていたが、それ以上そのことについてふれようとはしなかった。なにか思うところがあったのかも知れない。

「ときに、千早。おまえ、おれに用があつたのではないのか？」

話題を変えたあやかしに、千早はなぜ知っているのだとまたいた。

「おまえがおれを探しているようだと報告があつたからな」

なんでもないことのように、あやかしはいう。

よくわからない、と千早は思う。

会つたのは、二年前に一度きり。それからついさつき。

たったそれだけしか接点がなかったのに、あやかしをどうも信頼しているらしい自分に驚く。そしてなにより、なぜか親切なあやかしにも。

「私……………」

自分に親切にしたとしても、このあやかしに益があるとも思えないのに。

けれど、あやかしは嘘をつかない。

ならば、その言葉は人間よりも信じられるのかもしれない。

「私、桜巳も夜斗さんも助けたいの」

「そうか」

「……できれば、幸せになってほしいの」

今でも、目を閉じればまぶたの裏に、あの日の幸せそうな桜巳の姿が浮かぶ。

「私、桜ヶ淵に行きたい。行って、何が起きているのかを確かめたいの」

あやかしは無言のまま千早をみつめていた。

「出来ることはあまりないかもしれないけど。それでも、できることをしたい」

そんなあやかしを千早は真正面からみつめかえす。

男のくせに、あやかしはきれいな顔をしていると思う。

肩先で束ねられた新雪のようなましろい髪。濃い黄金の双眸はひんやりとした心地よい光を宿して自分を映している。

「だから。少しでもいいんです。——私に力を、貸してもらえませんか」

あやかしはすぐに返事をしなかった。

ただじつと千早をみつめ、わずかに首をかしげる。

「お前がおれに何を求めているかによるな」

「どういう、こと？」

「してもいいことと、するのが面倒なことがあるということだ」

じゃあ、どういうことならしてくれて、どういうことは面倒なのか。

率直にききたくなつた気持ちを頑張つて飲み込んで、千早は意識をそらすべく、祈樹のほうへと視線をうつした。

さらさらの砂地に、細かい模様が描かれているのが目に入る。

波線も渦も…

まるで水面を見ているようだ。

「……わたし、は。夜斗さんに目覚めてほしいの。どうすればいいのかな」

「ほつっておけばいい。時がすぎればいずれ目覚める」

つぶやくように問えば、あやかしの返事はそっけない。

「いずれって、どれくらい？」

「さて…10年先か100年先か。そう長い時間でもないさ」

「充分ながいし！」

反射的にかみついて、千早は息を吐いた。

「何千年も生きるあやかしと一緒にしないでよ。100年もたった人間はしんじやうんだよ？」

「おまえはもはや人間ではないのだから、100年たったとしても生きていようさ」

「私はいいいよ。でも、桜巳は？」

詰め寄るように言つて、眉根を寄せる。

ちらりとこのあやかしは桜巳をしっているのだろうか、という疑

問がわいたが、あえて無視することに決めた。

「桜巳は人間なんだから、100年も夜斗さんが目覚めるのを待つてられないよ」

呆れたふうについて、千早は唇をかむ。

「幸せになつてほしいんだよ」

友達だから。今まで苦労してきたから。

でも、どんな理由付けをしても、たりない。

ただ、桜巳が笑っていてくれれば、それでいい。幸せそうならそれで、千早の気も晴れる。

「その友達とやらのために、何が出来るかさえもわからぬ桜ヶ淵へ、危険を冒していくというのか？」

あやかしの口調は、別に咎めるふうでもなかった。

「そのためにおれに手を貸せと？」

「……いやならムリにとは言わない」

けれど、その言い方が癪に障っておもわず唇を尖らせれば、あやかしは口の端だけで薄く笑った。

「意地を張つてどうなるわけでもあるまい？ おれはまだ何もいうてはおらんぞ」

「でも、面倒なんですよ」

「まあな」

否定することさえもしない。

笑みがいくぶん楽しげなのは、気のせい……なのだろうか。

7 (後書き)

分量ちょっとですみません…
明日は頑張ります><

「具体的にどう手を貸してほしいのだ？」

あやかしに導かれるまま、千早は祈樹がよく見える一室に通された。

「どうって言われても」

それがわかれば苦労はしない。

言葉を濁し、千早はちよつと首をひねった。

「私は早く桜ヶ淵に行きたいし、風視さんも連れてつてくれるっていつてるけど、その前にここに私を連れてこないといけないとか言ってる」

そもそも千早は風視とここに、あやかしに会いにきたはずなのだ。会ってはいえるのだが、肝心の目的はまるで果たされていない気がする。のは気のせいかな。

あやかしをちらりとみやれば、腕をくんでじつとこちらをみていた。

「ふむ。あやつは肝心なことをいつておらんのだな」

「どういうこと？」

「桜ヶ淵が目覚めても地が鎮まらねば再び狂うだけだといったのを覚えてるか」

思案するような口ぶりだった。

千早が顎を引いてみせると、さらに考えつつ言葉をつむぐ。

「あやかしが狂うことはそうあることではない。地の怒りに引きずられるとも言うのか……その地と深くかわりのあるあやかしが狂うのだ。桜ヶ淵が今回狂ったのは、桜ヶ淵の主だからだ。おれとて、この地が荒れれば、狂うだろう」

「かわりの浅い地なら、荒れた土地にいつても狂わないってこと？」

「そうだな。桜ヶ淵を、あの地以外で目覚めさせれば狂わぬかもし

れぬ、が。存在意義はなくすであろうな。そうなれば長くはない」
よくはわからないが、夜斗は桜ヶ淵で目覚めさせなければなら
ないということだろうか。

考えていると、あやかしがふと、笑う気配がした。

視線を上げれば、面白そうな表情でじつと千早をみつめている。

「まあ、それは普通のあやかしなら、ということだ。たとえば、お
まえならば。荒れた地へ行けば、その地に関わりがあるうとなか
ろと狂うだろう」

「どうということ？」

「端的に言えば、今のままでは桜ヶ淵には行けぬということだ」
今のままでは。

希望をこめて、千早はあやかしをみつめた。

風視は桜ヶ淵に行く前に、ここにくる必要がある、といったのだ。
言い換えれば、おそらく、ここで何かしらの手続きを踏めばい
けるということだろう。

「六花さんが私はまだ不完全だって言ってた。そのことと何か関係
があるの？」

そうだ、とあっさりとおやかしはうなずいた。

「不完全なあやかしが荒れた土地に行けば間違いない狂う」

「……私、二年前に桜ヶ淵から普通にもどってきたけど？」

このあやかしに助けられてから、しばらく桜ヶ淵にいたのだ。

疑問に思っ言え、あやかしは口の端にかすかな笑みを浮かべ
た。

「あの時はおれが守りの呪をかけた。天地の気から、お前を切り離
す呪だ。完全なあやかしならば、毒にしかならん呪だが、まだ人間
としての部分も残っているお前には有用なものだった。もっとも」
ちらり、とあやかしは芽津のある方角へ視線をやったように思っ
た。

「あの呪は先だって、那智によって解かれてしまったがな」

「……那智様？」

「一日陽の当たる市の入り口にたたされていたと六花から聞いた」
あやかしは手近にあった半紙をとると、まるで落書きでもするよう
に筆を滑らせた。

真ん中に四角。下に丸。右側に線、上に山。左側にも線。

「芽津の都は中央部を術式で守られている。南に池を作り、北には
丘を作り。西には大通り、東には川を作って流した。輝無の女神の
眷属を退け、光を満たすためのものだ。お前はちょうどその術式の
中央にいたのだ。いくらおれがかけた呪とはいえ、月がめぐれば衰
えもする。そこをつかれて、解かれたのさ」

あやかしが書いたらくがきはどうかやら芽津だったらしい。

確かに芽津は中央と、東西南北のそれぞれの町からなりたつ都で、
あやかしがいうように、南町には池があるし、北町は丘の上に作ら
れているし、といったような特徴を持っている。

今まで、気にかけたこともなかったが。

ちなみに白連塾は都の北側に位置する。

「じゃあ、もう一度呪をかけてもらえばいいんじゃないの？」
あっけらかんと言った千早にあやかしはわずかに苦笑した。

「まあ、それが一番手っ取り早いかもしれんな」

「じゃあ」

「だが、あまり勧められる手立てではないな。仮に桜ヶ淵でその呪が解ければ、その時点でお前は狂う。なにより、那智はあの呪の解き方を知っているのだ。危険の度合いは高い」

提案を理詰めでつぶされ、千早は惘然とした顔つきになった。

「じゃあ、どうすればいいのよ？」

「まったきものになればよい」

対するあやかしの答えは簡潔だ。

「完全なあやかしになれってこと？どうやって？」

「お前が不完全であるのは、まだ人間である部分を残しているからだ。それを消してやればいい。おれの 気 でお前を満たせばいい……簡単なことだ」

「……具体的には、どうするの？」

問いながら、千早はほぼ無意識にあやかしから距離をとる。

薄いそのくちびるに目をやってしまったのは、二年前の一件を思い出したからだ。

そんな千早にあやかしはわずかに微笑した。

「口から吹き込むというのも、ひとつの手ではある、が」

あやかしの容貌に艶が増したような気がしたのは気のせいなのだろうか。

「……とりあえず菓子でも食べばよからうさ。どちらにしても一時的なものだ。長くは持たぬ」

ぱんぱんと手をたたいて、眷属を呼びながら、あやかしはいった。

「人間からは遠ざかるがな」

「……牙が生えたり？口が裂けたり……？」

「それも面白いかもしれんが、残念ながら中身が、という意味だ」

黄金の瞳をやさしげにすがめて、あやかしはそう言った。

ほどなく天花がもつてきた綺麗な砂糖菓子の入った器を千早の前へと置きなおしながら、あやかしはまたゆっくりと口を開く。

「お前の望みはひとつ。桜ヶ淵が狂うことなくめざめること、これでよいな？」

本当は、桜巳が幸せになること、だ。

けれど、千早はあやかしの言葉を否定はしなかった。

夜斗の目覚めなくてして、桜巳の幸せなどないと思うからだ。

こくり、と顎を引けばあやかしは笑みを深くする。

「そのために必要なことはひとつ、かの地の気脈を正すこと」

「……今、桜珠が市場に流れてるんだけど、そこも桜ヶ淵の地が鎮まる過程でちゃんとなるのかな」

「それは桜ヶ淵の為すことだ。あやつが目覚めれば己で収めるだろう」

「じゃあ、それでいい」

「ならば千早。おれと契約をかわせ」

つと、あやかしの手が千早の頬にふれる。

美しい、手だ。

けれど恐ろしい力を有し、獣の首くらいは簡単に刎ね飛ばしてしまうであろう凶器だ。

「契約……？」

びくり、と肩が震えたのも、無理のないことだろう。

言葉を繰り返せば、あやかしはそうだと肯いた。

「お前の願いに手を貸す代わりに、お前はおれの望むものをよこせ」
あやかしの手が繊細な砂糖菓子をつまみあげて、千早の口へと運ぶ。

そのひやりとした黄金の双眸に、おびえたような己の姿が映っているのを、千早はみつけた。

「よいな、千早」

心地よい冷たさははらむ声が、ごく近くで響いた。

わずかにひらいていたくちびるに、砂糖菓子^{砂糖菓子}が押し込まれる。

口調こそ問う形だが、あやかしは千早に否やを聞いてはいない。

ふだん味わうこともない上品な甘さが口の中でほろほろと溶けていくのを、夢の中のおい出来事のように思った。

あやかしの指がくちびるの輪郭をなぞっていく。

「おれの名は氷流^{ひやうりゅう}という。おばえておけ」

ささやくような声音が低く、耳元で聞こえた。

かすめるように、つめたさがくちびるにふれていく。

あまりにもそれは唐突で。

けれど、わずかの優しさを持って砂糖菓子の甘さが増す中。ゆっくりとくちづけは深くなった。

9（後書き）

2章終了です！

次は3章……忘れられている多岐くんが再び登場します。

「悪いんだけどさ、この先に小さな集落があるから、いつてきてくれないかな」

そう話しかけてきたのは、物騒な獣に千早が気を取られているときだった。

にこにことした、人好きのする顔つき。

年はおそらく20代後半から30代前半。中肉中背の取り立てて目立たない平凡な風貌の男である。

「……ハイ」

千早の話では、この男はかの有名な邪言使いの風視、だという。

邪言、というのは闇の女神である輝無神を奉る言葉らしい。逆に那智は聖言使いと呼ばれていて、闇無神を奉る言葉を呪としてあやかしを狩る。信仰する神が違うこともあるのかこのふたりの影狩師は、白連塾の双壁でありながら、折り合いが悪い。

もっとも、風視の年齢があわない気がとてもするが、そこは恐らく、つつこんではならない「なにか」なのだ。

こういうものに突っ込むのは、平穩から遠ざかる第一歩だ。

気になっても見ざる聞かざるで通すのが一番平穩なのである。

「実はさ、食料を一人分しか持ってきてなくてね……キミたちの明日のご飯がないんだよ」

そんな多岐の苦悩などまるで気づかないふうで、風視は今まで獣の背につんでいた大きな袋を逆さにしてふってみせる。

ぱらぱらとなにかのかすが落ちたが、それだけだ。

「いやー僕一人旅が多いからさ、つい、いつものくせでさ。用意するのを忘れたんだよね」

風視は確か、食料は自分が用意するから着替えなどを主に用意するよつに、と前日にいったはずだ。

いや、だがそれも、突っ込んではいけないことなのに違いない。

「だから、悪いんだけど……頼むよ、多岐くん」
多岐の手に砂金粒をいくつか乗せて、風視はにっこりと微笑んだのだった。

「ねえよ……集落なんて！」

風視が指した方角に向かって坂を駆け下りることしばらく。
そう遠い口ぶりでもなかったのに、集落は行けども行けども見えなかった。

来た方角をちらりとみやって、戻ろうかと思案する。

道なんて獣道くらいしかなかったし、なによりここは古種族の領域とさえいわれる都隠山脈だ。影狩師である自分がうろろするのは自殺行為——そう思いながら、一步戻りかけて。

多岐はため息をついて、立ち止まった。

「戻れねえよなあ……俺は空気が読める男なんだぜ」

一緒に来い、といったのは風視だが。

今は、おそらく離れていてほしいのに違いない。ふたりだけで、内密の話をするために。

「千早、変わっちまったもんなあ……」

どこが、とは言えない。そこまでは明瞭にわからない。

けれど、確かなになにかがかわった。千早自身が、というよりも。

その纏う雰囲気が。

長期の休暇を取った千早が、桜ヶ淵から帰って来たとき、確かにかわったと思うたのだ。

『あの子は、古種族の血でもひいているのかね』

あの、待ちぼうけを食らった日の深夜。

那智から問われたことを思い出す。

古種族嫌いの那智よりも風視のほうが、千早の味方になってくれそうだ。うまく言えないが、風視とかわってしまった千早には、どこか通じる雰囲気がある。

あゝあ、と息を吐き出しながら、空を見上げた。

木々の合間に見える空は、どこまでも青い。

「多岐さま、でいらっしやいましょう？」

どれくらいの間、歩き続けたかは定かではない。

戻るに戻れず一応あるのかどうかもわからない集落を求めて、ぶらぶら投げやりに歩いていると、そんな声をかけられた。

見れば、獣道をもう少し進んだところに女が一人、立っている。

多岐は思わず、足を止めた。

こんな山の中に、雅やかな女が一人——どう鼻屑目にみても、あやしすぎる。あやしすぎるが、名前を呼ばれて、聞こえなかったふりをするのはどうだろう。いや、聞こえなかったふりはとてもとても、したかったのだが。

「……俺に、古種族の知り合いはいねえよ」

まだ駆け出し影狩師である自分が、名指しで襲われるほど恨まれることはあるまい。

だが、相手が人間である可能性が非常に低い場合、警戒をせずに相対できるほど、多岐も能天気ではなかった。

「わたくしは敵ではございませんわ。多岐さまをご案内に参つただけでございますよ」

「案内？ 風視さんがいった集落へか？」

いいえ、といって女はうつすらとわらった。

赤い赤いくちびるが、完全な弧を描く。

「わが主さまの館まで」

1 (後書き)

今回の主役は多岐くんです。

「主さま？」

まったくもって、ろくな予感がしてこない。

じりつと後じさりながら女を見れば、女は完璧な笑顔を崩さないまま、多岐を見つめていた。

「わが主さまは、多岐さまがいらっしやるのをお待ちでございますわね」

「俺……食料の買出しもあるし、あんまり行きたくねえんだけど」
なんだか、蛇にでもいらまれた蛙のような気分になる。

どうしても腰が引けて、苦しい言い訳をすれば、女は口を曲げてため息をついた。

「風視の君もうそがへたでいらっしやいますのね」

「は？」

唐突な言葉に眉を寄せれば、女はわずかに瞳をすがる。

「多岐さまも白々しいとお思いなのでございましょう？食料を忘れた、などと。仮にも力を代償に嘘をつくのであれば、嘘はもつとうまくつくべきですわ」

確かに、白々しいとは思った。

おおかた、ここで自分を一時的に自分たちから離すために、わざと忘れてきたのだろくらいには思っていた。

だが。

女は何故そのことをしているのだろう。

「主さまの館には、風視の君も、千早さまもおいででございましてよ。食料など、封呪の民に求めずとも、館にいらっしやればいくらでもお分けいたしますわ」

つと、歩み寄ってきた女が自分の手を掴んでくる。

「もつとも、主さまが千早さまのことで多岐さまにご迷惑をおかけするとは思えませんけれどね」

あまりにもその動作が自然だったために、多岐は女の手を振り払う機を逃した。

「あんたの主さまとやらと、千早はいつたいう関係なんだ」
身の丈ほどもあるような大蛇に腕を絡めとられたような心持がする。

かすれた声で多岐が問えば、女は嫣然とわらった。

「参りましょう？」

答える気はないらしい。

「あ、あの！」

ずるずると女とは思えないほどの力で引きずられながら、多岐は必死に声を上げた。

恐ろしい。

恐ろしすぎる。

このままついていったら、二度と生きては帰ってこられない気がする。

そういえば、古種族は例外なく人間より力が強かったという、どうでもいい知識が頭をかすめた。

「封呪……封呪の民の集落とやらはほんとにあつたのか？」

とにかく、行きたくない。

古種族は基本的に嘘をつかないから、千早や風視がこの女の主のところにいるというのは、間違いなく事実なのだろう。

事実、なのだろうが。

問題はそこではない。本能がいきたくないと呼んでいるのだ。

なにかしら理由をつけて、時間を稼ごうとしたのだが、女はあっさり肯いた。

「ごさいましてよ。そちらに」

女が指し示した先に視線をやれば。

確かに自分が通り過ぎてきた道筋に、ちらほらと小さな家が見える。

「……え？」

気づかなかった、と愕然とする多岐をよそに、女はさらに掴んだままの手を引っ張った。

「行きましょう」

抵抗らしい抵抗も出来ぬまま、多岐は坂の上にあつた豪奢な門の中へと引きずり込まれた。

季節を問わず咲き乱れる花々にあっけに取られているうちに、やたらと広い屋敷に入り。そのまま迷路のような廊下を突き進む。そして。

「主さま、ただいま戻りましてございます」

ひととき美しい扉の前で足を止めた女は、そう声をかけた。

多岐は、思わず息を呑んだ。

開け放たれた扉の向こうには、ましろい髪をした一人の男がいて、自分に背を向けた千早の姿も確かにあつて。

もしかすると、くちづけでもしていたのかもしれない。

ふたりの距離は、どきりとするほどに近かった。

千早の頭に手を回したまま、男はうつすらと伏せていた瞳を上げる。

こちらに投げられたまなざしは、濃い黄金の色をしていた。

「よう、きたな」

つむがれた、ひんやりとした声音。

ぞくり、と背筋があわ立った。

女のことも大概恐ろしいと思っていたが、この男はその比ではない。

狂ったように心臓が鳴っている。冷たい汗が流れ、指先がこわばる。足は縫い付けられたように動かなかった。

「ゆるりとしていけ」

あやかしだ、と直感した。

それも、相当に 力 を持った存在だ。

「六花」

浅い呼吸を繰り返していると、男は女に呼びかけた。

「連れて行け」

「御心のままに」

女が腕をひっぱるのを、多岐はひどく遠いところで感じていた。ずるり、と千早の身体がくずおれたのはその時だ。

視線の端に確かに見えたのに、からからに乾いた唇はその名をつむぐことさえしてくれない。

わずかに目をみはるも、無情にも扉は鼻先で閉ざされてしまう。

「ご愁傷さま」

閉ざされた扉をみつめて放心していると、女がくすりと笑った。視線だけで、意味を問う。

だが、女が答えてくれるはずもなく、多岐は再び迷路のような廊下を引きずられて歩いていくはめになったのだった。

「え……」

六花に引きずっていかれる少年の姿を見て、風視は少なからず固まった。

「……多岐くん?!」

だらだらといやな汗が流れるのを感じる。

多岐が一人でここまでこれるはずもないし、だとすれば状況的にどう考えても、六花が連れてきたということになる。

だが、六花が勝手に多岐を連れてくるはずもなし。

つまりそれは、鬼哭のあやかしの命令で、という話になってくることはまず間違いがない。

「……冗談だろう?」

これでは一体何のために多岐を山の中に置き去りにしてきたのかわからない。

鬼哭はいつたいなにを考えているのだろうか。

「鬼哭!!!」

扉を開け放って、風視は部屋に飛び込んだ。

眠っているらしい千早を床に横たえたばかりの鬼哭は、わずかに眉をよせて振り返った。

「騒がしいな」

「多岐くんがいたけど?!」

「……タキ?」

「僕がわざと山中に置き去りにしてきた子だよ。なんで連れてきたんだ」

そうまくし立てれば、鬼哭はああ、と腑に落ちたような表情になる。

「あの子には那智が接触していたんだ。千早ちゃんと仲がいいみた

いだったから、弱みになったらまずいと思って連れてきたけど……
那智の手に落ちていたらどうする気なんだ」

「さてな」

本当にどうでもよさそうな表情で、鬼哭は肩をすくめた。

「邪魔をするようであれば、消せばよろう」

「なんて事を言うんだ」

「おれはただ提案をしているだけだ。するか否かはお前の自由だろ
う」

鬼哭の性質が悪いところは、こういう台詞を本気で吐く辺りだ。
もつとも、生粋のあやかしのだから、仕方がないことかもしれないが。

「仮に」

淡々とした口調で、鬼哭は続ける。

「那智の手先に成り下がっていたとして、たかだか人間がこのおれ
に何が出来る」

「君には何も出来ないかもしれないけれど！」

言葉がまるで通じない。

いらいらしながら風視が言葉をつむげば、鬼哭はのどの奥でくつ
くつと笑った。

「千早のことを案じているのか？　ならばここに閉じ込めておこう
か」

だれを、とは鬼哭はいわなかった。

「記憶を封じて、死ぬまでここにおいておけばいい」

「冗談も大概にしようよ」

「別に冗談というわけでもないのだがな」

鬼哭は千早の額にかかった髪を払って、ようやっとこちらに向き
直った。

「どちらにしろ、特に害はあるまい。あの子供にたいした事が出来
ると思えんな」

鬼哭のいうことにも確かに一理はある。

那智が多岐に接触したのは、ほんとうにわずかな時間なのだ。
那智の手先になったとは考えにくいし多岐自身にもたいして実力があるわけでもない。

確かに、特にそれで何が出来るといいうわけではないと思う。
けれど、それでも、絶対ということはないのだ。

だから用心をしたかったというのに、鬼哭は本当にろくでもない
ことをしてくれたと思う。

「……多岐くんは、普通の影狩師なんだ。君達と白連塾の関係を教
えるのはまだ早いと思っていたんだよ」
そしてなにより。

一番の理由は、あやかしとの交流に関して免疫がないこと。

だが、そういった風視に鬼哭はうつすらと笑うことで応えた。

「それは、どうであろうな」

「……どういう意味だい？」

「あれは気づいておろうよ」

風視は言葉の意味をはかりかねて、眉を寄せる。

だが、鬼哭がそれ以上言葉を重ねることは、なかった。

「おれ、なにか恨まれるようなこと、したかなあ……？」

通された部屋で——もとい、六花に引きずってこられた部屋で、多岐は途方にくれたようにため息をついた。

特に冷遇されている、というわけではないと思う。

この部屋も普通に客間だし、卓の上には湯気を立てている料理が並べられているし。——日頃見たこともない、豪華な食事である。特に、数年来食べていない真白いご飯がまぶしいほどだ。汁物もあるし、美しく飾りにきられた野菜の煮付けもあるし、極めつけは詰め物をして焼いたらしい山鳥だろう。

食事に取り上げられた瞬間、腹の虫が遠慮もなくぐうつ、と鳴いた。「……せつかくだから、食おうかな。いただきます」

途方にくれてはいたが、とりあえずそれは横においておくことにして、多岐はいそいそと箸を取り上げた。熱いものは舌を火傷するほど熱いうちに。冷たいものはぬるくなる前に食べることを、多岐は常日頃から心がけている。

そのほうが絶対的においしいからだ。

「うまい！」

ぱくりと頬張れば、口の中ですべてがとろけていく。

一言賞賛したあとは、もう物も言わずに多岐は食事に集中した。

こんなにうまい食事は食べたことがないとさえ、思う。ひどく幸せな心地がした。

すべてを平らげるのに、そう時間はかからなかった。本当に、自分でも一瞬で食べきったと思う。

「ごちそうさまでした！」

特に誰が聞いているわけでもなかったが、多岐は両手をパンと合わせて、深々と空になった器に向かって頭を下げた。

腹を満たせば、少し人心地ついた気がする。

きよろきよろと、今更ながら部屋の様子を見渡せば、開いた窓から祈樹が咲き誇っているのが目に入った。さらにその向こうには、先ほど千早とあやかしがいた部屋が望める。

「あれ……？」

距離はそこそこあるが、それでも室内の様子は見て取れる。

そこにはなぜか風視がいて、なにやらあやかに食って掛かっているようだった。

「なにやってんだろう」

首を傾げてみたものの、さすがに向こうでの会話がここにいて聞こえるはずなかった。

だが、ふとあやかしがこちらを見た一瞬があった。無造作に投げられたまなざし。けれどそれは確かに自分に向けられていたと確信する。挑発的な、表情を持って。

何故だかはわからないが。

あやかしに、嫌われている気がするのだ。

そこまではいかないかもしれないが、少なくとも好かれていないのは確実だと思う。

会ったのはさっきがはじめてなのに、何故そこまで嫌われているのかはわからないが。

「極力、あのあやかしの目に付かないとこにしよう……」

ため息混じりに多岐はかたく心に決めて、そろそろと窓から視線を外した。

「さて、俺はどうしたらいいのかな」

懷から、がさごそと取り出したのは、不可思議な文様の描かれた一枚の札だ。

『あの娘は、古種族の血でも引いておるのか。それともあやかしの手先なのか』

千早と二人、待ちぼうけを那智に食らった日の夜。

那智の居室に呼び出しを受けた多岐は、そこで那智のそんな問いを受けた。

那智はなにやら書き物をしていて、多岐が部屋にはいつても、顔を上げることさえしなかった。

『どういうことでしょう？ 千早とは幼馴染ですがそんな話は聞いたこともありません。普通の人間ですよ。あやかしと接触したという話も、任務以外ではしりません』

くるべきときが、きた。とても言うべきなのかもしれない。

けれど、今まで散々心の中で練習してきた台詞は、自分でも感心するくらいによどみなく唇からつむがれた。

『ならば、やはり桜ヶ淵か』

けれど、ふと筆を止めた那智は、空をにらんでぼつりとつぶやいたのだ。

確信を持った、声音で。

4（後書き）

悩んだのですが、千早視点を入れるとややこしくなるため、この章は多岐くん主人公で頑張ることにしました。

多岐には答えられなかった。

じりり、と蠟燭の芯が燃える音だけが、妙にはつきりと聞こえた。桜ヶ淵。那智はそこまで掴んでいるのだと思うと、ぞつとした。

たかだか一介の見習い影狩師のことなど、だれも——特に那智のような、高位の影狩師が気にかけることなどないと思っていたのに。

『わしはな、古種族と人間が馴れ合うのはよくないと思っておるのだ』

淡々といった、その口調に、特にせめる色はない。

『組織の存続のためには、ときに、敵と裏で取引を交わすことも必要かもしれん。それを責めるつもりはないのだ。だが、常に裏でなれあうのはいかななものか』

暗さが、室内を満たしている。

書き物にもどった那智は抑揚なく、口を動かしながらも、手を止める気配はない。

那智は、清廉なのだと思う。

そして、とてもあやかしを憎んでいるのだと思う。

千早をかばいたい自分としては、やりにくいが、影狩師としては真つ当な心の持ち主なのだ。

『那智様……』

『あの娘がいかなものなのか、わしにはまだわからぬ。巻き込まれているだけならば、助けてやらねばなるまい』

助けてやらねば、という那智の言葉に、わずかに心が動いた。

桜ヶ淵から戻ってきた千早。変わった雰囲気——具体的にはわからなかったが、古種族よりになってしまったのは、なんとはなしに間違いのないような気がしていた。千早は何も言わなかったから、現状を把握できないのだ。

もし、千早の本意でなく、巻き込まれているのなら。

那智ほどの力と権力の持ち主なら、千早を助けてくれるのかもしれない。

『……』

口を開きかけたものの、多岐は結局何も言わずに唇を結んだ。

だが、もし万が一。千早が自身の意思で、古種族よりになつていたら、どうすればいいのか。

古種族を憎む那智のこと。

もし、そんな事実が判明すれば、間違いなく千早を処分しに動くに違いない。

『俺は……本当に何も知らないんです』

ためらったあげく、多岐はようやくと、それだけをいった。

自分だって、影狩師なのだ。古種族を憎む気持ちは多分、一般の人間よりも強い。

けれど。

けれど、もし。

大事に思っている相手が、古種族となんらかのつながりがあつて困っていたら。

どうすればいいのだろう。

どうすることもできない。

ただ、その相手を犠牲にしてまで、古種族を壊滅させたいほど、古種族がにくいわけでもない。

それなら、自分はまだ。千早を守るように、動くだけだ。

『けれど、那智様。もし……千早が古種族に脅されて手先になつていたりしたのなら、助けていただけますか』

言葉をえらんで、ひとことひとことをゆっくりと問いかける。

ふと、顔を上げれば、那智が手を止めてこちらをみつめていた。その鋭い眼光を負けないように、まっすぐみつめ返す。

『もちろんだ。同胞は守らねばならぬ。その尽力は惜しまぬ』

那智が、どこまで本気で言っているのかはわからない。

那智は、大事に思っている相手が自らの意思で古種族とつながり

があれば。おそらく迷いもなく切り捨てるのだろ。それほどに、古種族に対する恨みが深いのだ。

けれど、自分が那智の手先として動けば、とりあえずは千早を那智の手から、守ることが出来る。

当面の間だけ、であつたとしてもだ。

迷いながらも協力を申し出た多岐に、那智はこの札を渡してきたのだ。

『この札を用いれば、扉を開くことが出来る』

そう、那智は言った。

封じられた場所を、中からこじ開けることが出来る、と。

ごろん、と室内に転がって、多岐はその札をまじまじとみつめた。つまりは、那智をこの鬼哭岳の主の館へ引き入れることができる、ということにほかならない。

「どうしたら、いいのかな……」

思い出すのは、先ほどのあやかしの冷たいまなざしだ。

千早にくちづけをしたふうだったあのあやかしは、多岐の苦悩などたやすく見抜いて、その上で嘲笑しているようにさえ思えた。

たとえ、千早がああかしの気まぐれにとらわれているのだとして。

那智をここに引き入れて救出をはかるのは得策でないように思えた。なにしろここには那智の天敵とも言える風視もいるし、なにによりいくら那智が強くて、あのあやかしには勝てる気がしなかった。那智がいなくなれば、白連塾も終わる。そんな気がする。

風視も那智と同様の位置にはいるはずだが、風視では白連塾を繁栄させていくことは出来ないだろう。たぶん、立ち位置が違いすぎるのだ。

まだ、出会って数日。わからないことも多いが、少なくとも、風視が目指しているのは、古種族狩りの組織としての白連塾の繁栄ではないような気がしていた。

どこを見ても、わからないことだらけで八方塞な気がする。
札を懷にねじ込んで、多岐はため息とともに瞳を閉じたのだった。

「やあ、おはよう」

札の使いどころを考えているうちに、いつの間にかうとうとしてしまったらしい。影狩師の天敵とも言えるあやかしの棲む場所で、自分でも呑気だとは思ったが、疲れていたのだからしょうがないと言いつく考えた。

ぱちぱちと目をしばたかせれば、ぼやけた視界に映っていた風視の顔がようやく見える。

「……風視さん」

「多岐くんてば、なかなか強心臓の持ち主だねえ。いくら鬼哭に害意はないといっても、彼はれっきとしたあやかしだよ？」

反動だけで上半身を起こした多岐は、その言葉に軽く頬をかいた。寝ていたせいか、思考が鈍い。

「あー……」

かすれた声を無意味に出して、がしがしと髪の毛を混ぜ返す。

「そういう風視さんはここでなにしてるんですか」

「うーん。いうなれば手続きを踏んでたのさ」

「手続き？」

眉をひそめた多岐に、風視はそうそう、と軽い調子でうなずいた。「まだいつてなかったと思うんだけど、最終的な目的地は桜ヶ淵なんだよね」

風視が出した地名に、自分でも表情が引き締まるのがわかる。

桜ヶ淵——2年前、千早を「変えてしまった」地。

「桜ヶ淵に、何をしにいくんですか」

「いつてみれば、調査かな。誰かがあの地を荒らしている可能性があるあるんだ」

風視の説明では、何が重要なのかさっぱりわからない。けれど、多岐はあえて口をつぐんだままでいた。

ただ無言のまま。風視をみつめる。

風視もただ、その視線を受け止めた。

「……風視さんに聞きたいことがあるんです」

しばらく逡巡したあと、多岐はゆっくりと口を開いた。

なんだろう、と風視が応じる。

迷いは、まだあった。選択肢が多すぎて、正しい道の見当がつかない。

「千早は……人間ではなくなったのですか」

「君はどう思うんだい？」

逆に問い返されて、多岐は口をへの字に曲げた。

「わかりません。ただ、古種族の気配に近いときがあります」

じつと風視を注視していたが、その表情はうごかなかった。

「那智さまは、あやかしに絡めとられているのだったら、助けると」

「それはやめたほうがいい」

なぜだか、その言葉には、風視は即答した。

「那智は強いけれど、鬼哭に真っ向から勝負を挑んで勝てるほどではないよ」

多岐の隣に腰を下ろし、風視はひとつ息をはいた。

「鬼哭はなぜだか知らないけれど、千早ちゃんを気に入っている。

だから、2年前の桜ヶ淵で死にかけていたところを助けたんだ」

「助けた？」

そんなことは初耳だ。

鸚鵡返しにすれば、風視はわずかに顎を引いた。

「詳しいことはわからない。僕も鬼哭から事後報告で聞いただけなんだ。こぼれてなくなりそうだった千早ちゃんの命を、鬼哭が己の力で補ったのだと聞いている。つまり、君が言うように、千早ちゃん人間からは遠くなった、といえるかもしれない。完全な古種族ではないけれど、ほぼあやかしに近い存在だといえる。だが、まだ不安定だ。下手に鬼哭の保護下から引き離せば、死んでしまう可能性がある」

それは、多岐としても、望むところではない。

だから、2年前に千早を助けた鬼哭にお伺いを立てにきたのかと、勝手に解釈をした。

「こんなことを言うのもなんだけど、千早ちゃんを殺したくないのなら、那智には近づかないほうが懸命だよ」

風視は独り言のように、ぽつりと呟いた。

「那智は、融通の利かない男だ。古種族を憎んでいるし、彼らと交流のある僕をなんとかして抹殺しようとしている」

「……風視さんは、なぜ古種族と交流をもっているのですか」

少し悩んだあと、思わずそんなことをとうていた。

答えるとは思えなかったけれど、風視は一瞬口を閉ざしたあと、また静かに口を開いた。

「なぜ、か。そうだな……」

しきりに首をひねりながら、風視はちょうどいい言葉を探しているふうだった。

「白連塾との利害が一致しているから、とでも言えばいいのかな」

「利害が一致？」

多岐が聞き返したのも無理はない。

狩るものと狩られるもの。この二つの間に一致する利害をいったいどうして見つけるといえるのか。

「まあ双方とも、別段無意味な争いを望んではないんだ。古種族は静かに暮らして生きたい。人間は脅かされることなく暮らして生きたい。それならば、そのふたつの調和を乱すものを取り締まればいいと思わないかい」

「それが、風視さんの望みなのですか」

「まあ、正確に言えば、奥さんの望みをかなえてあげただけなんだけどね」

そうつぶやく風視はあまりに悲しいまなざしをしていて、多岐はそれ以上問いを重ねることができなかった。

沈黙が満ちていく。

多岐は何とはなしに、間が持たない気がして。湯飲みの底にわずかに残っていた湯を飲み干した。

「とりあえず、さ？」

様子を見るような調子で、風視がちろりと視線をよこした。

「僕は、千早ちゃんを守らなきゃならない。だから、君も僕に協力しなよ」

傲慢な言い方だと思った。

自分が是ということを確信している言い方だ。

けれど同時に、悲壮なまでの清廉さをもつ那智よりは好ましいと、

思っただのだ。

「目がさめたか？」

ひんやりとした声が、耳へと滑り込む。

千早は重いまぶたをようやくと持ち上げた。

黄昏時の濃い黄金の色をした光が部屋に差し込んで、満ちている。時間さえも歩みを遅めるほどの、静けさ。

あやかしがじつとこちらをみつめているのがわかり、千早はゆっくりと身を起こした。

「気分はどうだ？」

「……鬼哭さん」

「氷流と呼ぶがいい。おまえには名を許したはずだ」

脇息にゆったりともたれたあやかし——氷流は抑揚の少ない声でそう言った。

「もうすぐ夕餉だ。よい時間に起きたな」

なんだか子ども扱いをされている気がする。

だが、言われた直後にわずかに腹が鳴れば、言い返すことさえままならない。

「桜ヶ淵にはおれも行くこう」

伸ばされた氷流の冷たい指がかすかに頬に触れる。

「……おまえを一人で放つてはおけまいよ。　　気　　が乱れればことだからな」

氷流のまなざしは、ひんやりとしていて、やわらかい。あやかしのなにどうしてこうも、慈しみにあふれているような気がするのだろうか。

すこし、ためらいがちに千早は頬に触れている手に触れ返してみ

る。

そうすれば、ほんのりと氷流が微笑したような気がした。

7（後書き）

話がくどいなあと反省しつつ、書いてます…

次回からは新章になります。

もうちょっとサクサクテンポよくを目指します（予定）

青い空。白い雲。なだらかな山並み。

「……歩いてくるんだ……」

鬼哭が棲まう、屋敷をでて山道を歩きながら、千早は思わずつぶやいた。

「どういう意味だ？」

「どうって、まんまの意味だけど……」

物騒な獣を連れてのんびり空を見上げている風視と。

こちらを窺ってばかりの多岐と。

自分と、なぜか一緒についてきたあやかし、氷流。

「なんかさ、氷流ってエライひとな感じなのよね。あやかしの王様って言うのか」

風視がちりりとなにか言いたげに視線をよこしたが、結局は何も言わないまままた前を向いてしまった。

「だから、なんていうのかなあ。旅をするのに歩くって言うのがなんかぴんとこないんだよね」

不思議なことだったが、まるで多岐に話しかけるように、氷流には話せる。

ひんやりとしたまなざしの奥の優しげな光が何をいっても許してくれそうな気がするのか、あるいは。あきらかに人間ではない、俗世間とはかけ離れた存在だからなのか。

人好きのする顔立ちをした風視よりも、なぜだかよっぽど話しやすいのだ。

「歩いていかねばなんとするのだ？」

面白がるような氷流の問いかけに、千早はうーんと首をひねった。「馬、って感じじゃないのよね。風視さんみたいな牙獣も違うし、

英雄譚にでてくる主人公みたいな龍つてのもなんか変だと思う」

「輿^{こし}とかか？」

横合いから、多岐が口を挟んでくる。

「んー一番しつくりくるかも？」

4人がかりで運ぶような、それこそ皇帝が乗るようなものを脳裏に描いて、千早はこっくり頷いた。

「輿か」

笑みを含んだ声音でつぶやいて、氷流はまるで当たり前のように千早の髪に触れてきた。

「お前が乗りたいというのなら、用意してやるぞ」

「私が？だめだよ、私はガラじゃない。乗るのは氷流だよ」

ぱたぱたと手を振って、千早は隣を歩く氷流に目をやった。

「絶対似合うと思うんだよね」

「そうか。だが、大仰だな。してもいいが、目立って仕方あるまい」

「そつかあ、そうだよねえ……残念」

風視が一生懸命そつぽを向いているのが気になるが、とても平和で素敵だと思う。

氷流を訪ねていくときは、自分があやかしだという途方もない現実や、桜ヶ淵のこと、先の見えない未来に不安がこみ上げてどうしようもなかったが、氷流と一緒に歩いているだけで、気分がとてつもなく晴れやかだった。

力 あるあやかしである氷流からみれば、自分なんて限りなく人間に近い存在だし、影狩師なのに氷流と仲良しな風視をみていれば、自分が影狩師でいいのかなんて悩んだことが馬鹿らしくなってくる。

桜ヶ淵のことだって、氷流と一緒にいってくれば、あっという間に解決する気がするのだ。

なにしろ、あの狂った夜斗を、会話の合間に封じてしまうほどの力を持っているのだから、何も心配しなくていい気がした。

「そういえば、ねえ、氷流？」

ふと気になっていることを思い出して、千早は氷流の前へと回り込んだ。

「どうした」

「しばらく私と一緒に行くんだよね？」

「ああ」

「その髪はどうするの？」

「髪？」

千早はこくりと顎を引いて、その絹のように滑らかな髪をひと房、手に取ってみせた。

「キレイな雪の色。でもね、人間の髪の毛はふつつ白くないんだよ」

「案ずるな」

千早の言葉に、氷流は微笑をうかべた。

「人間なぞというものは、見えるものしか見ないものだ。おれには気づかぬだろうよ」

よくわからなかったが、氷流がいうのなら大丈夫だろうと、千早は頷いた。

「ところで」

平和で和やかな空気を、遠慮がちにやぶったのは先頭に行く風視だった。

「桜ヶ淵に向かう前にちょっとやることがあるから、お付合いいただけるとありがたいね」

そう言っただけで風視が示した先には、深い深い溪谷があった。

ただふつ々の溪谷の溪谷と違うのは、底の方を流れる水が不自然なこと。

よくよくみれば、それは水ではなく、水の幻のようであった。

「なに、これ」

道から外れて、千早はぴょんと、川のようなものの中へ降りてみた。

足首の辺りで、波紋が広がる。まるで、本物の水のように。けれど、感触はない。

手を浸してみようと思っても、さざなみはたつものの、すくってみることさえ出来なかった。

「幻の川って言うのかなあ……時廻^{シエ}の民の隠れ里って言うか……」

「シエ？」

「ときめぐりの民とも言う」

齒切れの悪い風視にかわって、口を開いたのは氷流だ。

「シエの音は、死の穢れとも通じる。封呪の民と同じく、都合のいいように使われ、人間であることから追われた者たちだ」

「よく、わからない……」

「彼らは屍^{かばね}を操ることを得意とするのだ。痛覚を持たない屍を操り、帝の手足として、賊を追い反逆者を狩り、古種族を退けてきた」

淡々とした口調で氷流は語る。

「だが、強すぎる異形を、人間は忌む。職務に忠実すぎた彼らはやがて追われて、ここに逃れてきたのさ。追ったのは、当時の影狩師たちだ」

「え……？」

千早は思わずまたいた。

見れば、風視が苦りきった表情をしている。

「影狩師は正義の味方、というわけではない」

氷流は別段責めるふうでもなく、言葉をそう締めくくった。

そうして、ゆっくりと空を真一文字に薙ぐ仕草をする。

ぱりん——と、ひどく澄んだ、切なく碎ける音がした。

「ところで……白連。時廻の民に何の用事があるのだ」
ぱき。ぱきぱき、ぱりん。

硝子に蜘蛛の巣のようなヒビが走るように、空間に亀裂が走っていく。

その不可思議な現象を背に、氷流はどうでもよさそうに、そう問うた。

「いや……わざわざ千早ちゃんと多岐くんを伴って、ここまで来たって言うのに、何もせずには帰れないというか……それでは報告が困るというか。何か仕事をして帰らないとマズイというか……」
「ほう？」

「いやほらね？まさか堂々と君に会いに行ってきましたって言えないいいんだけど、言えないだろう、そんなことはさ！那智だっているわけだし！！」

わたわたと言いつくをする風視の横で、牙獣がひとつ、素知らぬ顔で大あくびをする。

「何故いえぬのだ？言えばよかるう。やましいことをしているわけでもあるまいに」

「いや、だからさ……」

かぶりを振りながら、風視は深々と嘆息した。

「僕は一応影狩師なわけで、あやかしと交流があることは公然の秘密なわけだけど、公には出来ない事情があるんだよ！」

「みなが知っていることならば、隠しても無駄であろうが」

風視の「人間的」事情はあやかしの氷流には通じないらしい。

いやあるいは。わかっていてあえてからかっているのか。

千早と目があつた氷流がにんまり笑ったところを見ると、それは後者なのかもしれない。

「まあとりあえず、桜ヶ淵の桜珠の件だけど、ここにもなんかかわりがありそうなんだよね」

つかれきつた様子で呟いた風視は、改めて、空間が硝子のように欠けていく様子をじっとみつめていた。

硝子にひびが入って砕け散ってしまうように、すべてが欠け落ちるまでそう時間はかからなかった。

欠け落ちた先には、少し広くなった空間と、まばらに家の建つ集落と、おびえたようにこちらをみつめる村人たちの姿がある。

皆一様にこわばった顔をして、互いにかばいあう様子を見せていた。

「な、なんか。すごく怖がられてない？」

千早がひそひそと隣に立っている多岐に言えば、多岐もしっかり顎を引く。

「とって食われそうって思ってるくらいにはびびってる気がする」

「これは、鬼哭さま!!」

そんな多岐の言葉にかぶせるように、少女の声が響いたのはその時だった。

まだ10歳をいくつか過ぎたくらいの、幼い感じの少女が、長い裾を引きずりながら小走りにかけてくる。

「ときめぐりの里へようこそおいでくださいました。ご連絡をいただけましたらお迎えに上がりましたのに」

外見は幼いのに、少女の台詞回しはひどくこなれたものだった。

「本日はいいほどのようなご用件でいらっしやいますか？ なにか不都合なことでもございましたでしょうか。鬼哭さま御自ら、このような辺鄙な場所までお越しくださるなんて」

「彼女はこの里の長老だよ」

千早が目をはちくりとしていると、横合いから風視がこそつと耳打ちをしてくれる。

「長老？」

「そう、あんな外見だけど、もう百歳近いはずだ」

その言葉に千早は驚いて、さらに目をしばたいた。

まじまじと横から観察してみるが、つややかな卵形の顔といい、幼さの残る手といい、どこからどうみても10歳前後にしか見えな
い。

「操る屍が腐敗しないように用いる技術の応用だと、以前に聞いたことがある」

「すごいですね……」

「不老不死説が流れて、人間に狩られるわけさ。彼らの技術は、人間の民が納めることができる範囲をはるかに超えている」

「用があるのは、おれではない」

千早と風視がこそそとしゃべっている間も、氷流と少女の会話は続いていた。

「そやつが聞きたいことがあるというから、扉を開けたまでだ」

氷流が面倒気に顎で風視を指ししめす。その先を追った少女は、かわいらしく小首をかしげた。

「まあ、風視さまではございませんか。お久しぶりでございます」

「あ、うん。ひさしぶり」

肯きながらも、半歩風視が後ずさったのを、千早は確かに見た。もしかすると、少女のことが苦手なのかもしれない。

「御用がおりでしたら、わたくしのほうからお伺いいたしますのに」

用がこつちからいくのに。ここにはきてほしくないのに、なんできたんだ！空気読め！と、笑ってない少女のまなざしが語っているような気がして、千早はわずかに肩を震わせた。

「うん、まあ……直接確かめたいこともあったしさ。これを知らないかな」

「あら……これは」

風視が懷から小さな袋を出して、中身を取り出す。

その桜色の小さな珠は間違いなく桜珠のようだった。

氷流も遠目にそれを見つめ、わずかに眉間に皺を寄せているようだった。

「桜珠、ですわね」

「最近やたらに市場に流通しているんだけど」

「……わたくしたちが噛んでいるとも言いたげですわね」

少女の瞳に剣呑な表情が浮かぶ。

風視は大慌てで激しくかぶりをふった。

「そんなことは！」

「……あるのだろうか？」

くつくつと低い声で笑いながら横から割り込んだのは氷流だ。

いつの間にか千早の横手にきていた氷流は、いつの間にか多岐を向こうに押しやって、千早の肩にふれている。

「桜珠の製造法を求めてきたくせに、よく言う」

どういふことだろう、と千早が氷流に視線を向ける。

氷流はわずかに瞳をすがめて、千早をみやった。

「桜珠を作るのは桜ヶ淵だけだ。となると、封じられた桜ヶ淵から、力を取り出す術がひとつとなってこよう。死者から生前の力を引き出し用いるときめぐりの民ならば、何か知っているだろうと思ったのだろうかよ」

3 (後書き)

千早が主役…のはずなんですが。

「鬼哭！」

非難するように、風視は声を上げた。

「なんで君は僕の邪魔ばかりするんだ」

「さてな」

にやりと嗤った氷流は軽く肩をすくめて見せた。

「おれが聞いたほうが早いと思っただのさ。なあ？」

話を振られた少女は、難しい表情のまま一歩後ずさった。

少女はおそらく氷流が怖いのだ。あやかしで、ついでにこの都隠の山々の主たる氷流が。ここに人間からの追っ手を逃れて隠れ住んでいるのなら、なおのこと。

それは多分、むりのないことなのだ。

「……存じ上げませんわ」

だが、少女はふいとそっぽを向いた。

「ほう？」

「……私どもの呪は門外不出。教えてほしいと乞われたところで、教えるはずありません」

「なるほど？」

意味深長な氷流の相槌に、風視がはつとしたような顔つきになる。

おもむろに懷に手をつ込むと、手帳らしきものを取り出して、すごい勢いで頁を繰っていく。

「乞われたのはこの前の三日月のあたりかい？」

繰り広げられていく会話に、千早はただ黙って聞いていることしか出来ない。

だが、代わりに脳裏で可能性を集める。

この前の三日月というのは、半月ほど前のことだ。

「半月前——といえば。いったいなにがあった？」

記憶をたどれば、答えは比較的たやすく手に入った。

見間違いかもしれないが、亡骸が夜中に動き回っている気がする、という依頼を受けて、神殿に多岐と泊り込んだことがあった。最もあの時は、何も起こらず、神官たちの見間違いだろうということに戻ってきたのだが。

少女の言葉は、教えてといわれたけど教えなかった、というように聞こえる。

だがもし。

教えなくても、盗まれたのだとすればどうだろう。

呪について、まとめられた本などいい。盗られて、盗った相手がひそかに呪の練習をしていたのが、半月前の事件の真相だったのかもしれない。

「そのひとは、私ぐらいの女の子でしたか？巫女装束の」

桜巳の姿が頭をかすめる。

ずっと気づかないふりをしていたけれど。

桜ヶ淵の民人たちは、困っていたはずだ。

夜斗が創り出す、桜珠という貴重な収入源を失って。

もともと桜ヶ淵は桜が咲き誇る例の淵以外に、取り立てて特徴のある土地ではないのだ。

日々の食い扶持を稼ぐだけで精一杯の痩せた土地。特に食べられる獣もおらず、夜斗の領域である桜ヶ淵以外には、魚が取れるような河川もない。

桜巳が、もし。

日々の暮らしに困って、夜斗の桜珠を作ろうとしているのなら。

自分は一体どうすればいいのだろう。

唇をかみ締めて、千早はただ少女を真正面からみつめた。

じつと、千早は少女とみつめあつた。

少女の不思議な色合いのまなざしに、なにかを読み取ろうと息をつめる――が、そう簡単にその双眸から意図が読み取れば苦労はしない。

だが、ほんの少し少女が笑んだ気がした。

「そなたが言うような小娘などは知らぬ」

氷流や風視に対するのとは違って、ぞんざいな口調で少女は言った。

「教えを乞いにきたのは、そなたらの仲間であつた」

「……仲間？」

「ついでに言うなれば、男であつたよ。そなたらの言葉で言えば、やや老年にさしかかった男だ」

と、いうことは桜巳ではないのだろうか。

迷つて、氷流をちらりと見やれば、その黄金色の瞳にぶつかった。

「白連」

もしかすると、氷流は迷いを読み取つたのかもしれない。

千早自身には特に答えることはなく、ただ言葉を風視になげた。

白連塾の関係者だからか、氷流が風視を白連と呼ぶのはわかつている。

視線だけで風視が応えるのに、氷流は言葉をかぶせた。

「桜ヶ淵の件は、あの男が絡んでいるのだろつ。身内を束ねるくらいのこととしては見せたらどうだ」

「もともと抱えているものが違うんだ、無茶を言わないでくれ」

主語をごまかしたその言葉を、風視は確かに理解したようだった。

「それを甘えというのだ。もともとそれを承知で呑んだのだろつ。ならばあの男の主義主張くらい呑みきつてしまえ」

風視は仏頂面になつたが、氷流の言うことに思うところでもあつ

たのか、そのまま口を開くことはなかった。

「ご用件がそれだけならば、わたくしはもうお暇させていただいてもよろしいのでございましょうか？」

千早らの会話が途切れたところで、少女が横から問ってくる。

間違つても、少しゆるりとしていかれては、と奥へ誘わない辺りが少女の警戒心の表れといったところだろうか。

まあもつとも。

ここはまだ都隠の山の内。

仮に誘われたところで、氷流の屋敷のほうがよほど居心地がよいのだから、彼自身が断ることは目に見えている。鬼哭岳へと道を開くことは、この山々の中にあつてはそれほど難しいことではないらしいのだ。

「白連、おまえ、芽津にいくのならば、その子供をつれてふたりで行け」

かまわん、と少女に短く答えを告げた氷流は、軽く手を振って見せた。

「え、俺？」

子供、と指された多岐が拳動不審におたおたとする。

「邪魔をしたな」

氷流が一瞥を少女にくれた途端、幻の川が光った。

緑色の光を帯びて、先ほど砕け散った空間が時間を逆戻しにするかのように、元に戻っていく。

「いいけど、なんで？」

おたおたする多岐の肩を軽くたたいて、聞いたのは風視である。

不可思議なその現象を目の前にしても、さすがというのかなんというのか。動じる様子さえもなかった疑問点を口にしただけだった。「今、千早を芽津に入れたくはない。おれは都を迂回して桜ヶ淵に入る」

「え、なんで？」

何事もなかったかのように——そこにははじめから集落などなか

ったかのように、何もない空間が作られていくのに見入っていた千早は、自分が話題に上ったことに驚いて思わず口を挟んでしまった。風視と氷流の視線を一身に受けて、口を開いたことを後悔する。先ほどの多岐のようにずっと黙っていればよかったと思って、もはや後の祭りである。

「芽津には、白連塾がときめぐりの民を追ったあとに張った結界があるのだ」

「結界……」

「古種族を阻むためのものだ。ある程度の力を持っていればそう気にするほどのものではないがな」

氷流ほどの力の主がいう、ある程度、とはいったいどの程度なのか。

芽津に古種族が近寄ってこないのは、めんどくさいだけじゃなかったのかと、千早はほんの少しだけ認識を改めた。

「おまえは今、変化途中にある。注いだ力がおまえ自身になじむまでは、あまり無理をしないほうがいい」

自覚がないので、あまり腑には落ちないのだが、とりあえず千早は肯いた。

自分を人間ではなくした、氷流。おそらくいまは、氷流のほうがか千早自身の変化に詳しいのだろう。

5（後書き）

……多岐くんが活躍しません……
次の章ではきっと……

「それじゃあ、多岐くん。君は僕と芽津へいこうか」

風視と氷流はどうやら視線だけで会話が出来るらしい。

「千早ちゃん、桜ヶ淵でまた会おうね」

呆氣にとられている千早にひらりと手を振って、風視は身軽に幻の川から道へと戻った。もちろん、呆けている多岐を引っ張っていくことも忘れない。

「風視さんたちは、芽津によるの？」

「そうだな」

「……どうして？」

特に会話がなくても、4人もいればにぎやかだった。

今はその人数も半分になって、少しは寂しい気がしないでもない。のんびりとした調子で肩を並べて歩きだしながら、千早は氷流をみやった。

「呪には、おおまかにわけて2種のものがある。場にかけるものと人自体にかけるものだ」

「うん」

「相手自身にかける類のもので、人間は基本われらに勝つことは出来ない。もともとわれらのほうが、呪を扱うに適した存在だからだ。だが、場にかけたものならば、人間もわれらに太刀打ちすることができる」

氷流がそう丁寧に説明してくれたことは、影狩師の基本知識だ。

だから、というのものもあるのかもしれないが、主としてならうのは場にかける種類のものが圧倒的に多い。

「いくらわれらの力が強いとはいえ、場にかけられた呪は力任

せに解くことができぬからだ。解くためには手順が要る。——風視はその手順を調べにいったのだ」

かけられた呪がわからねば手順もわからないのだろう。
ふうん、と千早はうなずいて空を見やった。

町よりもずっと空が近いように見えるのは、人の気配が薄いせいなのかもしれない。

桜ヶ淵の空に、どこか似たような気がするのは、たぶん気のせいではないのだ。

「私、絶対桜巳だと思ったの」
「ん？」

「桜珠を作って売ってるの。桜巳は、夜斗さんのことも、夜斗さんが治める桜ヶ淵のことも大好きだから、守るためならなんだってすると思う。一途な、子なんだよ」

「そうか」

短く、氷流は相槌を打った。

「ところで、千早。おまえは友人があやかしと付き合っていることに關して、抵抗はないのか？」

その問いに、千早は思わずまたいた。

「……今更、それを聞くの？」

声に失笑に近い笑いがまじったのは、別段イヤミでもなんでもない。

助けるためとはいえ、あやかしに変化させてしまってからそれを聞かれても、困る以外にはない。

「もっと早くに聞くべきだったか？」

氷流もつられて苦笑する。

「まあいいけど……」

千早はその問いに答えるべく、言葉を探して眉を寄せた。

「桜巳もさ、葛藤があったと思うんだよ」

歩調に合わせたゆっくりとした口調で、千早はそう言った。

「だって、ほら。私一応影狩師でしょ？風視さんはあんなけど、一応あやかしとは敵対するものじゃない？一般常識的には」

「そうだな」

「その私に、自分の彼氏はあやかしなんですっていうのは、すごく大変なことじゃないのかなって思う」

2年前の、桜ヶ淵。

もうひどく遠い日のようだが、記憶は今でも鮮明に呼び起こすことが出来る。

桜巳は久々に再会した自分に、ずっと何かを言い出しかねていた。なんども口を開きかけ、話題をすりかえて。また、言いかけ。ただその繰り返し。

千早に、紹介したい人が、いるの。

ひと、というわけじゃないんだけど……あってくれる？

不安げに揺れた桜巳のまなざしを覚えている。

今にも逃げ出したいような表情をにじませた、細い肩。

「でも、桜巳は。影狩師の千早、じゃなくて。私を見てくれたんだよ」

「ん……？」

「うまくいえないんだけどさ。影狩師になっても、昔からしってる私を信じてくれてたって言えいいのか？あやかしを狩る影狩師でも、自分の彼氏を問答無用で狩ったりしないって思ってくれたんだよ」

ふむ、と氷流はあまり腑に落ちないような顔つきで、「とりあえず」相槌をうつたようだった。

「……わかんないかな？ 私説明へたなんだよね」

「いや……なんとなくはわかるが。そもそも古種族というものは、あるがままを受け入れるもの。在るがまま在るがように。ゆえに、個を認めた、と喜ぶお前の言葉はあまりすつきりとは理解できぬのさ」

どうやら、当たり前すぎて、どこが嬉しいのかよくわからない、といったことのようなのだ。

千早はちよつと口をへの字にまげた。

「とにかく、嬉しかったんだよ。だから、その期待に応えたかった。びつくりしたけど、桜巳が選んだ相手なんだから、悪いものじゃないんだろうつて信じようと思った。なのに、夜斗さんはあんなことになっちゃうし」

ふと思つたのは、今更そんなことを問うてきた氷流の意図だ。

もしかすると、意図も何もなく、ただ単に千早が影狩師であることさえ忘れていたのかもしれない。

氷流にしてみれば、千早が千早であれば、それだけであとはどうでもいいのだ。

影狩師であろうと、一般の人間であろうと、仮に敵であつたとしても。千早は千早。それ以上でもそれ以下でもないのだらう。

古種族と人間は、種としてだけではなく、文化も歴史も違ふのだ。考え方が違つても当然の事。

だが、氷流は永い時間を生きている。人間と触れ合つたこともあるだらうし、違う考え方で生きていることも知っているのだらう。きっと、なんらかの拍子に、ふと自分と千早の種の違いに——ひいては、考え方の思い至つたとしても不思議はない。

だから、今更でも、きいてみた。

これはきつと、好意なのだ。

歩み寄ろうという努力の現われと言えなくもないかもしれない。

なんとなくつらつらとそんなことを考えた千早は、隣を歩く氷流の端正な横顔をみつめて、ほんの少しだけ笑みを浮かべた。

「だからさ、実際のところ、よくわからないんだ」

結局のところ、すべてはそこに落ち着いてしまう。

あやかしの恋人を友達に紹介されて、驚かなかつたと。抵抗がなかったといえば、嘘になる。でも、結局のところ、それで桜巳をきらいになることはないし、夜斗を桜巳のそばから排除しようという気にもならない。

自分があやかしになったことだってそうだ。

驚きはしたし、不安もあるものの、嫌がったところでどうにかなるものではない、という点においてはもはや受け入れるしかない事例だ。

そう自分の感情を乱暴に纏め上げた千早は、また氷流をみつめた。

「私もさ、氷流にききたいことがあるんだよね」

「うん？」

「氷流はなんで、私を助けてくれたの？」

思えば、今まで聞いたことがなかったと思う。

初めて会ったのは2年前。しかも死にかけていて、言葉を交わしたのはほんの一言二言。

その一言二言が、種という壁を超えて、このあやかしに自分を助けさせたというのがいまいちよくわからない。

助けてもらったその後も、特に接点はなく。

疑問は深まるばかりだし、気まぐれのその一言にしても、理由が弱い気がするのだ。

「そうだな。理由はいくつかあるが、一番は面白いと思ったのだ」

「……面白い？」

「影狩師なのに、あやかしを助けようと奮闘している。自分が死にかけているのに、だ。なにをやっているのだろうと思った。見ていて飽きないだろうな、とかな」

はあ、と千早は気の抜けたような相槌を打った。

死にかけていた場面を面白いと評されて、立つ瀬がないというのかなんというのか。

「あとは、礼の意味合いもある。桜ヶ淵はおれの古い知り合いだ。助けようと努力をしてくれたことに關しては、なにかしらの礼が必要だろう？ われらは少なくとも恩知らずではないつもりだ」

まあまあ、人間とはずれている古種族の言い分としては、誠実なものだと思われなくもない。

生返事をした千早に、氷流は少しわらって、前方を指差す。

長い長い山道がそろそろと終わりを告げていた。

とはいっても。距離的にはもっと長くてもいいはずだった。不思議に思つて氷流をみやれば、ほんのりとくちびるに微笑をうかべている。

「ここはおれの領域なれば。すこし近道をしてみただけだ。ひたすら山道を歩いていても、楽しいことはないだろう？」

おそらく、通常とは違う道を通るかなにかしたのだろう。

千早さえもしらないうちに。

「私たちはこのまま桜ヶ淵に？」

都隠の山々を降りてしまえば、空気さえも違う気がする。

開けた視界と、ひろびろとして木々の香りの薄い空気。ひろく渡る風。

はるか左手のほうに、遠く芽津が見えた。

氷流にそう問えば、そつと背を押される。

「そうだな。何事もなければな」

背に当てられた、氷流の手はひんやりとしていたけれど、それでもしばらくそこにとどまっていれば、ほんのりとぬくかった。

「なあ……風視さん」

物騒な獣の手綱をひいて、前に行くその背中に多岐はよびかけた。振り返りもしない風視からは、うんー？といささかどうでもよさそうな返事が返ってくる。

「俺、さっきの話よくわかんないんですけど」

もっと言えば、なぜ千早らと別行動をしなければならないのか、といったところに落ち着く。

「千早が芽津に入れないのなら、俺たちも迂回して一緒に桜ヶ淵へいったらいけないんですか」

「ああ。平たく言うとなさあ」

「ここも視線を上に向けながら、面倒くさそうに風視は言った。ちよつとくさいんだよね。那智がさ」

「は？」

「理解力悪いな。さつきときめぐりの長老がいつてただろ？男が来たって」

「あの……それが那智様？」

「そうそう、と言った風視はやはり面倒くさいという感情を前面に押し出していて、説明するのもいやそうだ。」

「その可能性が高いんだよね……千早ちゃんがあやかしになった2年前の一件にしたって、那智が噛んでいる可能性大だしね。本当めんどくさい男だよ。年なんだから引退しときゃいいのにさ」

とりあえず、多岐ははあ、と相槌を入れることしか出来なかった。触らぬ神になんとやらで、あきらかに機嫌の悪そうな風視にはそれ以上突っ込まないほうがいいだろうと思ったのだ。

8（後書き）

次回、新章に進みます。

多岐が頑張る章になる「予定」……

都隠の山から芽津まではそう遠くない。

都をぐるりとかこむ壁をこえれば、ふ、と都隠の山々とはまた違った空気が満ちたような気がした。

通りを行き交う人々。市では声を張り上げて商人たちが客引きをしてにぎやかだ。

見慣れた、風景——だがまた少し、違って見えるのは何故だろう。「僕はちよつと白連塾によってくるよ。君はこのあたりで待つてくれないか」

風視が物騒な牙獣を引いたまま都に入ってしまったときは目を疑ったものだが、人間というものは勝手な生き物というか。目が悪いとすべきか。野にいる牙獣をみれば、尋常でないくらいに騒ぎ立てるくせに、都の中に一度はいつてしまえば誰も牙獣に気づかないのだ。

よもや害獣たる牙獣を乗り物にしている人間がいるなんてことは夢にも思わないらしい。

思わないということは、目の前にいても気づかないということ。世の中って平和なんだなあと思岐はしみじみ思ってしまった。

「はあ……？」

そんなぼんやりとした思考にひたっていたものだから、多岐は一瞬風視の言ったことが理解できなかった。

「那智の様子をみてくる。あと、令状がいるからね」

「令状？」

「ほら、那智って神官だろう？神殿になにか隠してるかもしれないし、そのあたりを調べたいけど、神殿って言うのは、一種治外法権的なところだからさ」

「ああ、塾長に神殿の調査を依頼されたっていうふうに体裁を整えるわけですね」

ようやく多岐は納得してうなずいた。

この世界には、はじめに二柱の神があつたとされる。

光をつかさどる男神、闇無くろなと闇をつかさどる女神輝無かくなだ。

闇無は人間を守護し、輝無は古種族を守護するものだと言われる。

神話や伝説の類もたくさんあるのだが、ざっくり説明するならこんなところだろうか。

この二柱の神は立場の点で同等とされ、神殿や神官も同位だとされるのだが、実際のところは人間を守るといわれる闇無を奉る神殿・神官のほう幅をきかせていた。

ちなみに那智は闇無の神官だ。

神殿には、帝の力も及ばない絶対自治が約束されているのだが、白連塾だけは話が別で。

古種族狩りの組織の最大権力である白連塾が、古種族調査のためという名目で行うことに関しては、いかなる組織もそれを阻むことが出来ないといわれているのだ。古種族がこの時代における最大の脅威であるがために。

「すぐ戻ってこれると思うから、そのあたりでお茶でも飲んで待ってよ」

そう言つて風視が示したのは、つい先日、那智に待ちぼうけを食らつた多岐と千早が舌鼓を打つた団子屋だ。

ハイ、と返事をした多岐は、牙獣をひきながら去っていく風視の背を見送つて、道に置かれている椅子に腰をかけた。

「いらつしやい」

「あ、すみません。この茶団子を一皿と、あと冷たいお茶を」

すかさず声をかけてくる店員に注文をし、多岐は通りを何の気なしに眺めた。

思わず眉を寄せたのは、ふと通りに違和感を感じたからである。なんだろうと違和感を感じたものの、その正体までは至らなかった多岐は、ただじつと通りを集中して見続ける。

少女の細い手首。

道行く主婦らしき女の結い上げた髪。

男の腰紐の飾り。

薬入れの紐飾り。

「……え？」

多岐は思わず声を漏らした。

あちらこちらで見受ける、桜色の輝き。

一体これはなんだ？

いっそ異常なほどに、蔓延している、なにか。

「おまたせしました、どうぞ」

店員の少女の耳にも、桜色の珠が輝いている。

団子を受け取りながら、多岐はいやな震えが背筋を走るのを止められなかった。

多岐は、桜色の輝きがなんなのかはよくわからない。

けれど、千早や風視が、桜ヶ淵を気にしていたことは知っている。桜ヶ淵の特産品が、桜珠と呼ばれる桜色の宝珠であることも。本来なら値も高く、こんなにも普及していないということも。

だが、桜色の輝きは、少なくとも多岐の目には本物であるように見えた。

眉を寄せ、思案をしたまま。

多岐は店員の少女が持ってきた団子をひとつ持ち上げた。

濃い緑色をした、粉末のお茶を練りこんである団子だ。甘さの中にほんのりと茶が香る。

「わしもひとつ、もらってかまわんかね」

隣に誰かが座った気配は、確かにした。

とはいっても、椅子は横に長い椅子だったし、もともとこんな茶店では相席が基本だ。だから、気にも留めていなかったというのに横合いから響いた聞き覚えのあるその声音に、多岐は少なからず驚いて、団子を喉に詰めそうになった。

「そう驚かんでもいいだろう」

多岐が返事をしていないにもかかわらず、声の主は当然のように、多岐の皿から団子を取った。

げげほと盛大に咳き込んでいる多岐に哀れむような一瞥をくれ、のんびり団子を食っている。

「な、那智様！」

「芽津に戻ってきているという話を小耳に挟んでな、様子を見に来たのだ」

はあ、と呆けたまま多岐は相槌を打つ。

那智はそんな多岐の動揺には気づかぬように食べかけの団子をかざして眺め、なかなかうまいなとそんな感想を口にしたりしていた。

「あ、あの……？」

得体の知れない風視やなんだか敵意をひしひしと感ずる鬼哭とかいうあやかしも苦手だが、那智は那智で雲の上の人という認識が苦手意識をかきたてる。

もつとも風視も雲の上の偉い人はずなのだが、風視に関してはなんとなく、得体の知れなさのほうが勝っているような気がしていた。

「都隠へいつてきたのだろう。どうであつた？」

「ど、どうとは？」

「邪言のこと、都隠のあやかしの元へといつていたのであろう？」

「ぐほ！げほ！！と多岐はさらにむせた。

「心配は要らぬ。そなたが邪言のように古種族どもと通じているとは思つておらん」

邪言、というのは多分風視のことなのだろう。

焦つてなかなか喉に詰めた団子を飲み下せない多岐とは違って、那智は平然と、いつのまに頼んだのか熱い茶をすすっている。

「えっと……」

どうしたらいいのだろう。

自分でもたいして回転のいいとは思えない頭を、多岐は必死で動かした。

都隠で得た情報は、実のところたいしてない気がする。もともと千早をあやかしのところに連れて行くのが唯一にして最大の目的だったようだし、その帰り際にときめぐりの民のところへ寄つたのは言つてみればおまけみたいなものだ。

そこで得た情報らしきものは、実際多岐にはちんぷんかんぷんだった。

ときめぐりの民のところから盗まれたらしい技術。盗んだのはおそらく初老の男で、風視と鬼哭というあやかしは那智だと思つていいらしいということ。

桜ヶ淵が最終目的地だというものの、その目的地と那智を調べる

ことといたいという関係があるのかなんてことは予測もつかなかったし、それを那智にいつてもいいのかどうかということは迷うところだ。

だが、白連塾を担う影狩師のひとりとして、崇高な理想を掲げた那智が、何も言わないまま多岐を逃してくれるとは自分でも思えない。

うつう、風視さぁん……

心の中で助けを求めてみるものの、風視の姿は影も形もなかったし、なによりここで風視が戻ってくるのは多岐的には少しまずい気がするのだ。風視がここにやってきて、那智と対峙すれば、もしかしたら自分は風視よりになったと思われてしまうかもしれない。

千早を、白連塾で守っていくには、那智は敵に回してはいけない存在だと思う。

「俺、よくわからないんです」

迷った拳句、多岐は正直に自分の無能ぶりを報告することにした。下手な画策が通用する相手とは思えないし、実際わからないことのほうが多いのだから、この言葉は嘘にはならない。

「とりあえず、桜ヶ淵に行くみたいです」

「ほう？」

行き先くらいは那智ならその気になれば簡単に調べられるだろうと踏んで、ばらしてしまう。

変なふうに心臓はときどき暴れているし、背筋にはいやな汗が伝いまくっている。失敗したら一巻の終わりだ。平穏な日々は帰ってこない。

自分にとっても、なにより、千早にとっても。

「桜ヶ淵の2年前の結末の様子を見に行くというようなことをいつてました」

言葉を選びながら、多岐は慎重に口を開く。

ふむ、とうなずいた那智は、もう一口茶をすすって少し首を傾げた。

「あの娘はどうした？」

きた！と思った。

この質問はきつと来ると思っていた。

だが、一番答えにくい質問であつたから、できればされないことを祈り続けていた。

「千早は……」

唇がからからになっている。

だがまさか、あやかしへの変化途中で芽津にはいれないので、都を迂回してあやかしとともに桜ヶ淵へと向かいました、なんてことを馬鹿正直に吐いてしまうわけにもいかない。

古種族嫌いの那智に敵認定されてしまうこと間違いなしだ。

「なんか具合が悪くなって。俺たちだけ先に戻ってきたんです」「具合？」

頼むから突っ込まないでくれ！という願いもむなしく、那智が質問を重ねてくる。

多岐は泣きそうになりながらも表情は思案するようにつくり、ちらりと那智を見やった。

「そうたいしたことはないと思います。山の 氣 にでもあてられたんじゃないかな。休んだら現地で合流することになってるんです」

那智のききたいことには知らないふりをして、多岐はうそぶいた。那智がじつとこちらをみつめている。

力のある、強いまなざしだ。心の奥まで見通すような。

那智が聞きたいことはわかっていているつもりだ。千早と、風視。もしくは風視とつながりのあるあやかしが、千早に接触したかどうか。がしりたいのだろう。ひいては、どれくらい古種族に近いものなのかを。もしくは、どれほど大物のあやかしが絡んでいるのかを。

だが、多岐はそ知らぬ顔をして那智を見返した。

「そなた、あの娘を助けたいのならば、どうしたらよいのかはわかっているな？」

風視を、味方だとは思わない。

けれど、那智を千早の助けになる存在だとも思えない。

「千早が不本意ながら巻き込まれているのなら、助けていただけませんかですよね」

「同胞は救わねばならぬからな」

「影狩師は影狩師として真つ当にあらなくては」

嘘をつくのは好きじゃない。

古種族もあやかしも、好きじゃない。

でも、千早を守るためなんだから試してみせる。

にこりと笑んで見せれば、那智は重々しくうなずいて見せた。

「期待している」

ハイと応える多岐に、那智は軽く手招きをする。

「そなたに折り入って頼みたいことがある」

くらい光を秘めた眼がじつと多岐をとらえる。

ぞくりと背筋を悪寒が走ったが、今更逃げることなどできるはず

もない。

腹をくくった多岐はなるべく平然を装って話を促すように、軽く顎を引いた。

「那智が何を画策している？」

那智が属する光の男神——闇無の神殿を調べたい旨を記した令状がほしいと風視が言えば、白連塾塾長たる陵王はほんの少し柳眉を寄せた。

「それがわかれば苦勞はしないさ。だが、那智は桜ヶ淵から力だけを抜き出して使っている恐れがある」

「桜ヶ淵のあやかしの？」

2年前大きな氷塊に閉ざされた、桜ヶ淵の主。

表向きは白連塾の影狩師がなしたことだということになっているが、実際は桜ヶ淵のあやかしの知己である別の地の主が為したことであるということは、白連塾の上層部では公認の秘密である。

「どうやって、あの呪の隙間をぬったというのです」

読みかけていた書類を脇にどけて、陵王は本格的に風視の話に乗ってくる様子を見せた。

風視はもちろん反対派だったが、白連塾内部ではこれを機に桜ヶ淵の主を滅ぼしてしまおうという意見が多くを占めた。

いかに桜ヶ淵の民が主とよい関係を築いているとはいえ、所詮異種族同士。

完全な理解などは到底無理であるし、なにより、皇さえしのぐ権力を持っている白連塾の威信にかけて、桜ヶ淵のような共存関係は認めるわけにはいかなかったのだ。

桜ヶ淵の主が、封じられて動けないのであれば、滅ぼすのもきつ

とたやすいはず。

そう信じて、桜ヶ淵にむかう影狩師は結構な数に上ったという。だが、桜ヶ淵を封じた主の呪は巧みだった。

桜ヶ淵の主をきちんと眠らせて封じつつ、外敵からもきっちり守るようにつくりになっていて、誰も手がだせなかったのだ。

その巧みな呪の隙について、力 だけ抽出するなんてことは、そう簡単にできることではない。

陵王が興味を持つのも当然だった。

「ときめぐりの民を知っているだろう？」

「……できれば存じ上げないといってしまういたい黒い歴史ですけれどね」

風視の言葉に、陵王が苦い笑みを浮かべる。

ときめぐりの民を白連塾が都から追ったのは、そう古い話ではない。自らの存続のためだけに、なんの咎もない彼らを追った。陵王自身がしたことではないとはいえ、長であればこそ。歴代の長の決断もその結末も負う覚悟はできているのだろう。

静かに澄んだその表情をみて、風視は少しだけ微笑んで、次に続く言葉をさがした。

「まあ、うちが彼らにかけた迷惑はおいおい悔やむことにして。昨日、いや一昨日かな？」

首をひねりつつ、風視は言葉をつむぐ。

都隠の山々は時折鬼哭の気まぐれで、狭間に迷い込むので、時間の経過が定かではない。

「なんでもいいんだけど、鬼哭の手引きでときめぐりの長老に会ってきたんだ」

「風視さん……」

その言葉に、陵王ははつきりと苦い表情になった。

「お願いですから、そう堂々とあやかしと会ってきたなどと言わないで下さい」

「そう言われても」

「あなたは一応影狩師なんですよ？」

言われて、風視は少しばかり眉を寄せた。

「一応影狩師というか、もともと僕は影狩師じゃないんだよ？」

困ったような口調で風視は呟く。

「影狩師はそもそも僕の奥さんが、古種族と人間の争い事解決専門請負人を作ろうとしたことがはじめなんだからさあ。ちよつと僕が引きこもってる間に意義がそれちゃった間違った影狩師像を僕に押し付けられても困るんだよねえ」

困ったようなふうを装いながら、その口調の奥に潜むのは頑ななまでの怒りだ。

思ったよりもきつい口調で言い切ってしまったから、風視はほんのわずかに自嘲の混じった息を吐いた。奥底ににじんだ怒りにひるんだ陵王が、言葉を探しあぐねている。それを見ていると少しだけだが罪悪感がわいたのだ。

影狩師が本来の意義からそれてしまったのは、陵王の責任ではな

い。

なにより、陵王が生まれてこの方知っているのは、この間違ったほうの影狩師なのだ。知識として、本来の影狩師を知っているとはいえ、この現代で白連塾を運営している身としては、先ほどの発言も仕方がないものなのかもしれない。

にしても、と風視は思う。

妻であつた美羽が殺されてから、もう随分ながいながい時間がすぎた。

それなのに、怒りが失せないのは。美羽に対する愛なのか、それとも執念深いのか。

「とりあえずさ」

もうながい時間が過ぎ過ぎて。

美羽がいなくなつてしまったことで、出会えた人たちもたくさんたくさんいて。

悲しいけれど、死ななければよかったと一概に言い切れないほどの時間が流れて。

それでも、美羽がいなかったことがこんなにも——つらい。

胸の奥に開いた穴はいつまでたってもふさがらない。

怒りはいつまでも疼いたままだ。

「ときめぐりの長老に会つて来たんだけどさ。死者から力を抽出する秘術を盗まれたと言つていたんだ。おそらくけど、盗んだのはたぶん那智かその関係者だと思ふんだよね」

通常の口調に戻して、何気ないふうに関風視は言葉を継いだ。

「……その証拠が神殿にあるかもしれないと？」

「あればいいなあとは思つてるんだけどね」

実のところあまり期待はしていない。

那智はそこまで、うかつな男ではないはずだ。

「それよりは、桜珠がないかなあなんて思つてるんだけどさ」

「桜珠？」

「知つてたかい？あの桜ヶ淵の力を帯びた宝珠が芽津にばら撒

かれているよ」

風視の言葉に、陵王も先ほどのやり取りを忘れたかのように真剣な面持ちになる。

「仮に、桜ヶ淵の一件に那智が絡んでいるとして。彼は何が目的なのでしょう？」

「そこなんだよねえ」

ふう、と大仰に溜息をついて風視は肩をすくめて見せた。

「那智は古種族を憎んでいるから、その一環として桜ヶ淵の地を淀ませ、主を狂わせたというのはまだわかるんだ。その力を利用しようとしているのも、わからないでもない。だが、何故芽津なんだろう」

芽津にばらまかれた桜珠。

引き出される桜ヶ淵の力の媒介となっっていることに間違いはなさそうだ。

だが。

それを芽津に集めて何をしようというのか。

芽津には、古種族を狩るための組織である白連塾があるというのに。

芽津を仮に壊滅に追い込んだとしても、那智の益になるようなことは何もないように思うのに。

思えば思うほど、那智の思惑が読めないのだ。

陵王もしばらく思索したあと、困り果てたように息をつく。

そして、おもむろに紙を一枚ひろげるとさらさらと筆を走らせはじめたのだった。

「こちらでよろしいでしょうか？」

陵王がしたためた、古種族調査を依頼する命令書。風視はひらりと渡されたそれを受け取って、軽くうなずいた。

「ありがとう。無理をいって悪かったね」

「いえ。あなたが立ち上げた組織なのですから」

むしろ自分に言い聞かせるようにいう陵王はそう呟いた。

「代々の塾長は、あなたを支えるためだけにあつたはずです。そして、本来の白連塾の意義に立ち直るために。私もそうあらねばならないのに、余計なことを言って申し訳ありませんでした」

「べつに、僕の傀儡になれといっているわけじゃないんだよ」

やはり先ほど、八つ当たり紛れに言葉をぶつけたのがまづかったのか。

眉を下げて、風視は困ったように言葉をつむぐ。

白連塾。立ち上げたのは、美羽の死後。もうかれこれ八百年ほど前になるだろうか。最初のころは祈塾といって、美羽の亡骸を埋めたあとにはえた祈樹の傍らに建てた簡素な建物で古種族との付き合い方を教えたのが始まりだった。

ほんのささいなことで、影狩師はもとの存在意義をゆがめてしまったけれど。

陵王の背後の窓から見える中庭の景色を——花びらを舞い散らす美羽の祈樹を見やる。

優しすぎた、美羽。

風視岬を守護する主で、あやかしのなかに人間と古種族のあいだにいさかいが起きるたびに悲しそうな表情をして。

——白連。はくれん……きいてるの？

怒った顔なんて見たことがなかった。

——許してっっていつてるのに。ずっと一緒にいるって言ったのに

……約束、守れなくてごめんね？

言葉はいつも、耳の奥に鮮明に響いている。

人間だった自分に、どこまでも優しく。ひねた自分を愛してくれて。最後の最後まで、自分のことばかり案じてくれて。

ふう、と風視は気持ち切り替えようと息を吐き出した。

美和を今でも想っている。心はすぐに過去に飛ぶ。

けれど、今過去を懐かしんでいる時間はあまりない。

「僕は、白連塾を本来の姿に戻したら、引退したいんだよね。そのあとを引き継ぐのはやっぱり君や、君の後に続くであろう塾長たちなんだから、そんなふうにいじめてもらったらそれはそれで困るんだよ？」

ほんの少し冗談めかした軽い口調でそう告げれば、陵王もつられたようにわずかに笑んだ。

「引退するとかおっしゃらないで下さいよ。あなたがいなくては、白連塾は立ち行かないのですから。本来の白連塾に戻れなくなりますよ」

「というか、君こそがすっかりしないとダメだろ、陵王。君は塾長なんだからさ」

笑顔で発破をかけて、風視は少しかり表情を引き締めた。

「それで、話は変わるけど、千早ちゃんのことなんだけどね」

「ああ、あの桜ヶ淵から生還したあやかし疑惑の少女ですね？　そういえば、あやかしだったのですたっけ」

「そうそう。その千早ちゃんだけど、彼女は多分僕と同じ存在^{モノ}になるね」

風視の言葉に、陵王は首を傾けた。

「と、いいますと？」

さらりと陵王の髪が肩先から流れ落ちる。

「人間の身でありながら、主に選ばれあやかしとなるモノ。もっといえば、主の伴侶となるべく定められた存在」

そついいきれば、陵王は少なからず複雑な顔つきをしていた。

「伴侶、ですか？」

「そう、もともとあやかしというものは古種族の中でも特殊な存在なんだ。たいがいの古種族は伴侶を同種族から選ぶものだけど、あやかしだけは違う。心が響きあうモノを選ぶと言われているんだ。己の力をわけることで、強制的に自分と同じ種族に——あやかしに変えてしまうのさ」

力の強いあやかしにとっても、多くの力を裂いて与えることは、大きな危険を冒すものだ。単に助けただけ、という、いわゆる「なりそこない」が多いのもおそらくそのため。その危険を冒してさえ、長い時間を一緒に過ごしたいと思わせうるものが伴侶としてのあやかしになるのだ。そうして。

かつての自分が風視岬の美羽に選ばれたように。

千早は鬼哭に選ばれた。

「ほどなく千早ちゃんは、完全なあやかしになるはずだ。鬼哭に守られて、ね」

言い切った直後、思わずもれた溜息に風視は自分で苦笑した。

5 (後書き)

多岐……多岐はどこにいったんだろう><

「まあ、そんなわけでさ。那智には気をつけてほしいんだよ」
半分は陵王に。

半分は自分でかみしめるように呟いて、風視はちらりと窓から見える中庭に目をやった。

「間違っても、千早ちゃんを失うことがあってはならない。白連塾どころか芽津がなくなっちゃうからね」

はじまりはなんであれ、あやかしの情は深い。

一見冷たく見える鬼哭でさえ、それは例外ではないはずだ。

「わかりました」

抑揚も少なく陵王は応じて、唇にうつすらと笑みを浮かべた。

「那智と桜珠のことは、こちらでも少し調べてみます」

「頼むよ、塾長」

軽口をたたいて、ひらりと手を振って見せる。

ただでさえ忙しい陵王の手を煩わせて、ついでに時間も取ったのだ。あとはこちらの仕事である。

多岐は、無言で皿に残っていた団子の最後のひとつを取り上げてかぶりついた。

那智の余裕をにじませた背中が、桜色の輝きをつけた人波にまぎれて遠ざかっていくのを半ばにらみつけるようにみやる。

妙に懷が重い気がするの、扉を開ける呪符にくわえてさらに渡された呪符のせいかもしれない。

那智は、多岐にこうしろ、とはいわない。

呪符を手渡して、千早を守りたいのならどうすればいいのかわかっているなど、そう言うだけだ。

だが、と多岐は思う。

もし仮に、那智の願いを多岐がかなえて。風視のあやかしと接触した現場を押さえ、風視の討伐に手を貸したとしても。風視とつながっているであろうあやかしを屠ったとしても。それは決して多岐の望む未来へは――千早の安寧へはつながらないと思うのだ。

ここまであやかしに近くなってしまった千早を、守るためには。

一番いいのは、白連塾から遠ざけることだと思う。あの鬼哭とかいうあやかしにたくしてしまえば、おそらく一番安全なのだ。恐ろしく強い 力 を持っているのだから。

けれど、それでは自分がいやなのだ。

別に自分を好きでいてほしいとかそんなことは思わない。千早はこれまでずっと気安い仲間で、これからもずっと仲間で……ずっと一緒にいらなければさみしいだけだ。

幸いにも、千早は白連塾に居続けたいみたいだし、風視だって千早のことをいい駒だと思っている節がある。那智のことは問題だが、風視の思惑を逆手に取れば、もうちょっとくらい千早と一緒にいられる時間が増えるかもしれないと思うのだ。

懷に手を突っ込んで、増えた呪符をぐしゃりと握り締める。

ひとつは前に預かった、扉をひらく呪符。

もうひとつは先ほど預かった、地の 氣 を封じる呪符。

あやかしは天地の氣の影響を強く受ける存在だから、地の 氣 を遮断してしまえば、一時的にしろ 力 が弱る。そのスキを狙って、扉を開けということらしい。

「多岐くん、おまたせ。ってあれ、僕のお団子は?!」

つらつらと考えにふけっていると、気軽い調子で風視が戻ってきた。

ちらりと手持ちの袋から書状らしきものを見せたところをみれば、塾長から無事令状をもぎ取ってくることができたらしい。

「もしかして全部食べちゃったのかい……僕だっておなががすいてるんだけどさ」

ぶつぶつ文句を言う風視をちろりとみやって、多岐は湯飲みに残っていた冷たい茶を流し込む。

団子なんて注文してから出てくるまでにそう時間がかかるものでなし、自分で注文すればいいのだと、冷やかにそんなことを考える。

「花見団子ください」

片手を挙げて、桜色の耳飾をつけた先ほどの店員の少女に注文をした風視は、通りにすばやく目を走らせて。

「神殿には夜中に行くよ」

声を潜めて、そう告げた。

「何もあらかじめ予告して、不都合なものを隠す時間をやることはないからね」

多岐が何もいえないままでも、風視は気にしないようだった。ただ熱い茶をすすりつつ、ぼんやりと人ごみを眺めて、何かを思案していた。

ひどく静かな夜だった。

さやけき月、流れる風。澄みわたる闇。

「さて、いこうか」

軽い調子で言った風視は、どこも気負うところなくいつものように気安い笑みを浮かべていた。いつもよりも暗色の衣をまとっているほかは、本当にこれから神殿に忍び込むなんて大それたことをやるふうには見えない。

「なんだ、緊張してるのかい？」

問うた風視はからかうようにくすくすと笑った。

「心配しなくても大丈夫さ。見つからないに越したことはないけど、見つかったても陵王の令状があるからね。罪に問われることはないさ。まあ……頭のひとつやふたつはぶたれるかもしれないが」

先にたって歩き出した風視は、神殿の入り口付近で赤々と燃えているかがり火の光が届かないあたりからそと中の様子を窺った。

多岐も同じように目を凝らせば、眠そうな顔つきの神官兵が槍を手に退屈そうに突っ立っているのが見える。

「うはあ、退屈そうだねえ」

「というか、風視さん……俺、ここで待ってたほうがよくないですか？」

「ん？なんで？」

こそこそと問えば、風視は不思議そうにまたいた。

その双眸が影の深い場所でも、まるで獣の目のように。飴色に輝いて見えるのは気のせいなのだろうか。

「あ、ほらいくよ！」

首をかしげていた風視は、神官兵があくびをしながらちよつと首を後方にめぐらした隙を逃さなかった。

すかさずこちらの手を引っ張って、門の内側の庭へと続く部分――

―神官兵と門との境にある一角へとすべりこむ。かがり火の傍は逆に闇が深いのかもれない。

正面に顔を戻した神官兵は、結構近くに潜んでいた自分たちには気がつかなかった。

「やあ、こんばんは」

意外と根性が悪いかもしれない風視は、とんとん、と神官兵の肩をたたき、振り返った瞬間にそのみぞおちを拳でえぐった。神官兵は声もなく崩れ落ちる。異変に気づいたもう一人の神官兵は、気づくと同時にどこからか姿を現した風視の相棒とも言える物騒な獣の太い足に踏み潰されてカエルが潰れたような声を漏らした。

「で、なんだつけ？」

首尾よく入り口の神官兵を倒してしまった風視は、今更ながらに多岐にそう質問を投げてきた。

足音を潜めながら、誰もいない回廊を小走りにかけていくこの状態で問われても、今更待っているという選択肢はなしに等しい。

多岐は疲れたような溜息とともに、ゆっくりとかぶりをふった。

「そう？それならいいけど」

俺はよくない！と心で叫んでみたものの、すべてが今更だ。

救いといえば、深夜のためか、見張りに立っている神官兵以外は特に人影がないということだろうか。

「んゝどこからあさるかな。資料室と―光の間かなあ……」

深夜の神殿に侵入しているわりに、風視はのほほんとしている。

心臓がばくばくいつて、気分が悪くなりそうな多岐としては、後ろから蹴倒してやりたい気分でもあった。

小走りに廊下をずっと突き抜ければ、やがて出たのは少し開けた空間だ。

細かい模様の織り込まれた絨毯。少し高くなったところに作られた教壇に、その後ろに置かれた哀しげに目を伏せた男性像はおそらく闇無神だろう。夜中であつても絶やされない燭台の灯りがゆらゆらと揺れてよけいに哀しげに見える。

「おや、祈りの間にでたね」

「祈りの間？」

自慢ではないが、多岐はこれまで信仰とほぼ無縁に生きてきた。神話は常識程度には知っているし、輝無の眷属として古種族が存在することも知っている。対する影狩師に闇無の神の信徒が多いこともだ。

だが多岐に闇無神にすぎる気持ちは皆無だったし、信じようとも特には思わない。

そのため、今このときまで神殿というものに足を踏み入れたことがなかったのである。

「ほら、闇無神に祈るところだよ。ここで神官殿がありがたーいお説教をしてさ、信徒のみなさんがそれを聞きつつ信仰を深めるんだ」

はあ、と多岐はとりあえず相槌を打ってみた。

どうやら風視も信仰心にあふれる生活を送っているとは言いがたいようである。

「光の間に何かあるんじゃないかとふんだんだけど……ここにもなにかあるかもねえ」

「なにか？」

「ほらこういうとこってさ、隠し扉とかありそうじゃないか。お約束だろう？」

何がお約束なのかは知らないが、風視はそういうなりせつせと壁やら床やらを調べ始めた。

「光の間も怪しいかなあと思ったんだけどさ、こういう何も隠すものがなさそうなところのほうがあたりのような気がしないかい？」
はあ、と多岐は風視の勢いに飲まれるように気の抜けた返事をもうひとつ、した。

本当なら、二手にでも分かれて調べたほうがよさそうなのだが、いかんせん神殿のつくりがまったくわかっていない自分である。うろつけば迷う自信が確実にあったし、なによりもいったん風視とはなれてしまえば合流できる気がしない。

風視が二手にわかれようといわないことをいいことに、多岐はつと闇無像のほうへと歩を進めた。

「闇無神、かあ」

なにもない創生のころ、はじめに生まれた二柱の神。

光の男神と闇の女神は互いに互いを求め合い、夫婦神としてさまざまなものを創りあげた。

だが、ささいなことから行き違った二柱の神々は互いを憎みあい、互いの眷属を排除しあうようになったと言われている。

神話から行けば、人間は光の男神の唯一の眷属だとか。

それゆえに古種族に忌まれ、命を狙われるというのが、闇無の神にまつわる物語の基本的部分、なのだが。

「それにしちや、哀しい顔してるよなあ」

大切なものを失くしてしまって、胸に穴が開いたかのような。

くるしくて、せつなくて、今にも泣き出しそうな表情。

「そりやそうさ。闇無さまは今でも輝無さまを愛していらっしゃるのだから」

すぐ耳元でそんなささやきが聞こえた気がした。

少年のような——聞いたことのない声音である。

あまりに驚くと声音は喉に張り付いて、出なくなってしまうものらしい。

はじかれたように多岐は声のしたほうを振り返ったが、残念ながらそこには誰もいなかった。

「どうかしたかい？」

「……いえ、気のせいみたいです」

不審げな風視の問いかけに、首をひねりつつもかぶりを振って、多岐はふと牙獣に視線をやった。

祈りの間の入り口付近で寝そべって、見張り番を買って出たらしい風視の相棒が、首を持ち上げてこちらを注視しているのだ。黄色の瞳はきらきらと輝いて、耳さえもピンと立っている。

だが、獣は多岐と目が合うと、二、三度またいたつきり何事もなかったかのような顔をして、ふたたび頭を伏せてしまった。

「……なんなんだ、いったい」

不満げな文句がくちびるからこぼれる。だが、獣相手にいつてみたところで始まらないのは百も承知だ。多岐は溜息混じりに、闇無神の像に多岐はふたたび目を戻した。

そうして、何の気なしに手を触れる。

哀しげなその頬にふれ、残る指で頭をなでてみた。

だが、所詮は石でできた神像。なめらかであっても、硬く冷たい手触りしかない、はずだった。

がこん、と何かが外れるような音がしたのはその時だ。

見れば、像が安置してあった石造りの台がわずかにずれている。

「風視さん！」

低く潜めた声でそう呼べば、風視はすぐにやってきた。

「お手柄だねえ、多岐くん」

風視はにこにこして手をたたき、闇無像のほうを覗き込む。

「なるほど、ここに仕掛けがあるのか」

多岐にはさっぱりだったが、風視は納得顔でひょいと神像をもちあげると、その下の台座を少し横へと滑らせた。

がこん、と思ったよりも大きな音がもう一度鳴る。

台座があつたところの床には切れ込みができ、風視はゆっくりと床板を持ち上げた。

ぱらぱらと砂が落ちる。

「ふーん、階段だ。おりてみようか、多岐くん」

階段は人一人がぎりぎり通れる幅しかない。おまけに中は暗く、どこまで深いのか見当もつかなかった。

多岐としてはあまり行きたくない気持ちだったが、風視はなにやら楽しそうだ。

わくわくした顔つきで、入り口付近に伏せている獣のほうへと視線を投じた。

「若月。^{みがつき}ここは頼んでいいかい」

初めて知ったことだったが、物騒な獣にはちゃんと名前があったらしい。

獣は耳を立ててその言葉を聴き、数度またたいてまた頭を伏せた。「さあ、いこうか。あ、僕が先におりるよ。下に誰かがいないと制限らないからねえ」

ちゃんとそういうところを考慮してくれる辺りが風視のいいところかもしれない。上機嫌な風視はにこにこしながら、先に階段を下っていく。

結論から言うと、階段は思ったよりも長かった。

おまけに螺旋を描いているらしく、すぐに遠く小さくなった入り口はすぐに見えなくなってしまった。灯りはなく、闇ばかりが深くなっていく。もはや、自分の体と闇との境界線さえ失われてしまったような気分だ。

目を開けているのに、何も見えず。目を閉じているのではないかと錯覚できるほどに。

「あ、忘れてた。多岐くんはこの暗さだとつらいよね？」

前方を下りる風視が振り返る気配がした。

闇の中で、獣のような瞳がきらりとひかる。

「目……光ってますけど」

「ああ、うん。あやかしは夜目も利くんだよ」

「そうですか。便利でいいですね」

「でしょ？」

あまりにも風視がさりととんでもないことを吐くので、多岐は一瞬意味を取り損ねた。

「……は？」

数拍の遅れをもって、ようやく多岐は素っ頓狂な声を上げた。

「……あやかし？風視さんが??？」

「闇の女神の、優しき恩寵——そうだよ」

風視が唱えたのは、通称「邪言」。闇の女神の経典の一説だ。邪言を唱えることで呪の代わりと為す——風視が邪言使いと言い表される所以である。

唱え終われば、ぽつとその手に光がともるとともに、風視は能天気な肯定の答えを返してくる。

「あやかしくて、古種族のあのあやかしですか」

「他にあやかしなんていないと思うけどねえ。そんなに驚くことかい？」

ともった灯に、闇が押しつけられて、ぼんやりと階段の輪郭が浮かび上がる。

ささやかな灯りなのにも関わらず、闇が深すぎるせいで、まぶし

すぎるほどに明るく感じられた。

「だって、風視さん影狩師でしょう」

「千早ちゃんだってそうじゃないか。あやかしで影狩師」

それはそうかもしれないが、根本的なところで何かが違う気がする。

「影狩師ってあやかしを狩るものじゃないんですか」

「今はそういうのが主流だけど、本来は違うんだよねー」

ふう、と小さな溜息をついて、風視は多岐に視線を投げてくる。

「もともとは、古種族と人間の間の争いなんでも解決屋を目指してたんだよねえ」

「……はあ？」

おもわず馬鹿にしたような声音がもれてしまったが、風視はあまり気にしないようだった。

「もともと古種族と人間なんて住むところも文化も違うんだ。双方とも平和に暮らしたいだけなんだから、たまに起こる問題さえ解決してやれば、世の中は平和になると思ったんだよね」

のんびりした口調で風視がそう説明をする。

ちょうどその時、前方にほのかな明かりが見えた。長々と続いていた階段がようやく終わりになるらしい。

風視が、あやかし。

驚く気持ちも確かにあったが、どこか腑に落ちる部分がなくもないように思う。道理で、あやかしの知り合いがいて、物騒な獣と心を通わせているわけだ。

「到着のようだね」

前方の明かりが漏れる入り口に近づきながら、風視が声を潜めてそんなことを言う。さらに身振りでここで待っているようにと告げて、そのまま前方へ先行した。

息をつめて多岐がそこで待っていると、ほどなくして振り返った風視が手招きをする。

どうやら、警戒すべきものは特になかったらしい。

「それにしても、君も面白い子だねえ」

追いついた多岐に、くすくすと笑いながら風視はそんな感想を述べてくる。

「は？」

「僕があやかしなんだといっても、態度が変わらないからさ」

「いや、驚きはしましたよ？」

「それはわかってるさ。ただ嫌悪感や畏怖する感情が見えないなあ
と思ってるさ」

ようやくたどり着いた部屋へと足を踏み入れながら、多岐は首をひねった。

「風視さんは風視さんじゃないですか。最近まわりにあやかし多くなってですねー偏見嫌悪ナニソレって感じですよ」

一番守りたい人がある日突然あやかしになってしまったと、当人以外から告白されたり。

一番守りたい人とあやかしのくちづけを見せ付けられてしまったことを思えば。

知り合ったばかりの風視があやかしだろうがなんだろうが、実はそれほど重要ではない気がするのだ。せいぜい、千早の味方として心強いかもしれないなんてことをちらりと考えたくらいだ。

「君は影狩師向きだと思うよ、多岐くん」

誉められているのかどうかもわからない言葉を受け取りながら、多岐はぐるりと開けた室内を見回した。

かなりの広さのある空間に、惜しげもなく明かりがともされている。

壁そのものが大きな絵画になっているようで、壁にも天上にも床にも。おそらくは、闇無の男神と輝無の女神の物語が所狭しと描かれていた。

「……うはあ」

絵心など皆無であるが、相当な大作だと思う。

多岐は感嘆の声を上げたが、すぐに横にいる風視が険しい表情をしていることに気がついた。

「風視さん？」

その視線を追えば、部屋の中央部分にしつらえられた何かに向かっているのが見て取れた。

少し高くなった台座の四方には、凝った造りの燭台が置かれ。その真ん中には、薄い桜色をした透明の結晶らしきものが安置されている。

「……桜珠？」

思わずその単語が口からこぼれたのは。色合いがよく似ていたから。

だが、桜珠は透き通っていないし、もとよりこれほど大きくはない。通常なら親指の爪ほどの大きさしかないのに、拳大の大きさがあるのだ。

「まあ、桜ヶ淵の力が生み出したもの、という点では同じものと言えなくもないかもしれないけどね」

多岐の言葉に風視はそう答えて、ゆっくりと台座のほうへと近寄

った。

不思議な香りがする。やわらかで、透明感のある不思議な香りだ。

「これは、なんですか？」

「呪い」

多岐の問いに、風視の問いは簡潔だった。

それだけでは、まるでわからないと思ったが、更なる問いを許さない厳しさがその横顔に浮かんでいる。

結晶の下には、まがましい赤い色で描かれた、紋様があった。

那智が用いるような呪符に、少し似たものがあるかもしれない。

「桜ヶ淵の力を、芽津にばらまいた小さな媒介——この場合は桜珠になると思うんだけど、それを通して搾り出し、ここに集めている。この結晶は、いわば桜ヶ淵の力……もっというなら命そのものだ」

「……えつと？」

「これがもつと大きくなって。その時にこれを砕いてしまえば、桜ヶ淵のあやかしは間違ひなく死んでしまうだろうね」

桜ヶ淵のあやかしは、多岐にとってみれば、まったく関わり合ひのない存在である。

もつと言えば、生きようが死のうがあまり関係がないと思うのだが、さすがにこの場でそれを口に出す勇氣はなかった。

「桜ヶ淵が死んでしまえば、土地はさらに荒れる。あやかしは土地の鎮守のためにいるといつても過言ではないからね。人間にとつても、あまり良い事態ではないと思うよ」

「……これはどうすれば？」

もしかしたら、見透かされたのかもしれないと思いつつ、多岐はそれ以上桜ヶ淵の事には触れなかった。代わりに対処を問えば、風視はほんの少し眉を寄せて、かぶりを振る。

「どうしようもないね。この結晶の力を元に戻す呪を行うには、敵地に取り込んでいる今現在の状態では時間がたりないよ。鬼哭ならなんとか出来るかもしれないけど、僕にはムリだ」

「じゃあ……これはそのまま放置？」

「は、したくないんだけどねえ……」

眉間に皺を寄せたまま、風視は深々と息をつく。

「桜ヶ淵にいった鬼哭の活躍に期待、かなあ。これは呪の結果みたいなものだから、おそらく呪の本体そのものは、桜ヶ淵のほうにあると思うんだよねえ」

どうしたものかと呟いた風視は、本当に心底困り果てているようだった。

月が昇り、陽が沈み、星が流れ、また陽が昇る。

「……めまぐるしいところだね」

時間が恐ろしい勢いで流れていくようだが、千早の体感時間としては、まだ丸一日もたつてはいない。せいぜい半日といったところだろうか。

どこからか氷流が連れてきた、2頭の真白く巨大な狼のような獣。そのうちの1頭にまたがり、細い道を疾駆していた千早は、6度目に陽が昇ったあたりでそんな感想を呟いた。

「狭間だからな」

対する氷流の答えは、少なくとも千早にとっては答えになっていないものだ。

走る獣の力強い躍動が伝わってくる。豊かな毛並み、分厚い毛皮の下で確かに動く筋肉とごつごつとした骨の感触。乗り始めの最初のころこそ、体の均衡を保つことに苦労したもののだが、今はもうだいぶんなれた。

飛ぶように流れていく景色に、ほんのわずかにめまいを覚える。

「狭間ってなに？」

横は見えないほうが賢明かもしれない。

視線を前に固定して、千早はゆっくりと聞いた。

そうしている間にも、太陽は中天をすぎ、あたりは夕暮れに差し掛かっている。先ほどは温められてじんわりと暑かった空気も、いまでは涼しさを感じるくらいの温度となっていた。本当に、なんてめまぐるしいのだろう。

「人間のすまう世界と、神のすまう世界の狭間とでもいえるのか。ここはおまえが通常在る世界とは時間の流れが違う」

乗りなれた様子で獣の背にある氷流は、言葉を選びつつ説明しにくそうにそういった。

もしかすると、あやかしにしてみれば基本常識なのかもしれない。基本的な感覚でわかっていることを、言葉に直すのはひどく骨が折れることだ。

「神隠し、という言葉があるだろう？」

「ああ、いきなり人間が不可解に消えるあれ」

「ここは神隠しにあった人間が迷い込む世界だ。稀に戻ることもあるが、戻れぬものが大半だ。おまえも道をそれるときは迷わぬように気をつけるといい。あやかしとはいえ、迷わぬものではないからな」

こんな得体の知れない場所で氷流から離れる気にはなれないが、うなずいて承知の意を示すと、氷流はうつすらと微笑んだ。

「もつつくぞ。ついたら少し休むといい」

空にはいつの間にか星がまたたいてる。

細い細い道が、草原のまんなかでなぜかぶつつりときれていた。

なぜ、と思う暇さえもない。

走る獣たちがその切れた部分を超えた瞬間、激しく視界がゆがんだ。夜が急に切り替わる。まぶしいほどの陽光が目にしみて、突如として止まった獣の背から放り出されそうになった。

「大事はないか？」

落ちなかったのは、ひとえに先に獣から降りていた氷流が横からすばやく支えてくれたからにほかならない。

「すまなかつたな。ここはもう桜ヶ淵の領域なれば、おれの力がうまく及ばなかつたようだ」

狭間とやらからこちら側に戻ってくるときに感じた衝撃のことをいつているらしい。

大丈夫、と口にすれば、氷流はほつとしたように表情をゆるめた。「ここは桜ヶ淵なの？もう？」

通常なら、芽津から北へ。馬などの乗り物を用いたところで7日ばかりはかかるところに桜ヶ淵は位置する。だが獣に乗って駆けてきた距離の体感時間は繰り返すがせいぜい半日ほどなのだ。

千早の問いに、氷流が無言であたりを示す。

こんもりとした森、今は葉が茂っているその木々は確かに桜ばかりだったし。森の中央に遠くそびえる山肌を流れる溪流は白く激しい。どこも、千早には見覚えのある風景ばかりだ。

「桜ヶ淵、だ」

ぼつりと呟けば、氷流が無言でうなづく。

2年ぶりの風景。そう思えば、胸の奥がきしむように痛んだ。

「……桜巳」

もう会うことはないかもしれないと思って、桜ヶ淵を離れたあの日が鮮やかによみがえってくる。

桜巳は今も元気なのだろうか。彼女の平安をずっと願ってきたけれど、いざこれから会いに行くと思えば、どうしても怖さに体がすくむ。

あなたのせいだと無言でせめるあの瞳ともう一度対峙するのは、思っていたよりもずっと勇気が必要とすることだったようだ。

こんもりとした桜ヶ淵の森は、なにも都隠の山々のように、人間の立ち入りを固く拒んでいるわけではない。細い道をたどっていけば、特に迷うこともなく森の中央部——山から流れ落ちた溪流がたまる淵へとたどり着くことが出来るはずだ。

そこまで行けば、桜巳が巫女を務める桜ヶ淵の集落はすぐそこだ。これからたどるべき道のりを脳裏に描き、千早はきつく唇を噛んだ。

「千早」

そつと氷流が肩に触れてくる。

思わずその顔をみつめれば、氷流は思いのほか優しげな表情を瞳に浮かべてこちらをみつめていた。

「あまりくちびるを噛むな。切れてしまうぞ」

繊細そうな氷流の指先がそつとくちびるに触れれば、ぞくりと背筋が震えた気がした。

「行きたくなければ、戻ればよい。おまえが友と呼ぶ桜ヶ淵の連れ合いにも、会いたくなければ会わずともよいのだ。心配せずとも桜ヶ淵はいずれ目覚める。時を待てばよい。大地は強く優しきもの——いずれ怒りは鎮まり、つけられた傷は癒える」

ひんやりとした声音が、心の奥底に染み入っていくようだ。

ささくれ、不安におびえる心をなだめるように。

「……だいじょうぶ」

優しい、氷流。

かみしめるようにその存在をたしかめて。

瞳を伏せて。くちびるに触れる、氷流の指を捕まえる。そうしておいて、千早はにっこりと微笑んだ。

「心配してくれてありがとう。でも、行かないと」

「そうか？」

「うん。私ね、いやなことはさっさと済ませちゃう主義なの」

意味を問うように、氷流の眉が片方あがる。

「いつまでも、ぐじぐじ考えてるのはめんどくさい。いいならいい、ダメならダメでさっさと決着がついたほうがすっきりするもの。ただでさえ、2年も決着つくまでにかかってるんだし」

言っていることに嘘はないが、逃げ出したい気持ちも確かにある。それを無理やり押さえ込んだまま、千早は笑みを深くした。

「それにねえ、相手が狂ったあやかしでさえなければ。意外と言葉は通じるものよ。言葉をつくせば誤解は解けるし、誠意を尽くして謝れば、たいていのことは許してもらえるんだから」

むしろ自分に言い聞かせるように、千早は一生懸命言葉を継ぐ。

桜巳の咎めるような責めるようなまなざしはまだ記憶に鮮やかだし、里人たちの畏怖もイヤというほど覚えている。氷柱の夜斗の印象が強すぎて、あの時は誰も違うという言葉を信じてくれることはなかったけれど。

2年もすぎた今ならきつと。

「おまえが思うように在ればいい。おれは傍にいる」

こくりとうなずけば。

氷流は薄く笑って、くちびるを寄せてきた。冷たいくちびるが、ほんの一瞬重なって、温かなものが喉の奥へと流れ込んでくる。

ひんやりとしているのに、優しく温かさははらんだ、氷流の力だ。

触れたくちびるをペロリとなめて、千早は氷流に笑みを返した。

このくちづけに、恋愛感情が絡まないのはわかっていたから、特に緊張も何も感じない。もっとも、氷流は無駄に顔がきれいな部類だから、そういう意味でちょっとくらいは心臓が跳ねることもあるのだけだ。

自分をあやかしへと変化させた、氷流の義務と礼を兼ねたほんのすこしの優しさなのだ。

「じゃあ、行こうかな」

ぐずぐずしていると、また決心が鈍る。

注がれた 力 にわずかに軽くなった身体を動かし、森へと一歩足を踏み入れる。

「……千早？」

細い声が、自分の名を呼んだ。

一瞬氷流かと思い、あわてて首をめぐるせる。

今の声は、確かに娘の声だった。覚えのある、懐かしく哀しい声。

「桜巳……」

無意識のうちに、その名がこぼれて、風に溶ける。

視界に収まった桜巳は2年前よりも少しやつれて、ほんの少し美しくなっていた。

どうしよう、と思った。本当に、素直にそれだけを。

桜巳に会う決心はつけたものの、本当に心を決めたただけだったのだ。

あつたら、まず何を言おう。

そんな簡単なことさえ、まだ何も決めていないのに。

さわさわと森を渡る優しい風が頬をなでていく。静かな時間が流れていく。

「……ひさし、ぶり」

かすれた声で、気の利いたこともいえないまま、ようやくとそれだけを言う。桜巳は軽く目を見開いて、それから少し、おかしくに笑った。

「久しぶりね、千早」

返された言葉は、思ったよりも明るいもので。

「暗い顔してどうしたの？ 悩み事なら相談乗るわよ」

巫女装束は相変わらずよく似合っていたし、肩先に落ちた髪を何気な後ろに流すすぐさも艶やかだ。

見とれていると、桜巳はほんのわずかに首を傾げた。

「千早？」

「え、あ……うん」

この明るさは、いったいなんなのだろう。

まるで、2年前のあの一件など何もなかったかのような。

それとも、2年という月日はそれほどに長いものなのか。大切な人を喪い、傷つき、何事もなかったかのように立ち直れるそれだけの時間なのか。

でもまあ、2年で月日は長い、よね……？

季節が二度もめぐるだけの、月日である。

驚いたものの、理性的に考えれば、それほど不自然ではないよう

な気がする。ただ、この2年。自分が桜巳を傷つけたと。逆に傷つけられもしたとぐじぐじと思い続けていただけで、本当はもうすでに時間が解決してくれたあとなのかもしれない。

その考えの後押しを求めてちらりと傍らの氷流に視線をやれば、氷流は黄金色の瞳をすこし眇めてじつと桜巳をみつめていた。

「氷流……？」

名を呼んでみたものの、言葉にはほとんどならない。ほんのわずかに空気を震わせたただけだ。

だが、さすがに相手は氷流というべきか、きちんと気づいてこちらに視線をよこしてきた。

「どうした」

ひんやりとしたいつもの声音が、耳を打つ。

「ん……なんでもないの」

桜巳と向き合う不安が、それだけで少なからず軽減される。

自分で思っているよりもずっと氷流に対して依存しているような気はしたが、これもきつといずれこの一件が解決をしてその無駄に整った顔をみなくなれば、なくなっていく類のものに違いない。

ほんのりと浮かべた笑顔で千早はゆっくりかぶりを振って、改めて桜巳をみつめた。

「あの、桜巳？」

「なあに？」

「その……」

「うん」

「……元気？」

頑張って聞いたのに、問うた瞬間。桜巳は遠慮なく噴き出していった。

「なにそれ、もったいつけちゃって。何事かと思ったわよ」

悪気のない桜巳の感想に、千早は思わず唇を尖らせる。

「だって……」

「まあ、私にも責任はあるのかなあ」

落ちてきた髪の毛を耳にかけなおしながら、桜巳は軽く息をついた。

「千早。2年前はごめんね？」

「え？」

「夜斗さまのことよ。あなたは私のためを思ってくれたのに、ひどいこといってごめんなさい」

元気になった昔どおりの桜巳をみて、緩みかけていた気持ちがひどく不穏にざわめいた。

私のためを思って、と桜巳はいった。

何かが違う、と千早の直感がいつている。けれど、何が違うのかなんてことは千早にはわからない。思わず震えた肩に、氷流が後ろからそつと手を添えてくれたのがわかった。

「……桜巳？」

問いかけるように呼んだ声は、抑えきれずに震えた。

「なあに？」

けれど、桜巳は不審げな様子さえ見せない。千早がついてこないことなど疑いもしないように、ゆっくりとした歩調で先にたって歩き出す。

「ね、千早。うちに寄っていくでしょう？こないだ長さまが都で買ってきたおいしいお菓子があるのよ」

千早は何度か目をしばたいた。

なんと答えるべきなのか。

というよりも、先ほどから気になっていたのだが、なぜ氷流のことは眼中にないのか。

「あの、桜巳？」

「なあに、どうしたの？——あ、そうそう。この前にあなたがきてくれたときに結婚式をあげた若い二人がいたでしょう？この前赤ちゃんが生まれたのよ。すごくかわいいから、あとで一緒に見に行きましょうよ」

楽しげな様子の桜巳は歩きだしながら、千早が2年まえに集落をあとにしてからの、近況などを事細かに説明してくれる。もともと自分の里よりも頻繁に通っていた場所だ。住人はみな顔見知りだし、その近況を教えてくれるのは嬉しいが、今はそれよりも気になることがたくさんある。

「桜巳！」

数歩、駆け足で桜巳に追いつき。

大きな声を出して、その肩に手をかけた。

巫女の装束にひっかかったのか、ほんのすこし手のひらに痛みを感じたものの。そんなことを気にしている暇はなかった。

「桜巳、なんかヘンだよ？どうしたの？」

「どうしたのって、なにが？」

きょんとした表情の桜巳を千早はさらに乱暴に揺さぶった。

「私！前も言ったと思うけど夜斗さんを封印したりはしてないし！

そんな 力 見習いの私にあるわけないし！！なにより、桜巳……」
違うから。

私じゃないから。

2年前にも繰り返した言葉を、もう一度繰り返す。

「私、私、桜巳と夜斗さんのこと、応援しようと思ってたんだよ！」

あのときにも、この言葉は届かなかった。

あのときは、桜巳は傷つきすぎて。ただ、千早が夜斗の封印に一枚噛んでいるとそれだけを理解して、愛する夜斗を封印した千早をなじった。言葉にこそしなかったけれど、まなざしは日々千早を責めていた。

どうして。

なぜ。

他に手はなかったの？

そんなものがあれば、とうに自分が手に入れていた。そう思っても、傷つきすぎた桜巳には何も言うことができなかった。

「あやかしと人間だし。たくさん面倒ごととかもあるだろうって思ったけど、それでもお似合いだっと思ってたんだから！私で力になれることがあるなら、なんだってしようって、そうおもって……」

高ぶりすぎた感情が。あふれる思いが。

どうしようもなくて、言葉さえもうまくつむげなくて。

「……桜巳」

途方にくれたように、千早はその名を口にした。

ぼろり、と思い出したように。一粒だけ瞳からなにかが零れ落ちる。

でも、今はあの時とは違う。

あのときの桜巳とは何かが違う。

決して傷ついてはいないそのまなざし。ただ何をいつているのかわからないというような顔つきで肩に手を置かれたまま不思議そうに、困ったように、こちらをみつめている。

「千早は、私があやかしにだまされているのを助けてくれたんじゃないの。夜斗さまは桜ヶ淵の守護者たるお方だけれど、所詮は私たち人間とは異なるあやかしだもの。私をちよつと面白いおもちゃだと思つて、人外のものにしようとしただけでしょう？千早が助けてくれなかったら、私……」

切なげな顔でほうつと息をついて、桜巳は両手をわずかに広げた。「本当に、ありがとう。千早。あのときは混乱していたけれど、今だからわかるの。私、呪にかけられて惑わされていただけだって」ぎゅつと桜巳が抱きついてきた。

訓練に明け暮れて、すっかり女性らしい丸みと疎遠になった自分よりも、はるかにやわらかい桜巳の体がやさしく押し付けられる。

「本当に、感謝してるのよ。……ひどいこといって、ごめんなさい。どうか許してちょうだい？」

至近距離で、桜巳のうるんだまなざしが揺れる。

桜巳の言うことは一見理に適っているように思えた。

あやかしと、人間。

異なる種族では、いくら人間に友好的でも考え方に違いがあつて当たり前。

ちよつとした悪ふざけで、桜巳を 人形 としてしたのを、影狩師である自分が止めた。

「桜巳……」

当たり前で、自然な理屈。

影狩師としては、とてもとても、腑に落ちるような。

それでいて、桜巳がよくわかつていて。自分も何も負い目に思わずにすむ理由。

「千早。惑わされるな」

ひんやりとした声が響かなければ。
もしかしたら、千早にとっての過去さえも。塗り替えられていた
のかもしれない。

もしかしくなくても、危なかった、のかもしれない。

響いた氷流の声にはつと瞬いて、桜巳の抱擁からほんのわずかに首をそらす。視界の端に氷流の無駄にキレイな顔を見つければ、何故だかほつと安堵した。

「千早。おまえは知っているはずだろう。思い出せ、変えられる前の過去を」

さらに言葉を継ぐ氷流に、うんと目だけでうなずいてみせる。

そうだ。私はわかつている。

ちゃんとしてる。

桜巳が、夜斗を愛していたこと。

夜斗がちゃんと、桜巳に想いを返していたこと。

突然夜斗が狂ってしまったこと。止めようとして死にかけたこと。氷流が助けてくれたこと。

「その娘は呪にかけられているようだ。人間は概して目が悪い生き物だが、桜ヶ淵の想い人でさえあったものが、おれに気づかぬなど……ましてや、声すら聞こえぬのも不自然だ」

そうだね、と千早はくちびるを噛む。

誰かが、桜巳の心を無理やりに絡めとってしまったのだろうか。だとすれば、どうしたら戻すことが出来るのだろうか。

「桜ヶ淵のことを聞え。桜ヶ淵はこの地と一番密接なつながりを持つ存在。地の狂いは、桜ヶ淵が一番よく知っている」

氷流が横から落ち着いた調子で指示を出してくる。

混乱に吞まれないのは、ひとえに氷流がついていてくれるせいかな。そんな自分に苦笑しながら、千早はぎゅっと桜巳を抱きしめ返した。

「大丈夫だよ、桜巳。私怒ってないから」

「……本当に？」

抱擁を緩めて、桜巳が問う。

間近でみた桜巳の瞳はけぶるようなまつげに縁取られて、不安気にゆれていた。

「本当だよ。桜巳が無事で、元気でほっとしてる」
告げたことは嘘ではない。

仮に呪をかけられていたとしても、桜巳はどこも怪我をしていないし、今はとりあえず元気なのだから。

大切な、ともだち。自分よりもずっとずっと、たおやかで優しいで。守らなくてはと思わせるような、はかなささえ纏っていて。

「よかった……」

しばらく桜巳は千早の瞳を覗きこんだあと、本当にほっとしたようにそう言った。

「あんなひどいことを言っちゃったから、心配してたの。千早は全然こなくなっちゃったし、私のこときらいになったのかと思ったのよ。顔も見たくないくらいに嫌われたかと思ってた」

「そんなことはないよ」

千早が即答すれば、桜巳は花が咲くようにあでやかに笑った。

よかった、としみじみつぶやく。

話している桜巳に特に不自然さは感じない。だとすれば、やはり記憶を作り変えるべく暗示に似た呪をかけたと考えるべきなのか。

「ねえ、桜巳。桜ヶ淵のあやかしはどうなったの？」

「どうって？」

夜斗と呼ぶことなく、千早は慎重にそう聞いた。

抱擁をといた桜巳はただきょとんとして目をしばたく。

「封じられたまま——なんというか、2年前のあのままなのかな？」

「そうね。たぶん……あのままだと思うわ。近づく人は誰もいないし」

首を傾げつつそう答えた桜巳は、申し訳なさそうに眉根を寄せた。
「最初のころこそ、毎日夜斗さまの封印を見に行っていたんだけど、たぶん、夜斗さまが封じられたことでかけられていた暗示が解けたのね。千早が助けてくれたんだってことに気づいてからは、千早の

ことばかり気になって、行かなくなってしまったの。たったひとりの友達をなくしてしまったんだって思ったらかなしくてかなしくて……」

集落への道を先にたつて、ふたたび歩き出しながら桜巳はぼつりぼつりと言葉を継いだ。

「手紙は何度も書こうと思ったんだけど、返事が来ないんじゃないかと思つたら怖くてかけなかったの」

「そっか」

「ええ。夜斗さまの封印も、何度か見に行つたんだけど。やっぱり封じてしまったことをお怒りだったら、どうしようと思つて。怒つてらっしゃる時に封印がとけたら、私たちなど簡単に殺されてしまうでしょう？だから、夜斗さまのほうも怖くて……もうしばらく行つてないの」

そんなに怖いものだらけでよく生きていけるなど、友達甲斐のない感想をもってしまったのは、桜巳には内緒だ。

「だから、千早も夜斗さまの近くにいつてはダメよ？ 2年前も死に掛けたでしょう。あんな怖い思いはもういやよ」

千早はただ、瞬いた。

2年前、死にかけたのは確かだ。

だが、あの場にいたのは——少なくともいたと、千早が認識しているのは。

自分と、夜斗と、氷流だけ。

風視でさえ、自分が死に掛けたことは氷流に直接聞いてしつていただけだ。

那智は知っているかもしれないが、少なくともあの時。

里人は、だれもいなかったはずなのに——

「あの、桜巳……？」

「よせ」

なぜ、知ってるの……？

問おうとした瞬間、氷流がとめた。

「夜更けに迎えをよこす。それまでおとなしくしている。おれは少し様子を見てくる」

桜巳の背後、つまりは千早の正面にまわった氷流は低く言葉を呟いて、かすめるように指先で額に触れた。

「無理をするなよ。いいな？」

それだけを言い残し、氷流は一度だけ、とん、とかるく地面を蹴った。

ほんの一瞬その姿が揺らぎ、空気に溶け込むように姿が消える。

千早は驚いて目をこすっても、その姿はとうになく。桜巳が不思議そうに首を傾げただけで終わった。

「行きましよう、千早。早く行かないと、長さまの買ってこられたお菓子がなくなっちゃうわ。みんな虎視眈々と狙ってるんだから」
なによ。

桜巳の言葉に笑顔をつくってうなずきながら、千早は内心氷流を恨んだ。

傍にいてくれるっていつたくせに！

2年ぶりの桜ヶ淵。久しぶりに再会した親友は呪いかけられているのか、なんだか少しおかしくて。もしかすると、ほかにも何か罠が仕掛けられているかもしれないくて。

何もないかもしれないけれど、そんな保障はどこにもない、この地で。一人にされたと思うと、不安が唐突に膨らんでいく。たぶん、それと同じくらいに怒りも。

表情が険しくなるのも無理はないかもしれない。

無理やりのにこりと微笑んで、普通いなれた集落への道を進んで歩き出す。

「今日は桜巳のところに泊めてね？」

頼んだ言葉は半ば無意識だった。

「もちろん。どれくらいいられるの？」

「ん……」

嬉しそうに問われて、千早は首をひねった。

どれくらい。

そう訊かれても、桜ヶ淵の調査を実際にするのは風視であって、自分ではないのだから。いくら考えても答えが出るわけではないのだ。

「ちよつとわからないかも……」

「もしかして……お仕事できたの？」

お仕事。

さつきから難しいことばかり訊いてくれるな、と千早は眉間に皺を寄せた。

風視の仕事を眺めているのが、自分の仕事に入るのなら間違いない仕事、かもしれないが。

「うーん、お手伝い、かも」

「お手伝い？夜斗さまの封印の調査に来たの？」

「……それも含まれてるかも？でも決めるのは私じゃないからわからないよ」

困ったように答えれば、桜巳はひどく落胆したように肩を落とした。

「そつかぁ……お仕事なら、夜斗さまに近づかないでっていうのは無理だよねぇ」

「わかんないけど……言われればしなくちゃいけないかも」

「千早が夜斗さまの封印に近づくのは、前みたいなのが起こつたら怖いからいやなのよ。だからなるべく、近寄らないでね？」

うん、と千早はうなずいた。

先ほどから、まったくまともに質問に答えられていないのが、何

とはなしに齒がゆい。

「そういえば、桜巳。私のほかに影狩師は来た？」

ふと思い出したのは、別行動をとっている風視と多岐もおっつけこちらにやってくるということだ。芽津でなにか調べることがあるらしいから、到着が自分たちよりも早いことはないかと思っただが、万が一ということもある。

「まだきてないけど……千早がお手伝いをしなくちゃならない人が来るのね？」

「そうそう。私の先生みたいな感じの人なんだ。ちょっと用事があるって別行動をしてるんだけどね」

そうなの、と桜巳はうなずく。

「気をつけておくわ。もしいらっしやったら、私の家に知らせにきてくれるようにみんなにいつておくわ」

「うん、ありがとう」

ずっと歩いてきた森の中の小道が少し開けて、前方にまばらに家が見えてきた。

2年ぶりの桜ヶ淵の集落だ。

森の中を吹く風に、清涼な水の香りを感じる。

集落をすぎてもう少し行けば、大きな湖へとたどり着くはずだ。鹿角山脈かつぬの西の端にある山を滑り落ちる溪流が注ぎ込む美しい湖。桜に囲まれた、2年前の因縁の場所——もっと言うならば。

千早が、死にかけた場所。

氷流と出会った場所。

夜斗が、氷に抱かれてねむっているところ——

久しぶりにやってきた千早に、里人たちは比較的好意的だった。

「お、珍しい人がいるね！」からはじまり、「桜巳ちゃんが寂しがつてたよ！」「桜ヶ淵で婿取りでもして、居着く気になったかい？」まで、さまざまな言葉を投げかけられる。

「みんな、元気そうだね」

どう感想をいっていいものやらわからずにそう呟けば。桜巳はただ、くすくすと笑っていた。

変な道を通ってきたせいで時間の感覚も薄かったのだが、桜巳の家にあがりこんで、ほんの四半刻。みんなが次々に昼ごはんを持ってきてくれたところをみれば、どうやらお昼前だったらしい。

意識した途端、空腹を訴え始める腹をなだめつつ、千早は座敷に座り込んで息を吐いた。

ついさっきまで何かと世話を焼いてくれていた桜巳も今はいない。桜ヶ淵の巫女としての勤めを果たしに、どこかへ出向いていったきりだ。

先に食べてくれといわれたのだが、主のいない家で先に食事を始めるのも気が引ける。

昔なら遠慮も何もなかったのだが、2年の間にほんの少し、開いた気がするわずかな距離。今の桜巳はおかしいし、と言いつて話をしてみたところで、2年という月日はやっぱり長いかもしれない。それだけ会わなければ、人間関係も変わるし、日常的なささいな雑談に説明が必要になってくる。

桜巳が親友、というその立ち位置に変わりはなくても。

大事に思っている、こちらの気持ちに変わりがなくても。

流れてしまった時間が、前と変わらず在ることを許してはくれない。

「巫女も大変なんだねえ……」

何とはなしに、しみじみと呟いてみても。

実際のところ、千早は桜巳が何をしに行ったのかを知らない。どんな仕事があるのかもわからない。聞けば当然教えてくれるのだろうが、その質問をするのになんとはなしに気兼ねをする。

ふう、と知らずに溜息が漏れる。

開いた、距離が痛い。

「お前のせいだ！」

甲高いその声は、唐突にひびいた。

何かが飛んでくる音に反射的に身をひねり——うまく避けられたのは、おそらく日頃の訓練の賜物なのに違いない。千早が一瞬前にいたところには、拳大の石がとんできて、座敷にぶつかって鈍い音をたてた。

それほど大きな石でもなかったが、当たれば結構な痛さだろう。

驚いて、石が飛んできたほうに目をやれば。

まだ10歳ほどの少年が、顔をくしゃくしゃにしてこちらをにらみつけていた。

「お前のせいなんだからな！」

「……きみ誰？」

薄汚れて、ぼろぼろになった衣。素足で、がりがりに痩せている。

「お前がきたせいで里がおかしくなったんだ」

「……私の？」

「お前が主さまを封じたりなんかするから、桜巳のねえちゃんもほかのみんなも、主さまを忘れて、きらいになっちゃったんだからな！」

くちびるをかみ締めて、少年は懸命に零れ落ちそうになる涙をこらえているようだった。

「きみは、夜斗さんと桜巳が仲良しだったことを覚えているの？」

「なんでおれが忘れるんだ！ おまえなんか嫌いだ！ 出て行け！」

叫びながら、少年はもうひとつ石を握っていた手を振り上げた。

長く、鋭く伸びた爪。指の間に、わずかに張った膜を見た気がした。

悲鳴のような叫び声だった。

悔しくて、つらくて。でも自分ではどうにもできなくて。歯がゆくて。

「あ、きみ……」

飛んできた石を避ければ、少年はさらに顔をゆがめて踵をかえした。

呼び止める暇さえもなく、その姿はすぐに低い垣根を飛び越えて見えなくなってしまう。

いったいなんなんだろうと思いつつ、その言葉が気になってしょうがない。

里の人の誰もが忘れてしまっている、千早についての2年前の誤解をあの少年はしっかりと覚えているようだったから。

追いかけようと浮かしかけた腰を、迷いに迷ったあげく再びおろして、ほんのしばらく。

「あら、千早。先に食べててといったのに」

戻ってきた桜巳が困ったようにそう呟いた。

桜巳の帰宅は、千早が思っていたよりも早いものだった。お腹がすいていたので助かったと思う反面。ほんの少し違和感を覚える。

巫女の勤めなどまったく知らない千早の、おそらく知らないがゆえに抱きえた疑問とでもいうべきか。平たく言うなら、桜巳が思っていたよりも早く帰って来たことがおかしいと思ったのだ。

影狩師は呪を用いる時 力 ある言葉として、那智が用いるような聖言や、風視が好んでつかう邪言を媒介として使うことが多いのである。そのために千早は、授業で事細かに光の男神や闇の女神に捧げる祈りの文言の解説を受けたことがあるのだ。

それは、気が遠くなるほど膨大な量で。

しかも巫女や神官たちはそれらをすべて記憶し、日々神々に捧げているという。

だが、桜巳が出かけていたのはほんのわずかの時間だけで、祈りを捧げるだけの時間はなかったようにおもったのだ。

「そういえば、千早」

それならば、桜巳は何をしに出かけたというのだろう。

巫女の勤めとして、祈りを捧げてくると言い置いて出かけていった桜巳は。

考え込む千早に、お茶を湯飲みに注ぎ込みながら桜巳がゆったりと話しかける。

「私がない間に、へんな男の子が来たりしなかったかしら？」

「変な男の子？」

「ぼろぼろの衣をきた10歳くらいの子供よ」

桜巳が淹れてくれたお茶に口をつけつつ、千早はわずかに思案した。

変な子供といえば、さっきの子供の事だろうか。

だが、ほんの一瞬見ただけだったけれど、さきほどの子供は人間ではないように見えた。どちらかといえば、氷流のところにいる天花のような印象だ。そんな子供を、なぜ桜巳が気にするのだろうか。「子供が来るの？」

そ知らぬふりを装って、千早はそう問うてみた。

前の桜巳なら、隠し事をしたりはしないけれど。今の桜巳は操られている可能性があるのだ。下手なことはいえない。

「うん、たまにね」

さらに盛られた握り飯をひとつ取り上げて、桜巳は一口かじった。そのまま曖昧に濁して言おうとはしない。

「そっか」

だから、千早も口をつぐんでおくことにした。

氷流に相談してから、決めたとしても遅くはないだろうと、そんなことを思ったのだ。

「あら、風視さま。まだこんなところにいらつしゃったんですの？」
神殿の地下に潜入したはいいいものの。ちよつと放置できないものをみつけてしまった風視と多岐は途方にくれたようにその場でひたすらに座り込んでいた。

本来ならふたりのうちのどちらかが残り、もう片方がそれこそ陵王の権力にでも助けを求めにいけばよかったのだろうが、壊せば桜ヶ淵の主の命が危くなる大掛かりな仕掛けである。

多岐を残しておくにはいざ何かが起こったときに戦力が不安だし、かといって神殿の内部をまったく把握していない多岐を陵王への使いに出すのもまた、不安が残るところだった。

そしてなにより――

いくら事情をおおまかにわかっている陵王とはいえ。

あやかしを助けるために影狩師をよこせとはちよつと言いにくいのだ。

長い時間を経て、影狩師の本質は変わってしまっているのだから。いくら、風視があがいたとしても。

だから、あでやかな女の声が響いた時には本当に助かったと思った。

鬼哭直属の眷属たる、六花――

たおやかなその姿とは裏腹に、その戦闘力は恐ろしい。

「来てくれたのか」

おもわずほつとして呟けば、六花は柳眉を潜めて大仰に息をついた。

「好きで来たのではございませんわ。なにゆえこのわたくしが、むさくるしい男どもを迎えに参らねばなりませんの」

どうせなら千早さまの守護につきたかったとぶつぶつ文句を言う六花の言葉を聞かぬふりでやり過ぎし、風視はにっこりと微笑んだ。
「頼みがあるんだ、六花」

その瞬間とてつもなくいやそうな顔をした六花の顔も、風視はやっぱり見なかったことにした。

「この珠さ、ステキに育ってくれてるけどそろそろやばいと思うんだよね?」

風視がそういつて部屋の中央部を示すと、六花もさすがに無視はできなかったのか、ほんの一瞬そちらのほうへと視線を投げる。――凝った造りの燭台に四隅を囲まれた、桜色の結晶のほうに。

「……なんですよ、これは」

「まだこの程度なら、たとえ砕けたとしても桜ヶ淵が死ぬことはな
いと思う、けど……」

「悪趣味でございますこと」

風視の言葉を途中でぶった切つて、六花は吐き捨てるようにそう
呟いた。

「これだから、あの男は好かないのですわ」

「あの男?」

思わず問えば、六花は不機嫌な様子でじろりと風視をにらみつけ
た。

「風視さまのご同胞でございますよ。那智という名の」

「那智のつくつた呪だとわかるのかい?」

「わからないのは風視さまくらいではございませんの?」

苛立ち紛れに六花は言い捨てて。そのままその美しい指先で結晶
の一部分を示した。

「ここに呪が絡み付いているのが見えますわ。もちろん、あの男の
愚かしい名も」

ちらりと風視も結晶のほうへと目をやったが、見えないのは百も
承知である。あやかしとしては、目が良いほうではないのだ。

「それでお願いなんだけどさ。鬼哭にこのことを伝えてくれないか
な。きつと桜ヶ淵のどこかに仕掛けがあるはずなんだ。それを解か
なければ、こちらがわの呪を解くことができない」

風視の言葉に、六花は黙ったままわずかに顎を持ち上げた。

ほとんど変わらぬ身長ながら、まるで見下すような様子である。

「ご自分でいかれてはいかがですの？」

「だけど、ここをこのまま置いて行くわけには……」

「若月もものわかりの悪い主をもつて本当に気の毒ですこと」

上で待たせている牙獣の名をあげて、六花は大仰に溜息をついて見せた。

「わたくし、そこな子供のお守りをするのは謹んでご辞退申し上げたいと存じましてよ」

桜ヶ淵で不利な状況におちいれば、呪を熟成させるのにはまだ時が足りなくても、那智は状況を一転させるために結晶を砕こうとするかもしれない。桜ヶ淵は死にはしなくても、さらなる痛手を負うことだろう。

それは、つまり。

桜ヶ淵の大地そのものに負担を与えることになる。

下手をすれば、しばらくは人間の住めない土地になってしまうかもしれない。

そんなことをして、那智に何の得があるとも思えないが、しないという保障はどこにもないのだ。

まあ、狂いすぎた土地は鎮守者たるあやかしの主さえ拒むものだというから、あやかし憎しを心の支えにさえしている那智から見れば充分有意義、なのかもしれないが、すべては推測に過ぎない。

その場合、ここは那智の一派との戦場になる。

そうなった場合に、多岐のお守りをするのはイヤだと六花はいつているのだ。

と、いうことは。

「えっと、君がここを守ってくれと、そういうことかい？」

「風視さまは理解力がわるくていらっしやるようですわね」

六花は赤く塗った唇を不機嫌にゆがめる。

「桜ヶ淵までは、わが主さまがお通りになった道 がございます

わ。天花がご案内を務めましてよ」

早く行けといわんばかりのその態度さすがの風視もわずかにくちびるを曲げたが、ここで言い争っても益はない。それよりは、守ってくれるという六花にあとを任せて早く桜ヶ淵にむかったほうがいいのは確かだ。

それにしても、六花は自分に対して辛辣だと思う。

もともと自分の主以外のあやかしにはとことん冷たい女ではあるが。

もう少し言いようというものがあると思う。

「じゃあ、ごめんだけど、後は頼むよ」

「承りましてよ」

つんとした調子で六花はうなづく。

後頭部をなんとはなしに掻きながら、風視は多岐を連れてその場を後にする。

長い階段を登り、祈りの間に出れば。若月がぱたんと猫のように長い尻尾をふって出迎えてくれた。

「千早」

ひんやりと呼びかける声で目を覚ます。

疲れて横になったのは夕方頃だったと思ったのに、いつの間にか夜はとつぷりと暮れ円い月が中空にかかっているのが開け放したままの縁側から望めた。

「私……？」

「よく寝ていたな。力がなじむまでは疲れやすいもの。ゆつくりと休ませてやりたいが、ここではそうもいくまい？」

寝すぎたせいだろうか、頭が少し重かった。

額に触れる手がひんやりとして心地良いと思う。

ぼんやりしていると、くすりと笑う気配があった。

「まだ眠気が治まらぬなら、おれだけで行ってこようか」

「ん……だいじょうぶ」

気を抜くとすぐにまぶたが下りてくる。

大げさに二、三度まばたきを繰り返して、千早は軽く目をこすった。

確か、なにか相談しなければいけないことがあったはずだ。

そうは思うものの寝起きの頭はすぐに夢にまぎれてしまうようになかなか思考を纏め上げることが出来ない。

「桜ヶ淵を、見てきた」

「うん……」

「やはり力を盗られているようだ」

千早が視線で問いかけると、氷流は軽くうなずいた。

「山でときめぐりの長老がいつていただろう。あまり性質のよくない異端な呪が見えた。あれがときめぐりのわざらしいな」

そっか、と千早は唇をかんだ。

「夜斗さんは……もとに戻れる、よね？」

あの月夜を覚えている。

銀鱗の肌が月の光に輝いて、恐ろしかったのに、とても美しいかったあの夜。

そしてその前の、桜巳に恋人だと紹介された時のあの優しい面差しを。

「あやかしはそう容易く死んだりはせんさ」

「そうだよな」

氷流の言葉に、千早はちよつと笑った。

「古種族と戦う時、私たちいつもごく苦勞させられてるもの」

「おそらく。別の場所にあの呪で盗んだ力を集める場所があるはずだ。その仕掛けが芽津で最近みかけるといふ桜珠となにかしらのつながりがあるのだろう」

見てみないことにはなんともいえないが、と氷流は言葉を結んだ。

「それがどこかはわからないの？」

「たどれぬこともないが、下手に破ると術者に呪が返ることがあるからな」

「返つたらまずい？」

「強力な呪であればあるほど、返つた時の反動は大きい。壁に石をぶつけたとして、強く投げつけたほうが強く跳ね返ってくるだろう？それと同じだ。万が一おまえの友人に返ればことだからな。今回はなにもしなかった」

「……そういえば呪が返るって話は、白連塾の授業で聞いたことがあるかもしれない」

結構基本的な授業で聞いた気がする。

さすがに少し気まづくなって氷流を窺うと、氷流はわずかに笑んだ。

「まあ、あれだろう。おまえ程度の影狩師ならば、呪を解くような繊細な技術を要する任務はまだ任されないのではないか。必要になるまでに覚えればいい」

もしかしくなくても、これは慰めてくれているのだろうか。

確かに自分程度の影狩師は、そんな重要な任務につくことはないが。

まったく慰めになっていいことを指摘してもいいものだろうか。

「……そういえば、氷流」

もつとも、氷流はあやかしののだ。人間とは感覚が違うのだ、と自分を無理やりに納得させて、千早は話題を少しかえた。

話しているうちに思い出したのは、昼間にやってきたぼろぼろの少年だ。

「2年前のこと、覚えている子がいたよ」

「ほう？」

「なんか恨まれてるみたいで、石投げてきてさ」

そう言った瞬間、氷流の表情が恐ろしく冷たくなったのは、たぶんきつと、気のせいではない。

「大丈夫だよ、当たらなかつたし！」

慌ててそう付け足すも、不機嫌そうな表情は消えはしない。

「六花か天花がおれば生きてはおらなんだぞ、その子供」

「いやいやいや子供なんだし！大目に見てあげようよ」

これは予測だが氷流の自尊心の問題として、自分が庇護している存在が他者に害されるのが我慢ならないのだろう。

あやかしというものはムダに自尊心が高いというのは、確か授業で聞いた気がする。

「とにかくさ、逃げられちゃって話は聞けなかつただけだ。もしかすると、何か知ってるかも知れないなと思って。おまけになんか桜巳がその子のことを気にしててさ」

「……おまえの友人もその場にいたのか？」

「ううん、いなかった。なんか巫女としての仕事があるとかいつて出かけてる間に来たんだよね」

そう告げた千早は、じつと氷流のその黄金色をした双眸を間近に覗きこんだ。

「これは、見間違いかもしれないんだけどさ。その子、もしかした

ら古種族かも」

ほんのわずかに氷流の眉が上がる。

千早は自分の手を広げて指と指の間を示して見せた。

「こここのところに、膜があつた気がするんだ。気のせいかもしれない」

「……桜ヶ淵の眷属かも知れんな」

からり、と乾いた音を立てて、遠く扉が開けられた音がした。

遠い、といつても距離はそれほどない。玄関口のほうだろう。

千早は思わず氷流と視線を交わし、音を忍ばせて庭先へと降り立った。そのまま玄関口のほうを窺えば。そこには桜巳の姿がある。

「桜巳……？」

昼間の簡略な姿ではなく、正式な巫女装束を纏ったその姿。

ほんの一瞬見えた横顔はどこか空ろで、ぼんやりとしているように見えた。

あきらかに様子がおかしい。

「どこにいくんだろう？」

「……つけてみるか」

氷流の言葉に、千早は一も二もなくうなずいたのだった。

月が出ているとはいえ、里を出て森の中へと入れば、辺りはうつそりとして暗かった。

風はそよとも吹かず、大気が淀んでいるような気がする。

「……どこまでいくんだろう？」

横から氷流が支えてくれるものの、夜の中に沈んだ森の中は視界がまるでできかず、歩きにくいことこの上ない。だが、桜巳はまったくためらいのない足取りで森の中を進んでいく。

「なにかに、引かれているようだな」

「ひかれている？」

「よく見るがいい。あの娘の行く手を小さな光が飛んでいるだろう」
ひそひそと言葉を交わし。

千早は息をつめて前に行く桜巳の姿をみつめた。

その行く先をふわふわと蛍のような光が舞っているのがかすかに見える。

うつろなまなざしをした桜巳がふらふらとその後を追っていく。
じつとみつめ続けていると闇に少しは目が慣れたのか、先ほどよりはおぼろげだけでもあたりの様子が見て取れるようになってきた。

「あれも……呪？」

「おそろくな」

しゃらしゃらと前方に行く桜巳の、巫女装束の腕輪が涼しげな音を立てる。

「……この先つてなにがあるの？」

「桜ヶ淵があるが」

呟くように答えた氷流は、腑に落ちぬ顔つきで首をひねった。

「おれはてつきり呪本体の仕掛けのほうにいくと思ったのだがな」

2年前の桜ヶ淵。

あのときは暴走しかけた夜斗を追って——己のうちに沸き起こる衝動を抑えながら、共にきてくれと懇願する夜斗のあとを追いかけるのに必死で、周りのことなだろくに覚えてはいなかった。

もとより里から少し離れた場所に位置する湖は、主の領域として、巫女以外の立ち入りを建前上禁じた場所である。もっとも夜斗を慕う子供たちは、おとなたちの目を盗んで時折入り込んでいたようではあったが。

夜が満ち満ちた湖に、月の光が冴え冴えと降り注ぐ。

夜斗の封じられた氷柱が、その光を受けて、闇の中に浮かび上がっていた。

既視感を感じるのは、まぎれもなく2年前のあの日と光景が似通っているから。

しゃらん、と澄んだ音が鳴った。

桜巳、だ。

桜巳が舞う。

しゃらしゃらと腕輪を鳴らして、時折衣擦れの音をたてながら。

ふりそそぐ、ひかり。

木々も草木も息を潜めて、その舞をみつめるかのように。

静寂が、みちる。

清浄な何かが、鏡のような水面に広がっていく波紋のように、重なりながらひろがって。

どこまでも。どこまでも。

千早さえも、息をつめていた。

淀んだ空気が清められていく、そんな気がした。

「わが神は。光をあつめて慈悲となす。かなしき女神の夢被い、いでませ神よ、わが神よ」

空を薙いだ桜巳の指先から、黄金色に輝く粒子がこぼれた。

「夢よ悪夢よ、女神の紡ぐ切なき涙を被う為、いでませ神よ、わが神よ。わがこの指先に宿りたもう」

透明な声音で紡がれる光の男神への祈りに、千早はしばし時間を忘れた。

しゃらしゃらと音が鳴るたび、粒子がこぼれ、大気を金色に染め上げる。

「此の指先は、わが神の。此の息吹は、わが神の。此の祈りはわが神の。いでませ神よ、わが神よ」

「まずいな」

耳元でひんやりとした声が響いて、千早ははっとわれに返った。

「氷流」

かみあろし

「神降をやる気だぞ、あの娘」

「どういうこと?」

瞬く千早に氷流はいくぶん呆れた口調で言葉を紡ぐ。

「怒りで荒んだこの地に、闇無の神を降ろす気だ。あの神は人間どもが思っているよりも優しくはないのだがな」

「いでませ神よ、わが神よ」

桜巳が呟くように唄った瞬間。

大地が黄金色に輝いたように思った。

まぶしくて、まぶしくて。冷やかな光があたりを満たす。

光は緑の葉を繁らせる桜の木々を伝って気脈を浮かび上げ、瞬く間に芽吹いた蕾が咲き誇った。

無茶をする、と。

低く呟いた氷流の忌々しげな声音を聞いた気がした。

咲き乱れる桜の花をみた。

月のさやけき光を押しつけるように、まぶしすぎる陽光が大地からあふれてあたりを染め上げたように思う。

吹く風に舞う花びら。

ひらり、ひらりと。

風の輪郭を描くように、優しく。やわらかく。

「桜巳……」

舞い散る花びらに。桜に。光に。

すべてに抱かれるようにして、桜巳は立ち尽くしていた。

今は、昼か。それとも夜か。

空は淡い紫の色に彩られ、星は夜明けの空の色に眠りにつこうとする。

無理やりに押しのけられた夜。

幻想的だけれど、光臨した陽光はどこか、傲慢で。

「桜巳っ!!」

巫女の装束が、吹く風に揺れている。

風をはらんで、髪がさらりと空に溶ける。

色とりどりの衣が、ゆらゆらと揺らいで。

「ちは、や……」

ほんの一瞬。確かに正気の色をやどした桜巳が、くしゃりと顔をゆがめた。

「私……」

のばされる、ゆびさき。

応えるように、千早も手をのべようとして。

「よせ」

横合いから阻まれた。

「氷流?!」

痛みこそ感じないものの、しっかりときつくつかまれた指先。

千早が抗議をこめてにらみつけると、氷流は表情のこもらないまなざしを向けてきた。

「よく見るが良い。あれはおまえの友人ではないぞ」

「……え……?」

「あれは、闇無の神だ。あの娘はその身に神を降ろした」

促されて、桜巳のほうへと瞳を向ける。

黒かったはずの桜巳の髪は輝いて。

その瞳も陽光を集めたように明るくて。

おとなしい笑みを浮かべるはずのくちびるには、傲岸な笑みがはかれていた。

「桜巳、は……?」

姿は桜巳だった。けれど、はっきりとわかる。

あれは、桜巳ではない。

「ねえ、氷流。桜巳は?!」

桜巳がなくなっていくような気がした。
美しいけれど、冷酷なその表情。まるで、足元の石ころをみつめるような、そのまなざし。

「わからん。だが、真によりましとしての才を持つならば、或いは、助かるかも知れん」

神は、神。

人間は、人間。

ただの人間が、神をその身に降ろして無事に済むはずもない。
下手をすれば、意志を食われつくして、心をなくした器だけが残る。

昔から語り継がれる、神を降ろした巫女の末路。

「あ……」

言葉にならない、声が漏れる。

降りた神は確かに、怖い。恐ろしい。

けれど、それよりも怖いのは。

「氷、流……」

震える手で、千早は氷流の衣をつかんだ。

支えてくれるその腕に、すぐるようにつかみかかる。

「助けて、氷流……」

花びらが舞う。はらはらと。ひらひらと。雪が舞うように。

花びらが降る。

「桜巳を助けて!」

氷流の黄金の色をした瞳をみつめる。

ふと、そのひんやりとしたまなざしが緩んだ気がした。

頬に触れてくる、氷流の優しい指先。

「おれとの契約を、覚えているな?」

しずかに、しずかに。氷流が問う。

「おまえの望みを叶えてやる。かわりにおまえは、おれの望むものをよこせ」

「桜巳を、助けてくれるのなら。なんだってする」

うなずけば、氷流は嫣然と笑って見せた。

千早を背後にかばうように。一歩前へ進み。真正面から桜巳をみつめる。

「承知した。力を尽くそう」

12（後書き）

長くなりましたが、この章はこれで終了です。
次は新章になります。

夜更けなのに、明るい空と。
舞い散る桜と。

輝く大地と昼のように真白い月。

「あやかしごときがわれの邪魔をするか」
言った声音は桜巳だった。

「やめておけ。その命無駄に散らせることになるぞ」

「たかだか人間のか弱き器に降臨なされた程度で、この鬼哭に勝てると思いか？我らが父よ」

淡々と言葉を返す氷流の声に、いつもの余裕は見えなかった。

特に言葉が変わるわけではない。

声音に不安が響くわけでもない。

けれどそれでも、氷流が。桜巳に宿ったなにものかに畏怖を感じているのは確かだった。

「千早、離れておとなしくしている。巻き込まれるなよ」

神の宿った桜巳にひたと視線を合わせたまま、平板な調子で氷流はいう。

その声色からは感情というものが、ことごとくそぎ落とされているように感じた。

視線はひたと桜巳にすえられ、おそらく意識の9割方はそちらに集中しているようだった。

氷流……

声には出さずにその背中をみつめる。

桜巳に宿ったものを、氷流は「神」だといった。

光を司る闇無の神——創始の神のひとはしら。

自分の望みを容れて、氷流はその神と対峙してくれているが、もしかしたら自分は、とんでもない間違いをしでかしたのではないかと不安になる。

いかに氷流が強い 力 を持つあやかしたとはいえ。

仮にも神と名乗るものを相手にして、勝てるものなのか。

いや、勝てなくてもいい。負けさえしなければ。

もし氷流が自分が巻き込んだせいで、しないでもいい戦いを挑んで。万が一にも負けてしまったらどうすればいいのか。

だが。

氷流に頼むより他に、自分では桜巳を救う術を見出せなかったのは事実だ。

そして自分は。

どうしても桜巳に無事でいてほしい。

動いたのは、どちらが先だったのか。

ゆらり、と氷流の姿がぶれた気がした。

次の瞬間には、真白い髪が風になびく残像だけが見える。

千早の目では追いきれなかったが、おそらく同時に桜巳も動いていたはずだ。

大地が鳴り、中空に稲妻が走った。

「ふむ、動かしにくい人間のよりましにも、多少は利点があるようだな」

くつくつと桜巳が低く笑った。

「おまえ、この器を傷つけられぬ理由でもあるのか」

ちろりと出した舌先で、桜巳は赤く濡れた指先を舐め取った。

あかく、ぬれた指先？

認識した事実にはつとして、千早は氷流をみやった。

「……気にするな。大事無い」

氷流に目を向けた途端、そんな言葉が返ってきたが。

その左腕が真っ赤に染まっているのを見れば、震えが走るのを止められない。

「器を傷つけまいとしていれば、先に死ぬのはおまえであろうよ。まあ、われには都合がいいが！」

言いながら、桜巳が駆けた。

今度も千早が目で追えたのは、その艶やかな長い巫女の衣のみ。氷流は応えずにただ大地を蹴る。

今度は先ほどよりも長く、二人の間に火花が散った。

そこは、妙な場所だった。

天花に導かれて、いわゆる『狭間』へ足を踏み入れたのはつい先ほどだったと思うのに。

見る間に月が昇り、沈んで、陽が昇る。

乗っている獣の足が早いのか、それとも時の流れが変なのか。

獣たちと併走していた天花が不意に立ち止まった時には、もうすでに3度ほど陽が昇って沈んでいた。

「どうしたんだい」

風視は例の物騒な獣に乗っていたし、多岐自身も天花がどこからか連れてきた白い毛並みの獣に乗っている。だが、天花だけは獣に乗らずに己の足で駆けていたのだ。

「疲れたのなら、一緒に乗ればいい」

風視はそう声をかけたが、天花は固い表情でたちつくすばかりだ。多岐は思わず風視に視線を送る。だが、返ってきた風視のまなざしは、答えを知るものではなかった。

ただ、どこまでもひろがる草原を渡る風が、そよそよと時折音を立てるばかりだ。

あまりにも広い場所。案内人たる天花が立ち止まってしまえば、もうどこに向かえばいいのかさえ和からない気がする。

だが、その寄る辺のない不安感はいかに幸いにも、そう長くは続かなかった。

「……主さま」

ぼつりと呟いた天花が、おもむろに顔を上げて風視のほうをみつめたからだ。

「主さまの御身になにかあったようです。いそぎましょう」

「鬼哭の身に？」

問った風視の表情は困惑に溢れている。

それはそうだろう。

多岐はあやかしのことなど普通の一般影狩師程度にしか知らないが、少なくとも今まで見た古種族の中で鬼哭のあやかしは一番えらそうで威圧感があった。もとい。強そうだったのだ。

その鬼哭のあやかしの身になにかある、とかいうのは、一体どのような非常事態なのだろうか。

それよりは、まだ何かの間違いだったというほうがよほど合点がいく。

「お怪我を負われたようです」
「まさか」

風視は笑って否定しようとしたが、その表情が途中で凍りついた。何事かと思つて、多岐もその視線の先を追う。

風視の視線は天花の左腕で止まっている。じわり、と血がにじんで、瞬く間に衣が赤く染まった。

「それは……」

「主さまが負われた傷です。こちらに送ってこられたようです」

懷から取り出した布で手際よく止血をしながら、淡々とした口調で天花は説明した。

「送る？」

「わたしや六花は主さまに創られた存在だといっても過言ではありません。一心同体とまではいいませんが、わたしたちは主さまになり近い存在です。ですから、傷を肩代わりすることができのです」

天花はそこでいったん言葉を切つて、軽く唇をかんた。

「とは申しまして。普段なら、主さまが傷を『送つて』いらつしやることなどまずありません。おそらくは、送らざるを得ない状況にあられるでしょう。もしかすると千早さまの御身にも何かあったのかもしれませんが」

最後にぎゅっと布を縛り上げると、感情の薄い瞳で天花はこちらと風視を交互にみつめた。

「主さまのお役に立てるかはわかりませんが。急ぎましょう」

「あ」

言葉をつむぐ時間さえ惜しそうに、天花は言っ

走り出そうと数歩を踏み出す。

多岐が懐に入れた呪符の存在を思い出したのはその時だった。

「どうなさいました？」

問う天花の声には棘がある。

けれど、もしかしたら。

この狭間を駆けていくより早く。千早のもとにたどり着けるかもしれない。

天花が早く走り出したいのは重々承知していたが、多岐は懐から呪符を取り出さずにはいられなかった。

懐をごそごそと探っていると、天花と風視がおかしなものでも見るような眼差しで、こちらを注視しているのがひしひしと伝わってくる。

手拭い、財布に非常食。地図。応急処置用の薬。覚書帳。などなど。

自分の懐は一体いつからこんなにものに溢れているんだろうと自分でも不思議になるくらい。多岐の懐の中にはいろんなものが混在していた。

それなのに、なかなか目的のものは見つからない。

「……早く参りましょう、多岐さま」

焦れたように天花が口を開く。

その姿をもう一度目に映し、多岐ははっと息を呑んだ。

まだたいした時間もたっていないのに、天花のまだ幼さの残る頬が裂け。右肩にも血がにじみ。額にも傷が走って、右の目が真っ赤に染まっている。

「もうあまり時間がない。このままではいずれ、わたしも走れなくなりましょう」

言葉を紡ぐそばから、傷が増えていく。

「この道は、主さまが開かれた『道』。主さまの眷属たるわたしの案内もなしに抜けれる場所ではございません。主さまのもとへ馳せ参じてもお役に立てるかどうかは存じませんが、わたしが走れなくなれば……風視さまも多岐さまも、狭間で迷う幽鬼と成り果てましょう。早く参るべきだと思われませんが、多岐さま。いかがでしょうか？」

鬼哭のあやかしは一体どれほど苦戦しているというのか。

あの、強いあやかしが。

「う、ごめん。いく……」

言った瞬間、天花の小柄な体が見えない衝撃に大きく跳ねた。

「天花?!」

「…… 大事はありません」

もしかしくなくても、また傷が増えたのだろう。

だがもはや、数えることも出来ないほどの傷を負った天花の、その新しい傷を衣の外から確かめることなどできるはずもなく。次から次へと増えていくその傷を治療するのもまた、時間が許さないことだった。

歯を食いしばって、屈んだ天花が身を起こす。

ちょうどその時、ようやくと多岐は懷の中に求めていた呪符をみつけた。

「風視さん!」

説明するのももどかしく、多岐は握り締めてくしゃくしゃになったその札を風視の手へと押し付けた。

「これ、これ使えないかな?!」

「これは…… 呪符?」

受け取った呪符を風視はわけがわからない、といった表情のまま眺める。

「道を通す呪と、大地の 氣 を封じる呪だね。 那智からもらった?」

「はい」

大地の 氣 を封じる呪はいまいち使いどころがわからないが、扉を開くための呪符ならいますぐ使えるのではないだろうか。

扉を開いて、この狭間を抜け出せばいい。

そうすれば、天花にもこれ以上負担がかからないはずだ、とそう思ったのだが。

風視は残念そうにかぶりをふった。

「この呪符は確かに道を通すためのものだけど、 那智風に改造された呪符になってる。 君と那智の間をつなぐ道を通す呪符だといえば、わかってもらえるだろうか?」

「……ここからは脱出できるかもしれないけど、出た先がどこかわからない、ってことですか？」

「うん、不確定要素が多すぎるよ。余力のない今に試したいものじゃない」

風視はそういつて、多岐に呪符を返そうとした。

だが、それよりも早く、横合いから血に濡れた手が呪符を抑えて奪っていく。

「天花？」

「ものは考えようですよ、風視さま。出た先に那智がいるのなら、むしろ好都合ではありませんか」

その顔に浮かぶのは、幼げな顔つきには似合わぬ狡猾な笑みだ。赤く染まって、むしろ凄絶にさえ見える。

「今回のこと、仕掛けたのは那智に決まっています。それならば、主さまが苦戦なされているところか、その近くにて、なにかしら主さまが思うように動けない状況を作り出しているとは考えられませんか？わたしはむしろその可能性が高いように思われますが」

「だけど、那智のことだ。多岐くんに呪符を渡した時点で、ここで僕らが呪符を使うことを読んでいるんじゃないかな？」

「けれど風視さまがそうおっしゃって使わないかもしれないと読んでいるかもしれませんよ」

乗り気でない風視の前で、天花は挑発的にその札を振って見せた。「よいではありませんか。わたしはもうたいして走れない。狭間は抜けられるでしょうがそこで力が尽きてしまうのは確実です。この呪符を使えば、あちら側に戻ってからもいくぶん動けるかもしれませんが」

風視がさらに何かを言おうとしたようだったが、はやる天花はそれを待たなかった。

本来使うべき多岐に変わって、空に呪印を描き出し、短く告げる聖言でその呪を完成させる。

狭間をわたる、風が止んだ。

音が失せ、空間がある一点にむかつて収束する。

「参りましょう、今度こそ」

天花が歩むあとに、赤い色が滴っていく。

それでも、天花は先に行き。風視と多岐は後に続いた。

ぼつかりとあいたような、空間ではなく。

一点に向かつて収束していくような、ねじれた景色の中をわずかに進めば。

わずかの違和感と共に、ぽん、と押し出されるような感覚があった。

数歩、たたらを踏んで、気がつけば。

そこは、まるで夜明け時のような森の中だ。

「ここは……？」

「桜ヶ淵の里のちかく、みたいだね」

「どちらかというと、桜ヶ淵の主の封印があるところの近くかなー」
思わずもれた、多岐のつぶやきのような問いに応えたのは、風視と知らない誰かの声だった。

風視と天花がその声にはっと反応して、多岐をかばうように一歩前へ出る。

確かに、自分はこの三人の中では一番弱いだろう。

けれど、一見幼げで、しかも傷だらけの天花にまで庇われるのは、ほんの少し複雑なきぶんだった。

「お下がり下さい、多岐さま。輝^{かく}の御使いです」

天花に無理やりに下がらされつつ、多岐はふたりが対峙している青年を見つめた。

さらさらした金色の髪に、真昼の空を映したような瞳。

年のころなら、自分と同じくらいだろうか。髪と瞳の色さえ一般的なら、町に紛れてしまえばわからないような風貌の青年だった。

ごく普通の、人間にさえ見える。

「カグノミツカイってなんですか？」

「そのままだよ。光の男神、闇無の神の眷属のことだ」

「つまりは、あやかし一派であるキミたちの敵ってことだね」

敵なのにそんな補足を加えてくる青年は、なんだか底抜けに明るくて、お調子者のような雰囲気があった。

「まあ、輝の御使いなんて堅苦しい呼び方しなくても、ありあけ有明さんって呼んでくれたらいいけどねー」

くすくす、くすくす。

ただ一人楽しそうな有明は、ちよつと首を突き出すようにして多岐を覗き込むようなしぐさをしてみせる。

「そのの、人間のキミ。いい感性してるのに、なんであやかしなんかのところにいるのさ？ こっちにおいでよ」

「……いい感性？」

「そそ、キミさ。闇無さまの神殿にもぐりこんでいた子だろう？

闇無さまがせつなそうな顔をされているって感想をいつてたじゃないか。人間にしてはスバラシイ感性だともうよ、僕は」

風視が。天花が。

不審そうな表情でこちらをみつめている。

有明は楽しそうにさらに言葉を継いだ。

「忘れたの？ちゃんと教えてあげたでしょ？ あの哀しい表情は闇無さまは今でも輝無さまを愛していらっしゃるからだよって」

あのときの、空耳。

神殿で聴いたその言葉を確かに思い出して、ぞくりと背筋があわだった。

「だからさ、あやかしなんて邪魔なんだよね」

一見優しそうに見える表情で、有明がにこりと微笑む。

「古種族も、あやかしもいなければ。輝無さまは眠る必要もなく、いますぐにでも目覚めなさる。争いの根源がいなければ、おふたりが争いをなさる必要もない。すべてがまるく収まるだろう？」

「女神が、ねむる？」

言葉の意図を解せず、多岐が言葉を繰り返せば。

有明はいかにも馬鹿にしたような顔つきになった。

「輝無さまがお眠りになっっていることさえ知らないのか」

冷たく、その声音が響く。
それをかばうように、天花はまた一歩前へと進んだ。

「輝無さまは、闇無さまがあやかしたちを処分なされようとした時に、かわいそうだと慈愛の心でもって護られたのだ。そして、かわりに永き眠りにつかれたのさ」

そんな天花を見下ろすようにみやって、有明は簡単にそう説明をした。

「その眠りは、闇無さまがお使いになられた敵意ある 力 が輝無さまの夢に浄化されるまでは醒めはしない。あやかしたちを護るためにお眠りになっているのだから、あやかしがいなくなれば輝無さまもお目覚めになるのは道理だろう？」

果たして、その話が真実だというのなら。

多岐が知っている創世の神々の話とはひどく異なることとなる。

闇無の神は人間を守護するわけでもなく。ただ、あやかしを滅ぼしたかっただけで。

輝無の神は人間を滅ぼそうとするわけでもなく。ただ、あやかしを護ってやろうとしただけで。

けれど、実際のところ。

あまり関係のない話だと、多岐はぼんやりと思う。

「風視さん、千早がいるところは遠いのかな？」

神々の争いなど、自分の手には大きく余る。

ただ、自分は。千早が普通に幸せに。生きていけたらいいと思うだけだ。

「あまり興味がなさそうだね？」

「話が壮大すぎるからな。俺は目先のことで精一杯だよ」

風視のかわりに口を開いた有明に、そう言葉を返せば。

有明はまた楽しそうにくすくすと笑った。

「じゃあ、目先の話をしようかな？」

肩先の金髪を指先ではらって、そう言葉を紡ぐ。

「キミたちが、呪符で通った道を抜けて、たどり着くのは那智のところだったはずだろう？ 何故ぼくがここにいいのか、考えたほうがいいんじゃないかな？」

「どういうことだよ？」

「ぼくと那智は賭けをしたんだ。キミたちが呪符をつかうかどうかにつこりと有明は笑って、ねえ那智、とそんなふうによびかけた。その言葉を受けて出てきたのかどうかはわからないが。」

有明よりも後ろの、ふとめの木の影から、いつも通りの険しい顔つきをした那智が姿を現す。

「ぼくは使っんじゃないかといって、那智は使わないんじゃないかといった。風視くんは慎重だから、自分の渡した呪符なんかつかわないだろうってね」

なるほど、確かに那智は風視の性格をよく把握していると思う。

「まあそんなわけで、キミたちには朗報かもしれない。ぼくが賭けに負けたら、今回の件に尽力を惜しまないっていったからね。だけど、ぼくは勝った。つまり、今回のぼくはサボり要員ってことさ」

有明の話は、迂回しすぎて非常にわかりにくい。

多岐が言葉の意味を解しようと頭を動かしていると、天花が満身創痍なものにも関わらず、すばやく動いた。同時に、風視も地を強く蹴る。

「ならば早々に立ち去られることをお勧めいたしますよ！」

天花は言葉と共に那智へと。

同時に動いた風視は迷うことなく有明へ向かって一気に距離を測る。

「せっかちななあ。話は最後まで聞いたらどうなんだ？ そのほうがいいと思うよ？」

「おまえと話することなど何もない。どうせぼくらは敵同士……親しく言葉を交わすいわれもないだろう？」

言いながら、風視が手を振り上げれば。

そこに深い闇があふれる。

「だから、とつとと退場しろって？ ひどいなあ」

風視が闇で空間を薙げば、有明はひよいと後ろに飛び下がってその攻撃を避けた。

「だけどさ、短気は損気っていうだろう？ やっぱりちゃんと話は聞いたほうがいいよ」

風視と有明の後方では、天花が那智と攻防を繰り広げている。

傷だらけでも、さすがは鬼哭の眷属といったところか。

多少おされながらも、那智に決定的な遅れはとっていないように見えた。

「なんていうのかなあ。今回はぼくが勝ったから、あとは那智が頑張ってくれるんだけど。実のところ、桜ヶ淵ごときを殺したからといって、輝無さまの目覚めが近くなるとは、ぼくは思えないんだよね」

「……どういう意味だ」

「どういう意味も何も、桜ヶ淵に止めを刺すために、闇無さまは降臨されたようなものなんだけどね？」

「神が降臨？」

「あ、知らなかったの？ 降臨されてるんだよー。今はあつちで鬼哭のあやかしと遊んでるけどさあ」

呑気な調子の有明の言葉に、視線は自然と昼間のような光を放つ方角へと向き、そのあとすぐに天花のほうへと向いた。

突然負った天花の傷は、それが原因だったというのか。さすがの鬼哭も神を相手にすれば無傷ではすまなかったということなのだろう。

「あ、もちろん闇無さまの唯一にして最大の目的は、輝無さまのお目覚めだし。ぼくだってせっかくだから、ちよつとくらいは手伝わけどね。でもなーあやかし一人くらい倒したって変わらないと思うんだよね。あ、そうそう。芽津の仕掛けはさ？ 桜ヶ淵が無事に目覚めることができれば、勝手に解除されるから、頑張ってみたらどうかな？」

有明はどうあっても、風視としゃべってじゃれあいたいらしい。

風視の攻撃をひよいひよいと紙一重で避け続けながらもその口は止まらない。ただ矢継ぎ早に言葉をつむぎ出していく。

「芽津の桜珠と、桜ヶ淵の封印は共鳴関係にあるんだ。芽津の仕掛けが先に壊れれば、桜ヶ淵も一緒に壊れちゃうけど、桜ヶ淵の封印が先に壊れれば、芽津の仕掛けも一緒に壊れてメダシメダシって感じかなあ？　ただ呪をかけるだけじゃつまらないから、そういうふうに作ってみたんだ」

にこにこしている有明とは対照的に、風視はがっくりと肩を落とした。

「おまえ、なにがしたいんだ」

敵、のはずなのに。

どちらかというところ、闇無の手先で、桜ヶ淵を殺しに来たはずなのに。

その手の内をしゃべりまくって解決法まで暴露して、にこにこしている有明は、多岐から見てもちよっとおかしいように見えた。

「なにつて」

肩をすくめた有明は。

避けるのにあきたのか、風視のスキをついてその肩をぽん、と軽く押した。

勢いづいて後ろに倒れこんだ風視は、その背を近くの木にしたたかにぶつけて、息をつめる。

「暇つぶしと、ぼくをいのように使ってくれた那智へのちよつとした意趣返しだよ。あと、気に入ったその子への優しさというかなんというか」

ほんのわずかに眇められた、有明の碧眼。

ぞっとするほど冷たい眼差しが自分のほうへと向けられて、多岐は知らずに息をつめた。

5（後書き）

有明、さっさと退場してくれないかな…
話が進まない><

わずかに首をかしげ、有明は一步つい、と多岐の方へと進む。

「まあべつにさ。殺しちゃっても、いいんだけどね？」

覗きこむようにこちらをみつめ、やわらかな動きで差し出された手が、そっと首を絡めとる。

「よせ！やめろ、有明！！」

叫ぶ風視の声を、遠くに聞いた。

そう強い力で、首に手をかけられたわけでもないのに、体が凍りついたように動かない。

ただじっと、有明の手の感触を感じながら、その場に立ち尽くすばかりだ。

「影狩師は、たとえどのように疑わしくても同じ影狩師をその手にかけてはならない」

細い手に、指に。

ほんの少し、力がこもる。

白連塾の、不文律を声に出して呟いて。有明はまったくすすくと笑った。

「だから、あやかしや風視と一緒にいるキミを、那智はどんなに殺したく思っても、直接手にかけることは出来ないって、しってたかい？　ちよっとした事故で、あやかしに殺されたり。ぼくに殺されたりするのは、しょうがないかもしれないけどさ」

有明はなぜこんなにも、楽しそうに笑っているのか。

「殺しちゃってもいいんだけどね？　でも、キミはいい感性を持ってるからさ、今回ばかりは見逃してあげようかなと思うんだ。キミ一人くらい生きてても死んでもそう大差があるとは思えないし。今回は那智に対する意趣返しだし。那智が殺して欲しいって思ってるのなら、生かしておいてあげようかなあとか思ってたさ？」

ぱ、っと有明が首から手を離す。

その瞬間、多岐自信の意志を無視して、ひゅつと体が反射的に息を吸い込んだ。

そしてそのまま、げぼげほと咳き込みながらくず折れる。生理的な反射のせいで、立っていることができなかったのだ。

「みんなが退場して欲しそうだから、ぼくはもう帰ろうかなあ。闇無さまもそろそろお帰りになるころだし」

くすくすとさらに笑いながら、有明はひらり、と軽く手を振った。「それじゃあ、またね？」

一体何をしに出てきたんだと突っ込みたくなるような唐突さで、有明はその場を離れた。

というよりも、姿を消した。

「これだから、神の眷属は気まぐれで困る」

そんな有明の姿を見送って渋い調子で声を上げたのは那智だった。「賭けをするほど仲がいいのにかい？」

「わしは、呪符を使うと思うかと問われたから、思わぬと答えただけだ。あとは御使い殿が勝手に決めて勝手に一人で言われたこと。わしは存じぬ」

めんどくさいことだと、辟易したように呟く那智の手には。いつのまに倒したのか、天花が力なくぶら下げられている。

「……その子を離してはくれないかな？」

「何故だ？ これは古種族。わしらの敵だろう」

けほ、と軽く咳き込みながら、風視がゆらりと立ち上がる。

たたきつけられた時の衝撃がまだ残っているのか、その動きはぎこちない。

「敵とすべき古種族と敵とすべきでない古種族があると思うと、以前に説明したことがあると思うんだけどな？」

「それはおぬしの理論であって、わしの理論ではない」

ようやく咳をおさめた多岐が見たのは、無造作に地面に投げ出される天花の姿だった。

死んではいない、と思う。

ただ意識があるのかないのか、ぐったりとした天花が動く様子はない。

放り出されたそばから、じわりと赤いものがたまっていくの見える。

「鬼哭に白連塾を滅ぼされたいのか？」

「敵が向かってくるのならば、迎え討つまでだ。それがあやかしなればなおのこと」

「那智！」

もどかしそうに、風視が叫ぶ。

天花が、踏みつけられてしまう。

あんなにも小さな身体をしているのに。

あんなにも、傷だらけなのに。

那智が足を上げ、踏み降ろす。

そのせつなの瞬間に、多岐はかろうじて間に合った。

その身を投げ出し天花を抱いて地面を転がって避ける。

戦力外として認識されていなかったためか、那智の隙を突いてうまく助け出すことが出来た、と思う。

「多岐、やはりわしを裏切るのか？」

特に責めるわけでもない、那智の低い声を。ごろごろと地面を転がりながら、遠くに聞いた。

「あやかしに味方をするのか？影狩師の矜持を捨てて、わざとなのか、なんなのか。」

那智は、千早の件については、触れなかった。

「そういう問題ではないですよ、那智さま」

身を起こして、腕の中の天花をみやれば。

血の気をうしなつてぐったりとしている。意識すらもないらしく、蒼ざめた幼い面差しはいつそう哀れを誘った。

「こんな子供に。いくら古種族とはいえ……」

非難をこめて、那智をみつめれば、那智は鼻先で一笑に付した。

「その童は、わしの2倍だか3倍だかの時間を生きておるぞ」

そういえば、ときめぐりの民の長老も、幼い子供の姿をしていた。その指摘に、多岐は思わず無然とした顔つきとなる。

こんなときなのに、外見と内面の年齢の差を考えてほんのすこし、だまされたような気分になった。

「おぬしは、あれだな。まだ選択のときさえきておらぬように見えるな」

何がおかしいのか、那智は低く笑った。

険しい顔つきで立ち尽くす風視に視線をやり、ほんのわずかに顎をそらす。

「邪言使いよ、わしはおぬしの理念もよく知っている。だが、かといつてあやかしと馴れ合う気はない。たとえ、影狩師がもと、あやかしと人間の架け橋たろうとした事を知ったとしても、だ」

「那智、君は知って……？」

「おぬしほどではなくとも、わしも人間にしては長い時間を生きているほうだと思つておるのだがな」

森の中はいつの間にか、夜明けの明るさから、昼のような明るさになつていた。

「輝の神の、偏ったあやかしへの憎しみを真に受けるわけではない。だが、わしはわしで、やはりあやかしを許しがたい理由があるのだよ。おぬしのように、愛しいものを殺されてまで慈愛を垂れ流すほど、わしはお人よしではないからな」

やはり、あやかしは許せぬ。

古種族は憎い。

かみしめるようにそう呟いた那智は、無言で多岐に近寄ると。

おもむろにぐったりとした天花の身体を引き離し。多岐の懷に断りもなく手をつっ込んだ。

害意がないから反応が遅れたのか。

もし、那智が多岐を害するつもりならば、その命がなくなっている。ただろうことは言うまでもない。

啞然とする風視と多岐を尻目に、その懷から引き出したのは、見覚えのある呪符だ。

地の 氣 を封じる呪がこめられた、呪符――

「多岐。もし、あの娘をあやかしの呪縛から救えたら、おぬしはわしの側につくのだろうか」

問いかけのような、それでいて、独り言のような。

「なち、さま……？」

「言うても詮無いことであつたな。わしはあの娘をあやかしの呪縛から救うことが出来なかった」

呟くようなその言葉に、多岐は思わず眉間に皺を寄せた。

多岐が知る、那智の行動はすべて。

千早を陥れようとするものばかりに見えたのだ。

一番初めの、待ちぼうけの時もかり。

呪符を渡した時もかり。

助けることもしようと言いながら。とる行動は、排除するようなものばかりで。

那智はただ。ほんのすこし思案するように、呪符をみつめて立ち尽くしていた。

「2年前のあの日。わしは桜ヶ淵の主だけを殺すつもりだった。よもや、派遣した影狩師のあの娘が、桜ヶ淵の巫女の友人だったとは思ひもしなかった。人選を誤ったのはわしの過つところであつた」

独白のようなその言葉に、風視の表情が険しくなる。

「人選とか、そういう問題じゃないだろう」

「おぬしは長く生きているばかりでちつともわかつておらんのだな。そういう問題なのだよ、邪言使い」

くちびるを歪めるようにして那智は言い、深く息を吐き出したのだつた。

「選んだのがあの娘でなければ。桜ヶ淵のあやかしが狂ったときに止めを刺すのを躊躇するはずもなく。躊躇せねば死に掛けることもなく。鬼哭岳のあやかしが気に入って助けることもなかったろう」

「そういう問題じゃないと、言っているだろう！」

淡々と言葉を継ぐ那智に、風視はさらに声を荒立てた。

「ぼくが言いたいのは、それ以前の問題だ。人間とあやかしがうまくやっているとこで、なにを思っ事荒立てるようなまねをする」

「あやかしゆえに。人間とは異なるゆえに」

「那智！」

「異なる種族がともにあるこうとしてもすれ違いしか生むまいに」
もてあそぶように呪符をさわり、那智はゆるりと息を吐く。

「わしの過ちのせいで、あの娘には不幸を強いた。まだ人間として生を終えたほうがいくばくか幸せであつたらうに」

夜の森の中に生まれた、昼の明るさのほうへと視線をよこす。

「千早ちゃんを殺すために今回のことを仕組んだのか」

「あの娘には悪いとは思うが、それだけのためにこんな大掛かりな仕掛けはせぬよ」

那智の視線がこちらへと投げられ。地面に投げ出されたまま意識のない天花を通つて、再び風視に向けられる。

「桜ヶ淵の里人を、あのあやかしの呪縛から救い。あやかしに止めを刺し。できることならあの娘にも引導を渡してやろうと思うておつた。里人のためにも、あの娘のためにもそれが一番よからうて。

鬼哭のあやかしが守護をよこしたのは、いささか予想外だったかな」

那智は、那智なりの方法で千早を救おうとしていたというのか。

多岐はその言葉を脳裏でなぞり、苦々しい思いを抱いた。

確かに、予想外にあやかしになってしまつて、千早は戸惑つたの

かもしれない。苦しんだかもしれない。だが、それだからといって、那智が勝手に未来を定めてしまうのはどうなのか。本人に問うこともせずに、ただ不幸だと決め付けて。

桜巳の身体を光の神が使っているせいで、ろくに反撃も出来ぬまま。

氷流はどんどん傷ついていく。

「氷流……っ!!」

きわどい攻防戦。

氷流のうつくしい、雪のように真白い髪が、いつそまがまがしくあかく、赤く、紅く染まる。

けれど、千早は気づいていた。

いつの時だったのかはわからないけれど。

氷流の傷が。ひどいものほど早く。消えていくことに。

傷が消えていくにしたがって、氷流の表情が険しくなっていく。

消えた傷が、より痛みをはらむかのような。痛くて痛くて、哀しい顔。

「どうした、わが息子よ」

くく、と低く桜巳が嗤う。

「あまりに傷を送りすぎると、そなたが大切な眷属が死のうぞ?」

桜の花びらをまとった桜巳が、白い指先を汚す赤い色をまた舌先で舐めとっている。

どうすれば、いいのだろう。

どうすれば、氷流も。桜巳も。夜斗も。みんながうまく助かるのだろう。

「氷流……どうすれば、桜巳の体からあの神さまを追い出すことが出来るの?」

泣きそうになりながら、千早が問えば。

氷流はひんやりとした黄金のまなざしを、いつになく哀しそうな色をそえて向けてきた。

「早く追いつかないと、桜巳が……」

成果を挙げられない氷流を責めるつもりは毛頭ない。

相手は、神なのだ。

いくら氷流が強くとも、そう容易く太刀打ちできる相手でないのはわかっている。

だが、わかっていても気ばかりが焦って喉が焼ける。

のどの奥に大きくて熱い塊がつまったようで、ただひたすらに苦しいのだ。

「教えて、氷流。私に手伝えることがあるのなら、なんだってするから！」

決死の思いで、千早がそう訴えても、氷流は口を閉ざしたままだった。

「氷流！」

焦れてその名を口にしても、氷流は苦々しい顔つきでわずかにかぶりを振っただけだった。

桜巳のまわりの光はさらに強くなり、まるでここだけが真昼のようだ。

「ねえ！」

「そんなに知りたいのならば、われが教えてやろうか、娘よ」
低く笑う桜巳がからかうように口を挟んでくる。

険しい表情の氷流が庇うように前にたったが、桜巳はひよいとそれをすり抜けて千早の前へとやってきた。

「知りたいのならば、教えてやろうぞ？」

よく知った、桜巳の細い指先が頬に触れる。

だが、接触は一瞬だった。

「よせ」

唸るように言った氷流が、桜巳に向かって呪を投げつけたからだ。
大気を凍らせて、氷の礫が桜巳めがけて飛んでいく。

少なくとも、そのに手加減の文字はないように見えた。

きらきらと輝く無数の氷の粒。

とても美しく、輝いて。けれど容赦なく、すべてを冷たく絡めとる、氷流の呪。

今までの責めあぐねていた氷流の攻撃とは違い、明らかに。桜巳への確かな敵意と外意をはらんだ攻撃だったと思う。

「氷流……？」

「大概にしておかれるとよろしかろう」

桜巳はその攻撃を避けて。

避けたけれど、避けきれず。

髪の一部と衣の右側の袖を凍らせた。

「この娘を傷つけてもよいというのか？」

桜巳の紅をはいた赤い唇が弧を描く。

挑発するようなその問いに、氷流は低く答えを継いだ。

「もとより。おれは人間の小娘なぞ、興味はない」

あやかしは、嘘をつかない。

人間よりもずっと、呪というものに近い存在であるがゆえに。

「なればこそ。多少傷ついたところで、おれはかまわぬ」

中空にむかつてのべた手に、きらきらと無数の氷が集まってくる。

心が、冷えた気がした。

けれど、同時に納得することもある。

自分が頼んだからこそ、氷流は桜巳を助けようとしてくれたが。

もとより、氷流と桜巳に面識はない。せいぜい、自分の友がかまっている人間の女、という認識くらいでしかないのだろう。

そう、ただの人間。

ひとりやふたり、欠けたところで、何の痛みももたらさない。

取るに足りない存在。

「千早の頼みもあつたゆえ、あまり傷つけぬようにと思っていたが、埒が明かん」

その手に集まった氷の粒は、長く鋭い剣を創り出す。

黄金の眼差しはどこまでも冷ややかで。

静かに桜巳を見据える。

「そこな小娘に嫌われたとて、われは知らぬぞ？」

「父上にご心配をおかけするようなことは取り立ててござらんが？」

氷流は桜巳を傷つけるのだろうか。

殺してしまうのだろうか。

冷たく心が凍っていくような心地がする。

止めなければと思うのに、喉に張り付いたように声が出ない。

動き方を忘れてしまったかのように、手も足も固まったように動かない。

どうすれば——どうしよう……

泣き出しそうな焦燥感が募る。

けれど氷流は。眉ひとつ動かさぬまま桜巳をみつめ、握った氷の剣をならすように一振りした。

大気が凍って、ぱらぱらと砕け落ちる。

ほんのりと、酷薄な笑みを添えて。氷流は桜巳にむかつて最初の一步を踏み出した。

そもそも。

自分だって、氷流にとつては取るに足りない存在なのに違いない。ただ、桜巳よりはたぶん。氷流にとつて意味がある存在かもしれないけれど。

気まぐれで、氷流が助けてくれたという、その過去の分だけ。

いったい氷流に何の益があるのかはわからないけれど、自分が氷流の願いをかなえるかわりに、自分の願いを叶えてくれるというわけのわからない取り決めまであるのだから。

「だめだよ、氷流……っ！」

氷流に比べたらあまりにも自分は無力で。

氷流にしてあげられることなんて皆無に近いけれど、人間だったというその事実から、何かしてあげられることがあるのかもしれないと、そんなふうを考えていた。

あやかしは、嘘をつかない。

その常識に従って。つい今しがた間で、氷流は自分が望まない限り桜巳を傷つけないと。

無条件にそう信じていた。

「やめて！」

叫んでいるはずなのに。

言葉は喉に張り付いて。

か細い声しか出なかった。

銀色の輝きをまとう、氷の剣を手にした氷流が、大地を蹴る。

ち、と忌々しげに桜巳が舌打ちをする音が聞こえた。

さすがの輝の神も、人間をよりましにしていれば、できることに制限があるのかもしれない。

桜巳はただの人間で、多少巫女としての才は持っていても、別に代々の巫女の家系であるとか。類稀な才能をもっているとか、まっ

たくそついう話は聞いたことがなかったから、ごくごく普通的能力しか有していないのだろう。

そんな彼女が神を降ろせたことのほうが驚きだ。だからたぶん。

輝の神は、氷流に本気を出されれば、困るのだろう。

傷つけない配慮とか、そういうものをかなぐり捨てて向かってこられれば、いくら神といえど、器の能力に大きく左右される身としては、敗色が濃厚になるのかもしれない。

輝の神が還ってくれるのは、万々歳だが。

それで、桜巳が殺されてしまうのは非常に困る。

「氷流！！！」

もうこうなったら、力尽くで止めるしかないのかもしれない。

そのとばっちりで、自分の身に危険が及ぶかもしれないと。考えなかったわけではない。

けれど。

どうせ、もう2年前に終わっていたはずの命なのだから。

それで桜巳が助かるのなら、かまわないかもしれないと。そんなことを考えた。

張り詰めた空気。

本当に切羽詰った時は、実際の時間が何倍にも引き延ばされて見えるから不思議だ。

「予想外といえば、御使い殿が来られたことも。神が降りたことも予想外だった」

ちらりとより明るいほうへ視線をやって、那智はそう言った。

「桜ヶ淵のあやかしを今度こそ殺し、2年前の決着をつけることだ

けが今回の目的だったのだが。よもや神まで出張ってくるとは思わなかった」

那智は、多岐の記憶が正しければ。輝の神の神官だったと思うのだが。

なぜだろう、あまりその存在というか、降臨を歓迎してないように思える。

「神は、神の論理で動かれるからな。特に輝の神は、もはや人間の守護者ですらない」

淡々と那智が言葉を継ぐ。

妙な緊張感が、先ほどよりも増して、その場を満たしていた。

10（後書き）

この章が終わらないのは何故でしょう…

また予想外に長くなっているようです><

@2回くらいでこの章を終われるといいのですが…

「桜ヶ淵を殺すという点で、君と輝の神は利害が一致したのではないのかい？」

張り詰めた空気のせいか、いささか慎重に風視は問うた。

「たとえ、その点で一致したとしても……」

応えかけた那智はほんの少しだけ、首をひねった。

「邪言使い。おぬしは輝の神と面識があると思うていたが？」

「残念ながら、ないね。ぼくのように力の弱い敵対勢力が神と対面して、無事にすむと思っているのかい」

「自慢するようなことではなかるう」

くく、つと笑った那智は。

呪符の表面をなでながら、少しばかり言葉を搜したようだった。

「たとえば、わしが、この木から虫を一匹駆除したいと思うとたしょう。わしは虫だけを駆除する。まあ場合によっては、枝ごと折り取る場合もあるかもしれんがな」

「う、ん……？」

「だが、神というものは。虫を一匹駆除したいがために、山ごと平地にする方々だと思えばよかるう。利害が一致したとて、素直に喜べぬわけがわかるかな？」

かみくだいてそう説明する那智のその言葉に、特にイヤミは感じられなかった。

常日頃、授業を行っているその習いなのだろうか。

「あの、那智さま。それはつまり、桜ヶ淵をつぶしたいがために人間を滅ぼすということですか？」

「そうともいえる。もっとも輝の神の目的は常にひとつ。闇の女神の復活だ。そのために、何を犠牲にしてもかまわぬと思うておられるのだらう。桜ヶ淵は、闇の女神の眠りを守る、封印のひとつだったようだ。だからわざわざ神御自らがお出ましになられたのである

う」

あやかしを滅ぼしてしまおうとした、輝の神。

夫であるその神の手から、あやかしをかばった、闇の女神。

女神は、己の眷属たるあやかしに命じて、眠りを妨げられぬよう封印を織り上げた。

そうして、輝の神がはなった、憎しみの力を抱いてねむり、己が夢で浄化をもうずいぶんと長い間試みているという。

そんなことを簡単に説明してくれた那智を、多岐はほんのすこし尊敬の目で見つめた。

長く生きているというあやかしの風視はまったくもって興味がないうだった、が、むしろあやかしなのに何故知らないの、という気持ちでいっぱいだった。

氷流なんかは多分知っているのだろうが、聞くのは怖いので、とりあえず今は那智が説明してくれたことがありがたかった。

「あのー、那智さま？ぼくとしても、那智さまとしても。とりあえず神様にはおかえりいただきたくないともずいわけですね？」

「そうだな」

「それは、どうすればいいんでしょう？」

千早を護るためには、と思つて風視についていたのだけれど。

どうもこの局面で頼りになるのは那智らしい。

あやかしが絡まなければ那智はいい先生だし、少しくらいは信用したっていいだろうと、いささか都合のいい解釈で現状改善に臨む。何か言いたそうな風視の視線も刺さったが、そこはあえて無視することに決めた。

とりあえず、夜のはずなのに真昼のように明るい現在といい。

なんだかやたらに澄みわたっている空気といい。

あまり現状がよいとは言えないような気がするのだ。

戻すのなら、早いほうがいい。

那智は、少し思案するようにこちらを見ていたが、やがてひとつならずと、先ほどからもてあそんでいる呪符を示した。

「神がこの地におわすことができるのは、輝の御使いが降臨し、なおかつ巫女が氣と大地を歌と舞で清めたからだ。清浄なる神気を巫女から切り離すことが出来れば、おかえりいただくことが出来るのではないかとわしは考える」

「具体的には、どうやって？」

「この呪符を使う。もともと気を切り離すために織った呪だ。巫女に押し付ければ、ある程度は切り離すことが出来るだろう」

那智の説明を受けて、多岐は黙り込んだ。

問題は、神にどうやって呪符を押し付けるかということである。

脳裏にちらつと、昔読んだ物語で、ネズミが猫に鈴をつけようと相談する話が浮かんだ。

では、その無謀なネズミの役は誰がするのか。

多岐は黙り込んで、その場にいる一人ひとりの顔を見つめた。

なんとなくだが、風視と那智は向かない気がした。二人はあまりに正攻法が好きそうだからだ。絶対的に勝てなさそうな相手に、正面から向かっていくのは馬鹿がすることだと思う。

自分は力量不足だから、普通に除外。

一番向いていそうな天花は満身創痍で意識があるのかどうかも危ういから、これも除外。

……あれ。だれもいない？

多岐が思わず眉間に皺を寄せた時。

その影はちょうど那智の正面をかすめた。

あまりのすばやさに、とっさに那智が反応できなかったほどだ。おそらく害意がなかったというのも、反応が遅れた一因ではあるのだろうが。それにしても見事だ。

「これ……これをつかえば、桜巳のねえちゃんを助けられるのか？」
那智からかすめとった呪符を手に。

ぼろぼろの衣をまとった10歳くらいの少年が、思いつめたような顔つきでこちらを見ている。

「君……それを、お返し？」

風視がそつとなだめるように手を出せば、少年は頑なにかぶりをふって、呪符を背に隠した。

「お前らなんか、信用できねえよ！」

「君」

「ちかよんな！」

噛み付くような調子で叫び、少年は数歩あとずさった。

「おまえらみんな、影狩師だろう！2年前に何をしたか、おれが知らないとも思ってるのか！」

ネズミというよりは、背中をこれ以上ないというくらいに逆立てた、警戒心むき出しの猫。

「おまえらなんか、大嫌いだ。2年前、あれだけ里をぐちゃぐちゃにしたくせに！ まだ足りないってのか？！」

そうなじる少年は、呪符を硬く握り締めたまま、じりじりと後退を続ける。

多岐は思わず、風視のほうを見やった。次いで那智を見つめる。

ほんの、わずかに感じた違和感。

ふつうの人間の子供に思えたが、違うのかもしれない。

「おぬし、人間ではないな？ 桜ヶ淵の眷属か」

問うたのは、那智だった。

大きな目でぎょろりとにらみつけると、少年はふうつと威嚇するように唸った。

「だったらどうした！ 主さまをあんな姿にしたくせに。許さないぞ！」

「封じたのはわしではないぞ？ おぬしの同族ともいえる鬼哭のあやかしだろう」

からかうような那智の言葉に、少年は一瞬つまった。

「でも、その原因を作ったのはおまえらだ！」

更なる勢いでかみつくと、こちらを警戒しながら手の中の呪符を見つめ。

「鬼哭さまは、主さまを助けてくださったんだ」

己に言い聞かせるようにそう言つて、ゆっくりと息を吐く。

「この呪符でねえちゃんを助けられるって言うのはうそじゃないみたいだな」

呪符をじっくり検分して呟いた少年は、そのままくると踵を返した。

「あ、きみ！」

風視は呼び止めようとしたが、那智はどこか面白そうな表情をして成り行きを見守っている。

「相手は神だ！ きみじゃあぶない！」

相手が誰でも危ないと思うのだが、お人よしの風視は、もしかしたら自分で無謀なネズミの役を買って出るつもりだったのかもしれない。

けれど、少年はとまらなかった。

人間にはありうべくもない速さで、駆け。

みるまに光の強いほうへと駆けさっていく。

「まつんだ、きみ！」

風視も叫んであとを追う。

多岐も、ちらりと那智を見やったあと。意識のないふうである天花をかついで後を追うことにした。

那智はほんのすこしばかり、面白そうな笑みを浮かべている。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

ただそればかりが脳裏を占めていた。

本気を出さなければ、いつか消耗して死んでしまうのは氷流のほうだろうし、うちに神を宿したままだと、桜巳の精神状態だってあぶない。

そんなことは、わかっている。

けれど、氷流が桜巳を殺す気で向かっていけば。

神を追い返すことはできるかもしれないが、きっと桜巳は死んでしまうから。

桜巳を助けて、と願った自分に。

氷流は是の言葉を返してくれたけれど、力を尽くすといっただけで。

必ず助けるとはひとこともいわなかったのだと。

そんなことが不安になる。

氷流はあやかしだから。

たぶん、自分とは感性が違って。

氷流はあやかしだから。

たぶん、人間一人をみすてることくらい、なんでもないことのように思っているのではないだろうか。

どんどん、どんどん。不安ばかりが募っていく。

後ろむきな思考だと、わかつてはいるのだが。

不安なことは、思えば思うほど。どんどん澱んで、にこって。信じることが難しくなっていく。

それを、止められなくて。

馬鹿なことだと、わかっているのに。

「氷流……」

途方に暮れて、つぶやいたとき。

視界をなにか、ちいさな影がすさまじい速さでかすめていった。

12（後書き）

第七章の5話目、半ばぐらいの有明の台詞を修正しました。
大筋は変わっておりませんが、一応お知らせまで。

びつくりして瞬けば、何か紙切れのようなものを手に、駆けていく少年の姿が見えた。

——おまえのせいだ！

悲痛までな叫びを、非難を。千早にぶつけた少年だった。まっすぐ。

一直線に。

ただひたすらに、桜巳と相対しだんだんと桜巳を追い詰めていく氷流のもとへ、走っていく。

「まって！」

千早は思わず叫んだ。

桜巳相手に、手心を加えることをやめたらしい氷流と。

追い詰められて、余裕のなくなっている桜巳と。

そんな極度の緊張感にあふれた、ふたりのところに割り込むのは、あまりにも危険だ。

「だめよ、戻って！」

けれど、千早の叫びにも少年は立ち止まらなかった。

かわりにその声が届いたのは氷流で。

ほんの一瞬、その意識が、こちらへと流れるのがわかった。

その隙を桜巳が逃すはずもなく。纖手が舞って、氷流の頬に朱が散った。

目の端で、そんな光景を捉えていたけれど。

大丈夫。きつと氷流はそれくらいでは死なない。

それよりも、今は。駆けて行った少年のほう気になる。

桜巳と夜斗を知っていて。

この里でただ一人、2年前のことを覚えていて。

この2年間、ずっとひとりだったであろう、あの少年。

桜巳の次なる攻撃を避けた氷流は、ちらりとこちらに視線をやっ

て。

なぜだかわずかにかぶりを振った気がした。

「童。はずすなよ」

氷流が何を思っ、そんな言葉を口にしたのかはわからない。
少年も、もしかしたら戸惑ったのかもしれない。

ほんのわずかに、駆ける速度が鈍ったように思った。

氷流が、動く。

空中に浮かぶ無数の氷粒が、一拳に桜巳に襲い掛かった。

ひるんだ桜巳の長い長い髪を、一閃した氷の剣が何のためらいもなく、切り落とす。

はらはらと、舞い落ちる、髪。

はなびら。

きらきらときらめく氷粒。

昼のような光を受けて、きらきら、きらきらと。

氷流がどう動いたのかはわからない。

桜巳は氷流に攻められるままに。

大樹を背に立ち尽くす。それ以上後ずさることさえ出来ずに。

桜巳の、首をかすめるように、大樹に突き立った氷の剣。

「ねえちゃん！」

桜巳の、表情が屈辱に歪んだ気がした。

そこに、少年の手で呪符が押し付けられる。

「ねえちゃん、しっかりしてよ！」

光が、はじけた。

ほんのせつな。

花びらが舞って。

光があふれて。

薄れて。

昼が去って、夜が来た。

「ねえちゃん！」

ぐらりと傾いだ桜巳の身体を、少年が手を伸ばして支えようとす

る。

「桜巳……」

神は去っていったのだと、漠然と理解した。

古来より神が宿るとされる髪を落とされ。

清められた大地の 氣 を遮断され。

桜巳のちっぽけな器では、神を宿しきれなくなったのだろう。

あれほどまぶしかった光が過ぎれば。

また何事もなかったかのような夜が満ち満ちる。

倒れこむ、桜巳を抱き留めたいと思った。けれど、足が地面に張り付いたように動けない。

あれは、ほんとうに桜巳なのだろうか。

そんな疑問が沸き起こる。

神が去って、きちんと桜巳に戻ったのだろうか。氣が触れることもなく。

「千早、どうした？」

倒れこむ桜巳の姿を遠くみつめる。

息をつめていると、氷流がいつのまにか傍らにあった。

「氷流……？」

「なぜそんな顔をしている？ おれはおまえの望みを叶えたと思うのだがな」

静かな声音が耳を打つ。

桜巳の身体を抱きしめて、泣きじゃくっている少年の姿が目映った。

桜巳は、無事なのだろうか。

確かめに、いかなくては。

ばきん。と、澄んだ音がしたのは、ちょうどその時だった。

13（後書き）

最近書いてて思うこと。

主人公がまったく活躍しません……

でも、今更なのでがんばります。

次、一応最終章の予定です。

「ヒマねえ」

誰か来るかと思って構えていたのだが、そこはあまりにも平和だった。

淡い桜色の珠を眺めながら、六花はふああとあくびをひとつする。

「……あら？」

ぱきん、と澄んだ音が鳴る。

あくびをおさめて、六花は桜珠を覗き込んだ。

「う~~~~~」

ごろごろと床の上を転がり、千早は無意味なうなり声を発した。

「どうした、千早」

部屋の隅でばらと草紙をめくっていた氷流が怪訝な視線を向けてくる。

桜ヶ淵の里の、あまりに平和な昼下がり。

輝の神の、突然の降臨から、すでに三日ばかりが経過していた。

「なんていうのかなあ。なんていうのかなあ!!」

仰向けに寝転んだまま、頭頂部で床をぐりぐりと攻撃し。というよりも自分から痛みを伴った被害を被り。千早はまた低く獣のように唸った。

「なんていうのか、こう！ すつきりしないのよ、わかる?！」

氷流は草紙をめくる手を休め。

眉根を寄せて、ほんの少しばかり考えるそぶりを見せた。

「残念ながら、理解しかねるな」

そうして、あっさりとそんな答えを投げつけてくる。

ここでもう少し考えてくれれば、いらいらも少しマシになっただろうに……とは思っても。

人間ですらないあやかしに、そんなことを期待しても無意味だろう。

「ばかあ！」

ぐるると低く威嚇でもしたい気分だ。

八つ当たりなのはわかってはいるが、八つ当たりでもしないことはやっていけない気分では確かにある。

「なぜ、ばかなのだ。おれはおまえの望みをかなえたはずだぞ？」

確かに、氷流は約束を守って、桜巳を助けてくれた。

あの神降ろしの日から、気を失ったまま意識が戻らないが、氷流によれば、初めて神を降ろした巫女にはありがちなことで、その場で狂わなかったのだから、恐らく大丈夫だろうということだった。

それはいい。

それはいいのだ。

そのことは心底嬉しいと思うし、感謝している。

「ちがうのよー」

ただ、問題はそこではない。

むくり、と身をおこした千早は、溜息混じりに窓から見える里の風景へと視線をおくった。

「那智さまもあきらめて帰って下さったし。里にかけていた呪も解いていただいたけど」

千早にはよくわからないことだったが。

那智の話の総合すれば。

輝の神をこの世に降ろしてしまうと、輝の神殿で教えていることとは間逆になるが、世界が滅びてしまう可能性があるらしい。闇の女神は、滅びないようになにかを封じて眠りにについているらしいのだが、その眠りを守るさらなる封印を守るのが、女神の眷属——つまりは、氷流たちあやかしの主であるという。

今回の一件で、夜斗が、そのうちの封印を担う眷族のひとりだとわかったために。

那智は桜ヶ淵攻略を、風視さんに免じて、あきらめた、らしい。

「うっっ居心地がわるいー」

せっかく那智がめずらしく協力的に、里の封印を解いてくれたと言うのに。

それもありがたいことだとわかっていているけれど。

千早はそう唸りまくらずにはいらなかった。

つまりどういふことかと言えば。

2年前の、桜ヶ淵。

夜斗が封じられたその直後と同じ状況が再現されているのだ。

何事もなく、だれも2年前の件を覚えていなかった先ごろまでは、言っではなんだが、恐れられもせず、敬遠もされず、居心地がよかった。けれど、呪がとかれ、2年前の一件を里人が思い出せば、もとの空気が蔓延するのは仕方がないことと、言えるのかもしれない。なかった。

言えるのかもしれないが。

納得して受け入れられるかと問われれば、それはまた、別問題なのである。

ふむ、とこちらの様子を眺めていた氷流は、千早のよりもよほど赤いくちびるに、ほんのりと微笑を添えて見せた。

「まあ、いずれ改善されようさ」

呑気というか、なんというか。

のんびりとしたその言葉に、千早はまた唸りながら溜息をひとつ、ついたのであった。

1（後書き）

エピソード的にすっぱり終わってもよかったのですが。

蛇足的に、いろいろ書いてみたかったので最終章にしてみました。

……というよりも。拾い切れなかった伏線が…… > <

一応10話程度を予定しています。

もう少しお付き合いいただければ幸いです。

「ねえ」

頭で床を攻撃するのを、ひとまず中止して、千早は氷流の膝先に顔をのせた。

「私さ、そろそろ芽津に帰らないとまずい、よねえ？」

一応。名目上。

千早は白連塾から派遣されて、風視とともに封じられたあやかしの様子を見に来たことになっている。だが風視と那智は、輝の神が降臨するという異常事態がいったん落ち着いたあと、共に桜ヶ淵を後にしていた。そしてそのまま、おそらくは芽津に向かっているはずだ。

と。なると。

いまだ目覚めない桜巳や、大地が浄化されたにも関わらず封印の解けない夜斗。

気になることは、山ほどあるが。

千早だけがいつまでも、ぐずぐずと桜ヶ淵に残っているわけにはいかなかった。

「そうなのか？」

「そうでしょ？だって、私お仕事できてるんだよ？サボってるわけには行かないでしょ？」

千早がそう言葉をかぶせれば、氷流はわずかの思案のあと、そうか、とだけ呟いた。

「おれは人間の風習はよくわからんな」

草紙をパタンと閉じて氷流は立ち上がる。

千早はそんな氷流をただぼんやりとみつめた。

「氷流？」

「あの娘の様子を見に行くか。そろそろ目覚めるころだろう」

「うん……」

氷流はいきなりどうしたというのだろうか？

けれど、どうせここにも暇なのだ。千早はよっこらせと小さな掛け声と共に起き上がって、氷流の後を追った。

長い、長い夢を見ていたと思う。

『……桜巳』

少しつめたい、鱗に覆われた優しい指先。
銀の鱗をもつ、うつくしい人に恋をした。

『私とくるか、桜巳？』

桜が舞い散る、静かな夜。銀の光が降り注ぐその下で、ずっと一緒にいることを約束した。

それが、おかしくなったのはいつだったろう。

優しい優しいあのひとが、青い顔で黙り込むことが多くなった。
震える手を押さえる日が時折あった。

『桜巳、そなたの友人に、影狩師がいるといっていたね？ 一度あつてみたいものだ』

そんなことを折に触れて言い出したのは。

いったいいつ頃だったろうか。

『でも、夜斗さま……彼女は親友だけど、影狩師だわ。もし……もし、千早が夜斗さまを狩ろうとしたら……』

たったひとりの親友、千早。

昔、同じ里に住んでいて、よく一緒に遊んだ幼馴染。

自分が桜ヶ淵へ、千早は芽津へ、住む場所を替えてから。昔ほどは会えなくなっただけれど、それでもだいじな友達だった。

彼女の痛みは自分の痛みのように思えたし。

たぶんきつと、千早だって一緒だった。

だけど、あのひとを千早は狩るかもしれない。

あのひとはあやかしで。千早は影狩師だから。

もし、大事なあのふたりが争うことになったら、どうすればいいのだろう。

わからないまま、決められないまま。時間はどんどん流れていった。

『桜巳、そなたの大事な友人ならば、私にとっても大事な友人になれるだろう』

影狩師の、千早。

紹介したいけれど、紹介するにはおそろしい、あのひとの天敵。私の親友。

けれど、あのひとはどんどん青い顔でいる時間が長くなって。

それにつれて、千早に会いたいと言いつ出す機会が増えていった。

千早は、あやかしを狩る影狩師だから。私よりも、あやかしに詳しいかもしれない。

最近とくに調子が悪そうな、あのひとを。

もしかしたら、助けてくれるかもしれない。

紹介するのは、怖いけれど。

とてもとてもこわかったけれど。

あのひとがどんどん辛そうになっていくのを、それ以上何もせずには見ていられなかった。

『千早。あなたにとっても紹介したい人がいるのよ、だから一度こちらに遊びに来ない？』

たったそれだけの内容しか書いていない文を、三日かかって書き上げた。

2（後書き）

更新、間があいてしまつて申し訳ありませんでした。

千早は、手紙が着いてから、ほどなくやってきた。

あやかしかけど、優しい人なのだと。

とてもとても大切な人なのだと。

ときどきしながら打ち明ければ。

千早は。びっくりしたような表情をしていたけれど。

でも、わらっておめでとうと言ってくれた。

それだけで。とてもとても疲れてしまつて。

あのひとが最近おかしいことまでは、相談することができなかった。

何が起つたのかは、よく覚えていない。

銀色の月の光だけが冴え冴えと降っていた。

ひどい静けさが満ち溢れ、澄みわたった湖面のように夜が凪いでいた。

『絶対に来ないで！来ちゃダメだからね！』

突然姿をけしたあのひとと、それだけを言い置いて走って行った千早。

なにがあつたのかはわからない。なにも知らない。

次の日。

血まみれの千早は、傷ひとつないまま。

無傷のあのひとは、氷に閉じ込められて。

朝を迎えた。

千早が、うらぎって、あのひとを封じたのだろうか？

やさしいけれども、とても強いあのひとを？

千早は違うといったけれど。

誰もが千早のせいだといった。

違うといったけれど。

溶けない氷に閉じ込められたあのひとを見ていれば、心がひどく痛んだ。

もっとはやくに、千早に相談していれば。

こんなことにはならなかったのだろうか。

千早に相談しないでいれば。

こんなことにはならなかったのだろうか。

考えてもしようがないことを、ぐるぐると考えているうちに。

千早は姿を消し。

あのひとがながい眠りについてから、ぼんやりと時間だけが過ぎ
ていった。

『桜巳』

優しい手が、額に触れる。

やさしいやさしい、銀の鱗を持つ、あのひとの繊細な指先。

『桜巳……？』

わかっている。

ほんとうは、千早は悪くないのだと。

『私と、来るのだろう？』

問う声に、無言のままうなずいた。

桜巳のねむる部屋に向かう途中の廊下で、千早は向こうからすい

い勢いでかけてくる少年をみつめた。氷流がいうには、夜斗の眷属の少年らしい。

「あ、鬼哭さま！」

どうも千早には心を開いてくれないのだが、なぜだか氷流には心酔しているようである。

少年は千早のうしろを歩いてくる氷流をみつけて、大きな声を上げた。

「ねえちゃんが……！」

「夢から醒めたか？」

「たぶん、もうすぐ……」

そうか、と肯いた氷流は、千早のほうへゆつくりと視線をよこした。

「会ってくるといい。おれは桜ヶ淵のほうにいる」

「うん」

一緒に来るのかと思ったら、氷流については来ないらしい。

ためらいがちに顎を引けば、なぜかふわりと笑みを浮かべられた。「だいじょうぶだ。あの娘がおちついたら、共に来るといい。まっている」

不安そうな表情でもしていたのだろうか。

千早をはじめだそうという気配を見せはするものの、桜巳の家にはよってこなかったから、なんととはなしに四六時中一緒にいる日が続いていた。そんな日があるうちに、なんとなく一緒にいるのが当たり前になっっているような感覚があるのは否めない。

まあ、そんな理由がなくても。

氷流のそばにいるのは、なんとなく。なんとなくだけど、落ち着くような気はするのだけど。

さっていく氷流のその背を眺めながら、千早はそつと息を吐いて、桜巳に会いにいく気力を固めた。

「桜巳……」

薄い布団に身を横たえたまま、桜巳は白い顔で眠っていた。
綺麗で優しい顔立ち。

自分のような荒事とは無縁の、しろくてつややかな頬。
その頬を、つつつと透明なしずくが伝った。

「桜巳？」

「……ごめんね、ちはや」

ほんのわずかにくちびるがうごく。

「ごめんね、桜巳」

意識はまだ戻ってはいないのだろうか。

ちいさく謝り返して、千早はゆっくりと息を吐く。

「2年前のこと、本当にゴメン。ちゃんと、夜斗さんのこと、助けられると思ったんだ」

助けようと思った。

ちゃんとできると思った。

普通の人よりは、あやかしに詳しかったし。

くるったあやかしを、仲間と協力して斃したことだってあるし。

でも、よく考えてみれば。

助けたことは、なかったのだ。

「あと、桜巳づらかったのに。2年もほったらかしてて、ごめんね」
つぶやくように、胸につかえていた言葉をようやくと吐き出して。
桜巳の白い手を取って、額に当てた。

少しひんやりとした、その感触。繊細で、細くて頼りなくて。

そういえば、いつの間にか、夜斗の眷属だというあの少年がいな
い。気を利かせて出て行ったのだろうか。

そんな気を、使うようなことは何もないのに。

そう思うと、少しおかしくて。

千早は、桜巳の手を離して、立ち上がろうとした。

少年は。ずっと桜巳の看病をしていたのだし。目がもうじき醒めるといふのなら、その時に立ち会いたいだろうと思ったのだ。

けれど、千早の思惑ははずれてしまった。

離そうとした手が、きゅっと意志を持って掴んでくる。

驚いて桜巳に視線をやれば、なめらかな瞼を持ち上げて。桜巳がこちらをみつめていた。

「おう、み……？」

「きて、くれたの？ わたし、ひどいこといったのに」
ぎゅう、とこめられる力が、かなしくて。せつなくて。

千早は軽く唇をかんた。

「うつん。夜斗さんを助けるつもりが助けられなかったのは、本当だもん」

「……千早じゃ、ないんだよね。あのひとを氷に閉じ込めたのは」
うつん、と肯けば。

桜巳は、ほうつと息をつく。

「千早がいなくなってから、たくさん影狩師がやってきたの。夜斗さまを殺そうとして」

遠くをみつめる、瞳がせつない翳りを帯びていた。

「私は、止めたくて。でも、止められなくて。どうしようもなくて

……」

「うつん」

「でもね、だれも夜斗さまを傷つけられなかった。夜斗さまを閉じ込めた氷は、夜斗さまをちゃんと守ってくれていたの。千早が、守ってくれてるんだと思った」

「……呪をかけたのは、私じゃないんだよ？」

そつと口を挟めば、桜巳の双眸がかすかに和んだ。

「わかってるわ。最後にやってきた影狩師が言っていたもの。この呪は名のあるあやかしがどこしたものだって」

桜巳がほんのりと笑みを浮かべながら、言葉を紡ぐ。

「那智さま、とおっしゃっていたわ。桜ヶ淵のあやかしは、仲間によつてまもられたのだと、忌々しげにおっしゃっておられた。そうして、私に、忘却の術をおかけになったのよ。たぶん。他の里のひとたちにも」

ひといきにしゃべった桜巳は、つかれたように深く息をついた。

「夜斗さまが、封じられて。つらかったの。那智さまが、夜斗さまを好きだった記憶を消してくださって。とてもとても、楽だったの。時々感じた違和感も、なかったことにしてしまえるくらい」

「……しょうがないよ」

ぼつり、と千早は言った。

「桜巳、夜斗さんが好きだったんだもの。大好きな人がいなくなるのは、とても哀しいことだよ」

死んではないない。

いつか、甦るかもしれない。

でも、それはいつ？

あした？それとも、あさって？10年後？

期限を区切ることなく。まつことはとてもつらいことだ。

甦らないかもしれない、その恐怖と。

いまにも疲れてしまいそうになる、自分の心がなお怖い。

桜巳は、すこし。かなしそうな表情をした。

「ありがとう、ちはや」

目を伏せて、つぶやく。

「もうすこし、ねむっていい？」

うん、と千早はうなずいた。

いまなら、夜斗さまの夢を、見れそうな気がするの。

くちびるだけでそうつけて、桜巳はそっとまぶたをとじた。

「ひとのいいお前のことだから。恨んだりはせんのだろっな」

夕暮れの、鬱金のひかりがひそやかに沈んでいる。

氷流はまだ氷の中で眠り続ける桜ヶ淵にむかって、苦笑混じりにつぶやいた。

三日前に見た時よりも。

氷に入った亀裂は少しばかり大きくなっている。

輝の神の降臨により、2年前に那智によって歪められた大地の気は強制的に清められていた。今、桜ヶ淵が目覚めたとしても、大地の気のゆがみによって狂うことはもうないだろう。

ということは、輝の神の降臨も、結果的には無駄ではなかったと言うことが。

2年前の桜ヶ淵の暴走も那智の仕業なら、今回の神の降臨も那智の仕業である。

つまらなさそうな顔つきで胸のうちをみせてはいなかったが、内心ははらわたが煮えくり返るほど悔しがつているかもしれない。桜ヶ淵は、那智のせいで早く救われたようなものなのだから。

「まあ、今回はいい暇つぶしになった。千早のような面白い娘も見出せたしな。早く目覚めろ、桜ヶ淵。紹介してやらんでもないぞ？」

あやかしを助けようとして、自分が死にかけていた影狩師。体があやかしへと変化しかかっていると知っても。

案じるのは、ただ己の友と、桜ヶ淵の幸福のみ。

その場に腰を下ろし、氷流はふと中空に目をやった。

淡い紫に染まりかけた空に、細い細い三日月がかかっている。

輝の神が残した名残のような、桜の花がわずかにのこり、時折風に花びらを散らす。

ゆっくりと満ちていく静寂に、降る月の光は冴え冴えと輝いて。まるで、あの日の再現のように。

「那智ー」

牙獣の手綱をつまき操りながら、風視はずんずん先に馬を進める
那智の名を呼んだ。

「おーい、那智ー」

まったくもって、つれない。

同僚なのに、なんでこんなにつれないんだろう。

そりやあまあ。自分と那智の理想とするところは天と地ほども違
うし。自分が那智を油断できないやつだと認識しているように、那
智だって自分の事を嫌ってはいるだろうけども。

でもそれでも。

たとえきらいでも、顔見知りであつて。

ついでに同じ職場で働いているのならば。

さらについて、行き先が同じであるならば。

馬を並べるくらいのことはしてもいいと思うのだ。

「那智、ちよつとくらい待ってくれてもいいじゃないか。多岐くん
が泣きそうな顔をしているよ」

先ほどから存在を激しく忘れられてはいたが、多岐もたしかにそ
の場にいた。

桜ヶ淵の里人から買い受けた馬にのつて、風視たちと同行し、芽
津への帰途についているのだが。

多岐の乗っている馬がついていけなくなるくらいにへばっている
にもかかわらず、どんどん速度を上げる自分たちにいささか泣き出
しそうになっていた。

甘えるな、と一喝してもいいところだが。

一般的な速度を軽く越える強行軍の原因が、自分と那智の、とい
うか。

ほぼ那智の一方的な意地の張り合いの結果となれば。
むやみやたらに一喝するのも、確かに少しかわいそうな気はした

のである。

「ほらほら、ほっていったらかわいそうだろう？」

多岐をだしにそう声をかけると、多岐はあからさまにほつとしたような顔つきになり、那智は憮然としつつも馬の速度を緩めた。

「あの」

ようやくと3人の距離が話が出来るくらいに縮まると、多岐は、遠慮がちにそう言葉を切り出した。

「お聞きしたいんですけど。お二人は敵同士になるんですか？」

遠慮がちに、というわりに。

聞きたいことに遠慮がない。

単刀直入すぎるとわずかながらに苦笑がもれた。

「敵、というわけではない。ただ、人が幸福に生きていける世をもたらすという、その最終的な目標のために用いる手段と考え方が違うだけだ」

多岐の問いに応えたのは那智だった。

そしてそのままの速度で、くつわを並べてぼくりぼくりと道を行く。

多岐は、そのまま無言でなにやら難しい顔つきで悩んでいるようだった。

「えっと。千早は、どうするんですか？」

「どうするとは？」

「千早は……その。今のまま白連塾にいれるのでしょうか？」

まだ完全ではないとはいえ、あやかしとなった千早。

あやかしを憎む、那智。

今はまだ、古種族を狩るための組織たる、白連塾。

多岐の悩みはわからないでもない。

もっとも、多岐の懸念は。千早があやかしであることを、那智が知っているというその一点に尽きるのだろうが。

風視だつて、あやかしのだ。

その自分が、白連塾にふつうに籍をおいている状態で、千早がはじかれると思うはずもない。

「不本意ながら。あの娘を放り出すと鬼哭のあやかしの恨みを受けらしいからの」

表情ひとつ変えず、那智はそう応えた。

白連塾がなくなるのは、やはり少しは困るらしい。

多岐の表情が安心したように晴れやかになった。

この少年は、なぜだかひたすらに千早のことを心配しているようだったから、いくつかの心配事が今の那智の回答で消えたのだろう。それにしても、那智も素直ではない。

もっとわかりやすく歩み寄りを言葉にしてやればいいものを。

思わずそんなことを口走りそうになったが、へたにからかえば、また頑なになるのは目に見えている。

「多岐」

「那智さま？」

唐突に名を呼ばれた多岐がきょとんと目をしばたく。

那智は、すこしばかりまぶしそうに目を眇めたがすぐに思い直したようにかぶりを振った。

「わしは別に、そこな邪言使いのように、あやかしと癒着することをよしとしているわけではない。よしみを通じることになれば、次は容赦せんぞ。心しておくがいい」

低く、険しい口調。

聞いていた風視は思わず口元を緩めかけたが、とりあえずはそ知らぬ顔を通しておくことに決めた。

ぱき。ぱきん。

桜色の宝珠から、かけらが次々とこぼれていく。

こぼれて、風化し。たまる影に溶けていく。

だんだんと欠けていく速度は増し、宝珠はどんどん小さくなっていく。

最後のひとかけらが、ついに塵になったのを見届けて、六花はゆるりとその場から立ち上がった。

「任務終了、といったところかしら」

肩にかかった髪を払い、意識して唇で弧を描く。

「ご協力を、感謝いたしましたよ、御使いどの」

くすり、とほんとうにかすかに鼻先で笑ったような声が聞こえた。けれどそれ以上は何もなく。

床に落ちた闇の気配がほんの少し、薄くなったような気がしただけだった。

おそらく、桜ヶ淵の主の封印もきちんと解かれたころだろう。

こちらの宝珠が自ら崩壊したあととなっては、もうここを見張る必要も護る必要もない。

かえろう。

主ももうすぐ帰るであらう、鬼哭の山に。

さいごに、ぱちんと指を鳴らして炎を召喚すると、悪趣味な呪のあととはたちまちに灰と化した。

できればえに満足した六花は、もう一度にこりと笑むと、ゆっくりその場を後にした。

「桜巳、ちょっと行きたいところがあるの」

千早が、目を覚ました桜巳にそう声をかけたのは。

日もすっかり暮れてからのことだった。

夕焼けの名残も、山の果てに消えうせて、その後を慕うように細い銀の月も沈もうとしている。

「いきたいところ？」

「……私さ、実は死に掛けちゃって」

軽い調子でそういうと、桜巳は驚いたように目を見張った。

「あ、最近じゃないのよ？ 2年前、夜斗さん助けようと思って、失敗しちゃってさ」

そういうと、桜巳は少しばかり納得したような表情をみせた。

「あの、夜斗さまがふうじられて、気を失ったあなたが見つかったときかしら。そのまま数日意識が戻らなかった？」

「そう、あのとき」

「血まみれの衣を着ていたものね。でも、特に怪我はしていなかったと思うけど」

記憶をたどる様子の桜巳に、千早は少しばかり苦笑して見せた。

「治してもらったのだと思うんだ。あんまり覚えてないんだけどね」
数日寝ていた桜巳は、多少体力が落ちているようで、立ち上がると少しふらついた。

もともと神を降ろすなんて離れ業をやったのけた直後のことでもあるので、もしかしたら後遺症らしきものなのかもしれない。

「大丈夫？ そう遠くないんだけど……」

「だいじょうぶよ。別に歩けないほどでもないもの」

衣を手際よく替えながら、桜巳はにこりと笑った。

「そのときにさ、助けてくれたひとがいるんだけどさ」

桜巳は打ち明ける時、もっとドキドキしただろうか？

きつとしたらう。

だって、相手は影狩師であるこの自分だったのだから。

あやかしを恋人にした桜巳に、このことを打ち明けるのとはわけが違う。

そう思っても、言葉を口にするのは、やはり少しためらわれた。

言いよどんでいると、桜巳が不思議そうに目で促してくる。

「その。なんていうのか、ひとつていうか。あやかし、なんだけど」

「あやかし？ 那智さまがおっしゃっていた、夜斗さまを封じたあやかしのこと？」

「そう。鬼哭岳つてところの主なんだけどさ。夜斗さんのともだちみたいでさ」

うん、とだけ、桜巳はうなずいた。

「私が死にかけてるところを、助けてくれたの。へんな影狩師だな、みたいなことってさ」

思い出す、2年前。

だが、千早に言わせて見れば、へんなのは氷流のほうだ。

影狩師を救うあやかし。

六花に聞くところによれば、人間をたすけるあやかしというのはたまにいらっしゃるが、唯一の敵対勢力を助けるあやかしというのは珍しさに違いない。

「んで、そのときに。助けるためなのか、助けるの失敗しちゃったかはわからないんだけど。あやかしに、なっちゃって」

なるべく、さらりと流してみた。

なんでもないことのように、言ってみたのだが。

桜巳はただ無言で瞬いた。

「まだ、不完全みたいなんだけどさ」

「あやかし？」

「うん、そう……」

「影狩師なのに、あやかしの？」

うん、と顎を引くと、桜巳はちよつとわらった。

「それはまた、千早。珍妙なものになったのね」

「でも、影狩師なのにあやかしと仲良しなひととも知り合ったから、だいじょうぶ、だと思う」

話が少しばかりかみ合っていないような気がしたが、あえて気にしないことにした。

「それはよかったわね」

言葉を切った桜巳は思案顔のまま、少し首を傾けた。

「あやかしに助けられて、あやかしになっちゃったのよね？」

「うん、そう」

あれ、なんだか話が戻ってしまった。

けれど桜巳は何かを考えるそぶりだ。

自分の思考をまとめるために、あえて話を繰り返しているように見えた。

「そのあやかしは、主なのよね？」

「うん、そう」

「そうなの……」

頬に手を添えて、桜巳は眉間に皺を寄せる。

「そのあやかしから、何か聞いたことはある？」

「なにつて、なに？」

「聞いていないの？ どうしてかしら」

「……なんのはなし？」

問いを重ねれば、今度は困ったような表情になる。

着替えて、脱いだ衣を丁寧に、どこか手持ち無沙汰にたたみなおしながら、桜巳は軽く唇をかんだ。

「私、夜斗さまから似たような話をきいたことがあるわ」

「似たような、話？」

「あやかしが、人間をあやかしにしてしまう話よ」

呟くように答えた桜巳は、そこまで話してもまだ、ためらっている様子だった。

「どういうこと？」

首を傾げれば、桜巳は頬に手を当てたまま、ゆっくりと息を吐き出した。

「あやかしは……おのれの連れ合いに、心の響きあうものを選ぶのよ」

「えっと……？」

静かに静かに、告げられたその言葉。

薄くあいた窓から、ひっそりと夜が忍び込んでくる気がした。

「この世にある生き物は、大体同種族から、自分の連れ合いを選ぶものでしょ？ 人間なら、人間と。猫なら猫、犬なら犬。古種族だって、それは変わらない。でも、唯一の例外といえるのが、あやかし」

桜巳は呟くようにそう言って、腹の辺りで手を組んだ。

「私と一緒に生きてくれるかって、夜斗さまは私に聞いてくださった。あやかしになって、長い長い時間を一緒に過ごす気はあるかって。——あやかしは、同種族以外からでも連れ合いを選ぶのだですよ。たとえば、人間を。古種族の違う種族を、あやかしに変えてしまう 力 を持っているから」

ささやくように言いきって、桜巳は窺うようにこちらをみつめた。

「けれど、連れ合いに選ばない存在を、あやかしはあやかしに変えたりはしない。つまり千早があやかしだってことは、鬼哭のあやかしに、連れ合いとして認められたってことよ」

連れ合いって、なんだっけ？

聞いていないの、と桜巳が目で問ってくる。

だが、答えるよりもまず先に。

思考が混沌として、答えを導き出せそうになかった。

「えっと。桜巳はあやかしの？」

ぼんやりと、思考が桜巳の言葉をたどる。

ゆっくりゆっくり言葉をたどり、千早はようやくそれだけを聞いた。

「違うわ。答える前に、夜斗さまは狂ってしまわれたのだもの」

桜巳の瞳は相変わらず哀しげだったが。

それでも、2年前のような切羽詰った悲しさは随分とやわらげられているように思った。

よかった。

少しは、心の傷が癒されて。

それだけの感想を得て、思考は再び迷走する。

あやかし。

他種族から選ぶことが出来る。

連れ合い。

あやかしに変える。

単語だけがつらつらと、繰り返し繰り返し。脳裏で舞っている。

——おまえの望みを叶えてやろう。

連れ合いって、なんだっけ。

氷流はただそういつて、助けてくれたただけだ。

夜斗を助けようとした。その礼として。

あとはたぶん、退屈だったから。

そのほかには何の意味もなくて。

——そのかわり。おまえはおれの望むものをよこせ。

望むものって、なんだろう？

自分が氷流にあげられるものなんて、何ももっていないと思うけれど。

たぶん、きっと。

自分と氷流の関係は特殊で。

暇つぶしとお礼と。きつとただそれだけなのだ。

「私と氷流は、たぶん連れ合いとか、そんなんじゃないんだよ」

あやかしはおもっていたよりも、律儀で。

お礼が出来ないから、生きているといわれただけで、その手段として、あやかにされてしまっただけで。

なんとはなしの答えを見つけて、思考は再びまわりだす。

そう告げると、桜巳は困ったような表情で、少しばかりまた首を傾げただけだった。

「あのね、桜巳。氷流が桜巳を連れて来いって言ったの。だから、一緒に行こうよ」

どこに、と桜巳は聞かなかった。

ただわずかに顎を引いて、同意を示しただけだ。

桜巳の体調を気遣いながら、手を貸しつつ、家を出る。里を出て、桜ヶ淵のほうへ。

いつからいたのか、桜ヶ淵の眷属らしき少年も、あとからそっとついてくる。

ゆっくりと、ゆっくりと。

歩を進めて。

2年前の、あのすべての始まりの場所へ。

「氷流」

桜ヶ淵の、氷塊の前で。

氷流はただたたずんでいた。

声をかければ、半身をこちらにむけて、視線をよこす。

「きたのか」

「うん。おまたせ」

小さく笑って、千早は頷いた。

後ろからついてきた桜巳も、氷流の姿を認めると、遠慮がちに頭を下げる。

静かな、夜。

みちる静寂。

2年前のあの日のように、桜は咲いていないけど。

氷流はたしかに、桜巳をみつめたし。

桜巳もたしかに氷流をみつめ返したと思う。

けれど。二人の間に言葉はなくて。

「千早」

ひんやりとした氷流の声が、名を呼ぶ。

腕に触れて、引き寄せられる。

桜巳はただこちらをみつめていた。

「どしたの？」

「こちらにいたほうがいい」

なぜ、という問いを口にする暇さえ、なかった。

氷塊に向かつて、氷流が右手を差し出し。左から右に向かつて、ゆっくりと空間を薙ぐ。

ぱりん。と。

輝無の神が還った直後に聞いたような。

透明な硝子が割れるような音が聞こえた。

ぱりん。ぱきん。

銀色の月の光が降り注ぐ、静寂の中に、檻が壊れていく音だけが響いて。

氷流の横にたって、千早は氷塊をみつめ。桜巳をみつめた。

夜斗が封じられた氷に、いくつも走る亀裂。

欠け落ちる破片は月の光と闇の溶け。さいごには、はじけてとんだ。

きらきらと月の光を反射する欠片の中で、夜斗の滑らかなまぶたがゆっくりと世界を映す。

そして、桜巳を。

「やと、さま」

つぶやくように、こぼれた。桜巳のころ。

きっと夜斗と同じように、桜巳のころも氷に閉じ込められて。

「桜巳」

2年の時間を経て、ようやくと、動き出したこの時間の時間。きつとたぶん。ふたりには。言葉さえも必要なくて。

駆けよって飛びついた桜巳を、夜斗がしっかりと抱きとめるのを見た。

桜巳の短くなった髪の毛が、夜の中にさらりと揺れる。
夜斗の銀の鱗に覆われた腕に力がこもる。

千早はふとくちびるを緩めて、一步後ろに下がった。

お邪魔虫は、絶対的に退散した方がいいに決まっているのだ。
横にいた、氷流に肩が触れる。

交わした視線に、自分と同じ思いを確かに見つけたと思った。

おまけのおまけ。

夜斗はふたたび桜ヶ淵の主の座に戻ったらしい。

桜巳は神を降ろした後遺症として、少し憑依体質が強くなってしまったらしいが、夜斗がいれば特に問題はないだろうし、なにより笑顔にかげりがなくなったのが、友達としては一番嬉しい。

桜珠は桜ヶ淵の特産品として、里をまた潤すようになるだろうし、さらに気がつけば、芽津に溢れていた桜珠らしきものは、すっかり姿を消していたのだから、一連の騒ぎは一応の収束を見たといってもよいのだろう。

「ん〜」

芽津の都の入り口で、氷流と別れたのは7日ばかり前のことだ。そのまま氷流は鬼哭の山へと還っていった、と思う。

いつぞやの団子屋で団子を頬張りながら、人波を眺めつつ、千早は低く低く唸った。

「なんだよ？」

不審げなまなざしを向けてくる多岐のことは、頭から無視をする。この不可解な気持ちを多岐に相談してみたところで、あほみたいな答が返ってくるであろうことは想像に難くない。それならば、ひとりであんぐん唸っていた方がまだいくらかマシというものだ。

——ねえ、なんで助けてくれたの？

別れ際に、ひとこと、そう問うた。

前に問うた時の言葉を、覚えていないわけではなかった。

面白いと思ったから。

礼の意味合いもある。

いくつかの理由があるといった氷流は、この前はその二つの理由を教えてくれた。

氷流は、問われて不思議そうな顔をした。

覚えていないのか。という表情であつたかもしれない。

——面白いって思ったのと、お礼と、それだけ？

——ふむ。他にも答が必要か？

千早の言葉に。氷流は面白がるような表情になった。

千早にしてみれば、ただ単純に、桜巳の言葉が気になったただけなのだが。

それを氷流になんと説明していいのかがわからない。

連れ合いの意味を、当人に聞くなんて恥ずかしすぎる。

気にしていると、知られるのもなんとなく居心地が悪かった。

——べつに……

気まずく目をそらせば、氷流は確かに少しばかり笑ったと思う。

——桜ヶ淵の巫女から何か聞いたのか？

からかうような、その口調。

——あやかしが 力 を分けるに、たいそうな理由はいらない。
問うべきものはただひとつ。

氷流のひんやりとした指が、髪をさらさらともてあそぶ。
首をすくめれば、それをみて氷流はさらに笑った。
そうして、耳元でささやくように言葉を継いだのだ。

——共に長き時を、歩みたいか否かということだけだ。

そのあと、千早はさらに問う術をもたなかった。

氷流はくすくす笑って去っていつてしまったし。千早は白連塾に
戻ってしまった。

ただ、白連塾にもどってしまったても、砂糖菓子やら、髪を飾る櫛
やらが時折届くので、縁が切れることはないようだ。なので、この
あいだ千早は衣を送り返してみた。

ともに、長い時間を。

白連塾にはまだまだいられそうだし、風視ともうまくやっていけ
そうだと思う。

長い時間が有るのなら、少しずつあやかしと人間の絡まってしま
った糸をほどこいていくのもいいかもしれない。そのうちに、氷流の
言葉の真意を知る日も来るかもしれないし。

とりあえずは気長に構えてみよう。

「千早ちゃん、多岐くん」

人波のむこうから、風視が例の物騒な獣を引きながらやってくる。

「遅いですよ、風視さん」

口を尖らせながら文句を言えば。

風視は頭の後ろをかきつつ、困ったように眉を下げた。

「ごめんね、那智に見つかりそうになつてさ」

「今度はどこ行くんですか？」

後ろから、多岐も口を挟んでくる。

そうだなあ、と風視は少しばかり遠い目をした。

「一度、家に帰ってみようかなと思うんだけど。君達も一緒に来るかい？」

「もちろんです」

皿に残っていた団子を、多岐と二人でぱくぱくと平らげると、千早は大急ぎで立ち上がった。

「さ、行きましょう！」

笑顔でそう告げれば、団子を喉に詰めつつ多岐も慌てて席を立つ。気になることいろいろあるけど、とりあえずは今日も一日平和らしい。

おまけのおまけ。(後書き)

とりあえず完結です！

長い間読んでくださってありがとうございました！

今、眠り男の英雄譚。というお話も書いておりまして、そちらがすみましたら、この続きも書けたらいいなあと思っております(結局書ききれなかった複線とか。千早と氷流のもうちよつとらぶらぶ話とか……)。

これからもお付き合いくださればとてもとても嬉しいです。

ある日の氷流（前書き）

本編を読んでいただいてありがとうございました！
ここから先は番外編になります。

番外編は、キャラのイメージが壊れてしまう可能性が多大にありますので、ご注意ください！

最初の二話は、web拍手の方に記載していたものをそのまま持ってきた形になります。

第二部を書き始めるまで、時々更新して行こうと思いますので、覗いていただけると嬉しいです。

ある日の氷流

「主さま、なにをなさつておいでなの？」

それはある日の夕暮れ。

鬼哭岳の館にも、じんわりと夜がやってくる。

夕餉を知らせに主の部屋を訪ねると。主は真剣な顔で手元を睨むようにみつめていた。

「六花か。よいところに来たな。少し聞きたいことがある」

自分の声に顔を上げた主は、彼にしては珍しく、ぱつと表情を輝かせたように思う。

「わたくしに、でございますか？」

驚いて問い返せば。主は大真面目な顔つきで頷いた。

「おまえはよく芽津にもいつておるのだろう？人間のことならおまえのほうが詳しいだろう」

「ですけど、わたくしでお役に立てますかしら？」

主の傍へとより、六花は主の手元を同じように覗きこむ。

果たして。

そこにあつたのは、綺麗な色紙に置かれた幾種類かの菓子——今都で流行の砂糖菓子である。

「千早に届けさせようと思うのだが、どれが一番喜ぶと思うか？」

「どれ、と申されましても」

どれも一緒だ！と叫ばなかった自分を六花は誉めてやりたい気分だった。

言葉を濁し、じつと並べられた砂糖菓子をみつめる。

赤いもの。白いもの。黄色いもの。緑のもの。

泣く子も黙る、鬼哭岳の主が砂糖菓子を前にうんうん唸っている姿の、なんと情けないことだろう。

これがまた、幾種類の髪飾りやら腕輪やら首飾りやらを眺めて悩んでいるのなら、まだ話もわかる。

しかし、だ。

砂糖菓子だ。砂糖菓子である！

何故に砂糖菓子！

……いや、おいしいからそれもいいかもしれないけれど。

たかだかお菓子ひとつで何故ここまで悩むのやら。

「主さま、失礼いたしますわ」

もれそうになった溜息を飲み込んで、六花はそつと手を伸ばして砂糖菓子を取り上げた。

次々と持ち上げて、すべてをひとつに混ぜてしまう。

「ああ！」

主の責めるような悲鳴が上がったが、そこはあえて無視でいいと思う。

「これでよろしいですわ、主さま。色とりどりでこんなに綺麗」

紙の上で混ぜられた砂糖菓子は、たしかに小さな花々のようだった。

「きつと千早さまもお喜びになりましたよ」

文句をとっておきの一言で封じてしまい。

六花はにっこりと微笑んで見せたのだった。

ある日の千早（前書き）

「ある日の氷流」の後日譚になります。
こちらもお礼話でいったん掲載済みです。

ある日の千早

「は……今、なんとおっしゃいましたか？」

主の想い人のお言葉をうつかり聞きまちがえて、天花はせわしなく瞬きを繰り返した。

あやかし、それも自分のような存在から言えば。

主や、その想い人の言葉なんてものは、神の言葉にすら匹敵すると思う。

その言葉を、聞き間違い、いや。聞き逃すなどあつてはならない失態だ。

もう結構な年数を鬼哭の主に仕えているが、いままでそんなことは一度もなかった。

「うん、だからね？」

先日、主さまから贈られた、色とりどりの砂糖菓子を眺めながら、彼女は静かにほほえんだ。

「こんなにかわいいお菓子をくれたから、氷流に何か御礼をしようと思うのよ」

「はい」

丁寧に繰り返された言葉に、天花はかしこまってうなずいた。

「だから、そのお礼の、相談にのってくれないかなあと思って。ほら、天花くんは、氷流に仕えてもう長いんでしょう？」

はい、とうなずきながら、天花は心を引き締めた。

先ほど聞き逃してしまった言葉は、この次に発せられるはずなのだ。

「氷流はさ、これとこれと、それからあつちと。どれが一番好きかなあ？」

指し示されるのは、呉服屋から届けられた見本の端切れだ。

彼女は、主の想い人といえど、そう高貴な生まれではない。ごくごく普通の一般民だ。

ゆえに、呉服屋とはあまり縁がないだろうと思っていたところが、実は、彼女の友人とも言える、多岐の親戚に呉服商がいたらしい……そう高貴な人間相手の商売をしている筋の人間が身内にいるような顔つきではないとは思っただが。まあ、人間、外見と中身は違うということなのだろう。

とにかく、そんなわけで。

コネとやらで、彼女は安く衣をあつらえてもらえるらしい。

主へのお返しというか、お礼も、ここで作ってしまおうと思ったようだ。

そこまでは、いい。

主はあまり着るものに頓着する方ではないが、彼女からの贈り物ならきつと喜ぶことだろう。

ただ問題なのは。

彼女が指し示した衣が、どれも女性向けの柄ばかりだったことだ。できあがりを簡易な絵であらわしたのも、どれも女性が描かれているように思う。

「あのう、この衣は、千早さまがお召しになられるのですよね？」

問いながら、天花は一人で合点した。

きつと。

千早さまは、主さまのもとへお礼に行かれる際に、お召しになる衣のことを相談したかったのだと。

そう、思ったのに。

「違うわよ？氷流に衣をあげようと思って。こないだのお仕事で、たくさん報酬をいただいたし。きつとキレイなのが作れると思うのよ！」

彼女はひどくキラキラと輝いてそう力説してくれたが、逆に天花は言葉をうしなった。

だって。これは。

「あの、千早さま。こちらのお召し物はすべて、女性の方向けだと私は思うのですが」

それでも氣力を振り絞ってその意見をすれば。

彼女はにっこりと笑ってうなずいてくれた。

「大丈夫よ。氷流は美人だから、何を着ても似合うと思うのはたして。」

それはそういう問題なのだろうか？

「だから、天花くん。一緒にどれがいいか選んでよ？」

けれど、天花にはそれ以上深く突っ込む氣力も余力もなかったのであつた。

そしてふたたび。ある日の氷流。

「六花。これはどういう意味だろうか？」

砂糖菓子事件も平穩無事に片がつき。

主のもとには、大切な大切な想い人からちゃんと礼状が届いた、その数日後のことだった。

主がひと？嫌いのため、無駄に広い館の手入れはもっぱら六花と天花で行っている。

その大掃除中だった六花は、頭にかぶっていた布を取り去り、簪を片手にしながら、疑問を投げてきた主の下へといささか面倒くさがりながらもきちんと参上した。

「主さま、いかがなさいました？」

そう声をかけてみれば、主は表情というものをそぎ落としたような顔つきで、ゆっくりとこちらに視線をくれた。

長年の付き合いだからこそわかるが。

これはひどく困惑している表情であると思う。

「主さま？」

「六花。千早からこれが送られてきたのだが」

相変わらず抑揚に欠ける冷たい声音で応じ、主はひらりと色鮮やかな布を広げて見せた。

うつくしい橙色の衣。黄色と橙色が入り混じって流れる、朝焼けの空の色のような鮮やかさ。

「千早はどういうつもりでこれを送ってきたのだろうか。砂糖菓子よりも、うつくしい衣が欲しかったということか？やはり、砂糖菓子では子供だましかったと怒っているのだろうか」
「そういうわけではないと存じますけれど」

主の困惑も、わからないではない。

橙色の鮮やかな衣は、丈こそ長いものの、立派に女物のつくりをしていた。

いかに己に無頓着な主とはいえ、さすがに女物が贈られてくれば困惑もしよう。

主も大概変な性格をしていると思っていたが、想い人もそれに負けず劣らずというわけだったということか。

「では、どうということだろうか」

当然の事ながら、自分は主の想い人当人ではない。

その思考などわかるはずもないが、砂糖菓子を届けにいった天花がげっそりとして帰って来たところを見れば、推測できなくもない。

「おそらく、でございますけれど。千早さまは主さまが美しいと日頃からおっしゃっておいですから、無粋な男物など似合わぬとでもお思いになられたのではございませんかしら」

「……おれの衣の選び方が無粋だということか……？」

「いえ、そうではなく……あ、主さまっ?!」

日頃表情をかえることすら稀な主の動きは、このときに限りすばやかった。

呼び止める暇さえもなく。

廊下の彼方へその後姿が消えていく。

その手には、思い人から贈られた橙色の艶やかな衣――

この日を境に主のまとう衣は変わった。

ぴたりとした黒い衣の上に軽く羽織ったあでやかな女物の衣。確かに似合っていると思うのだが、解かれなかった誤解の果ての姿だと思えば、なんだかいたたまれない気がするのである。

多岐くんの異変。

「風視さん、大変なの！」

多岐がおかしくなってしまうってから、三日ほどが経過していた。那智を苦手としているためか、ほとんど白連塾によりつかない風視から「今、芽津にきている」という手紙を受け取った千早は、とりあえず取るものもとりあえず待ち合わせ場所へと駆けつけた。

遅めの昼ごはんとして、熱いかけ蕎麦をすすっていた風視は、その勢いに少なからず驚いたようだ。

「どうしたの？」

むせかけたのを、無理やりに飲み込んだのか。

熱かったのか、目を白黒させた後、風視はようやくとそれだけを問うてきた。

「多岐がおかしいの」

「おかしいって？」

風視は掛け蕎麦の器を置くと、不思議そうにこちらをみつめた。その足元では、例の物騒な獣がだるそうに寝そべっている。

「ずっと物思いにふけてぼやーっとしてるし、話しかけても上の空だし……いきなり顔を赤くしたりするし、任務中もへまばかりするし！」

風視が気を利かせて注文してくれた、甘い果物の盛り合わせに手をつけながら、千早はぼやいた。

獣はふわあと大あくびをし、風視は複雑な顔つきで黙り込んだ。
「なんか浮かれてる時もあれば、突然意味不明に落ち込んだりもするし。わけがわかんない」

果物は甘くておいしいのだろうが、多岐のことを思えば、ろくに味もないし気も晴れない。

結局一口かじって、器を置き。

千早は深く息をついた。

「もしかして、この前の任務中に怪我したときにさ。実は頭を強く打ったとか、実は倒した古種族に毒性があって今その症状がでてるとかなのかな……お医者にかかったほうがいいよって言ったんだけど、別に問題はないって聞いてくれなくて」

千早の言葉に、風視は難しい表情のままだ。

もしかして、やっぱりそういう事例があるのだろうか。

もしかして、不治の病とかだったらどうしよう。

「お医者にしてもあまり意味はないと思うな」

さあつと顔から血の気が引いていく気がする。

それは、お医者にしても治らないってことなのか。

青ざめる千早に、風視はなぜか軽く溜息をついた。

「とりあえず、その果物をお食べよ。はやくいってもたいして意味はないと思うからさ」

そう言った風視は、自分もまた置いていた掛け蕎麦の器を手にとった。

「ぼくはてつきり、千早ちゃんだと思ってたんだけどなあ」

「なにか？」

自分の名前が出たことに千早が反応すると、どうやら独り言だったらしく、風視はなんでもないとかぶりを振った。

少しばかり腑に落ちないことはあつたけれど、とりあえず風視に知らせたのだから、なんとかしてくれるはずだ。

そう思えば、今まで味もしなかった果物も、先ほどよりは甘くみずみずしく感じられた。

物騒な獣は相変わらず怠惰な様子で、ぱたんぱたん長い尾を左右にふって遊んでいた。

異変の原因

「たぶんね？」

そう前置きをして、風視が口を開いたのは。

千早が果物を平らげてまもなくのことだった。

「本人と直接あったわけじゃないからなんともいえないんだけどさ。症状だけ聞いてると、それ、恋わずらいだと思っただよね」

こい、わずらい？

ぽかんとした千早は、口をぬぐっていた布を握り締めたまま、ただ風視をまじまじとみつめる。

「恋わずらいだよ、しらない？」

「えっと……」

あっさりとした口調で問ってくる風視に、千早は慌てて知識を探った。

「あの、相手を想うあまり病気になっちゃいましたってあれですか？」

あの、多岐が？

千早はまさかと思ったのだが、風視は軽い調子でうなずいてみせた。

恋わずらい。

それは古来よりあるという心の病のことだ。

症状としては、浮かれたり沈んだり。寝ても醒めても相手のことが頭から離れず、ぼんやりしている。などといったものがある。

薬というものは特になく、誰でも長い人生一度や二度はおちいる病らしいが……

問題なのは、恋わずらいの拳句死んでしまう人がいるということだ。

「風視さん！！どうやってら治りますか？！」

特効薬など存在しないと知っているのに、千早は思わずそう尋ねずにはいらなかった。

恋わずらいの問題なところは、片思い時代にも当然かかるが両思いになってもそれが続くということなのだという。

片思い時代が、どうやってたら両思いになれるかという思考におちいつて浮かれたり沈んだりに振り回されるとすれば、両思いになったあとは、両思いになれたことに浮かれたかと思えば、別れたらどうしよう。嫌われたら、軽蔑されたら……と後ろ向き思考に振り回されて沈んだりするらしい。

「えと、あの、千早ちゃん？」

「多岐が……多岐が死んじゃったらどうしよう？！」

「えええ？」

確か先日六花が持ってきてくれた草紙にかかれていた物語には、海に棲む娘に恋焦がれて死んでしまう男の話が載っていたし、その前に天花が持ってきてくれた物語は、町民の娘が激しい恋の果てに豪商の嫁におさまったものの、嫌われたらどうしようとの後ろ向き思考に捕らわれついには臥せってしまうという内容だったような気がする。

目を白黒させている風視に、そういう症状があるらしいことを告げると。

風視は何故だか額を抑え、沈痛な面持ちで深く深く息を吐き出した。

「六花も天花も……いったい千早ちゃんになにを読ませているんだ……」

「私がいまに恋愛に疎いから、芽津で流行っているっていう草紙を持ってきてくれたらしいです。読んだら少しは心の機微がわかるんじゃないかって」

「……草紙の内容はあまり現実に即したものじゃないと思うよ……」

風視はつかれきったような表情でそう感想をのべ。
そのあとでふと思いついたように、わずかに眉を下げた。

「まあ、事実は小説よりも奇なり、とはいうし。海に棲む娘に恋焦がれるっていう異類婚譚だって実際にないわけじゃないんだけどねえ？　山に棲む鬼が町の娘に恋をした、とかさ」
「はあ……？」

千早はきよとした顔つきで瞬いた。
風視がなにをいつているのかいまいちよくわからないが、とりあえずは、物語ほど簡単に、人間は恋わずらいでは死なないということだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3848t/>

まどろみの月 めざめの陽

2011年9月27日03時15分発行